

平成 29 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士） 申請論文

島崎藤村

歴史と旅をめぐる語りの方

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻日本文学専攻

岡 英里奈

平成 30 年 3 月

目次

序章 4

第一部 歴史をめぐる語りの方法 22

第一章 脱「政治」化と「狂気」——和歌の引用をめぐって 23

- 一. はじめに 23
- 二. 和歌が生む亀裂 24
- 三. 平田国学の脱「政治」化 30
- 四. 「学問」としての置換 34
- 五. 「献扇事件」の脱「政治」化と「狂気」 39
- 六. おわりに 43

第二章 〈個〉の創出と共同体——島崎正樹「ありのまゝ」と『夜明け前』 47

- 一. はじめに 47
- 二. 病氣祈願としての王滝参籠 49
- 三. 「道」の発見としての王滝参籠 52
- 四. 〈個〉の創出と共同体 56
- 五. おわりに 60

第三章 中間にあることの両義性——『夜明け前』とマルクス主義歴史学、郷土史との対話 65

- 一. はじめに 65
- 二. 近代日本における「草莽」 68

- 三. マルクス主義歴史学における「中間搾取者」と『夜明け前』 71
- 四. 市村威人『伊那尊王思想史』における中間層と『夜明け前』 73
- 五. おわりに 76

第二部 旅をめぐる語りの方法 83

第四章 旅の語りと〈粹〉―「旅」の方法 84

- 一. 一九〇九年、伊豆の旅と三つの紀行文 84
- 二. 明治四〇年前後における「新しい紀行文」論 86
- 三. 藤村「旅」と花袋「北伊豆」、有明「豆北豆南」 89
- 四. 旅の語りと〈粹〉 94

第五章 「私」語りの可能性―『海へ』 99

- 一. はじめに 99
- 二. 「私」の「眼」への戸惑い 101
- 三. 「私」をめぐる編集作業 104
- 四. 引き裂かれた「私」と〈船中〉という空間 108
- 五. 「私」語りのもつ批評性 112
- 六. おわりに 116

第六章 「巡礼の旅」のポリテクス―一九三六年の南米訪問と『巡礼』 121

- 一. はじめに 121
- 二. 南米訪問の公的役割と場の編成 123
- 三. 「移民」か「棄民」か 126
- 四. 子弟の日本語継承をめぐって 130

- 五. 逃避としての「巡礼の旅」 134
- 六. おわりに 138

第七章 「大和言葉の碑文」と南米移民―戦前における忘却と戦後の再発見 143

- 一. はじめに 143
- 二. 藤村と「大和言葉の碑文」 146
- 三. 「笠戸丸碑」としての建立と忘却 150
- 四. 「藤村碑」としての再発見 154
- 五. 碑の名称をめぐる議論 156
- 六. おわりに 158

終章 163

補論 一九四〇年前後における岡倉天心の再発見と『東方の門』―藤村と日本浪漫派 168

【初出一覧】 180

【参考文献一覧】 181

序章

一・戦略としての〈無知〉

本研究は、島崎藤村の歴史と旅をめぐるテキストを対象に、その語りの方法を捉えようとするものである。ここで強調しておきたいのは、本研究では島崎藤村その人について、戦略として〈無知〉の姿勢をとることである。

三好行雄は、島崎藤村という作家を「レゲンダを編んだだけでなく、レゲンダをみずから生きる作家だった」と評している。レゲンダ―つまり伝説を自ら編み、そこに生きるとは、藤村という作家が自画像の描出に極めて意識的に取り組んだ作家であることを示している。そしてその自画像を支えてきたのは、「漂泊」「巡礼」「血統」「再生」といったモチーフの繰り返しであり、盛んな自己作品からの引用であった。そして以下に見るようにこれまでの先行研究もまた、その自画像をもとに藤村のテキストの読解を行ってきたのである。本論における藤村その人に対して〈無知〉である姿勢とは、そのような作家による自画像とは距離を取ること、作家が好んで使うモチーフによってテキストを読んだつもりにならないこと、モチーフの反復や自己引用によって作家が繋げる「一筋の自分の細道」二を疑うことに他ならない。

かつてこのような姿勢をとることで夏目漱石の文学を論じたのが、蓮實重彦『夏目漱石論』（青土社、一九七八年一〇月）であった。しかし本研究における〈無知〉の姿勢は、蓮實のそれとは少し異なる。蓮實がテキストそれ自体としての完結性に基づいて漱石文学の読み直しを図ったのとは違い、本研究はその時々における藤村の周囲にあったもの、またテキストの周囲にあったものを積極的に取り込むことで、藤村文学の読み直しを図るものである。それは例えば以下のような、藤村文学における通時的な軸―まさに「一筋の自分の細道」を見出そうと

する立場に対して、敢えて横のライン、共時的な軸を導入するということである。

三好は以下のように言う。

「新生」の告白に先立って、藤村は身辺のスキヤンダルを逃れたフランスへの旅を通じて、〈故郷〉としての父にめぐりあった。「夜明け前」の主題の端緒をはじめて発見したのも、おなじ旅先の眠れない夜であった。父は〈歴史〉への通路でもあった。／『若菜集』から「夜明け前」にいたる過程は、〈個〉から個をつむ状況としての〈家〉へ、そして〈家〉から家の母胎としての〈故郷〉へと回流し、遡源してゆく軌跡であった。東京へ遊学して以後、ほとんど足を踏み入れることのなかった馬籠に、藤村は「夜明け前」とともに帰っていったのである。(三好行雄「夜明け前」の反近代) 三、／は改行)

次節で見ていくように、この『若菜集』から『夜明け前』までを「個」から「歴史」へという一本の線に繋げ、その「歴史」発見の契機に「旅」を置くという作品論的な藤村文学の読み方は、島崎藤村研究という領域の伝統として長らく引き継がれてきた。そのような作品論的方法が文学研究の主要な方法として力を失いつつあることと、島崎藤村の文学が読まなくなっていることとはおそらく無関係ではない。

藤村文学の研究者として、本論もその功績に多くを負っている高橋昌子は、一九九四年五月に出版された『島崎藤村―遠いまなざし』(和泉書院)の「あとがき」において、以下のように述べている。

小著を書き終えて、私には、文学が何なのか、文学研究が何をすればよいのか、正直に言うともすますわからなくなってきた。構造分析的方法に傾斜する気持ちと、それへの違和感が私の中に共存しているということであろうか。／ヨーロッパでは古来、修辞ということが文学の大きな要素と考えられてきた。文学においては何よりも表現の豊かさが重視されてきたのだといえよう。構造分析やシステム論的文学論はそうした

文学的伝統の延長線上に必然性をもって成立したものだと思われる。ところが、近代日本の文学は修辭を否定しようとし、享受においても作家の生と直結した思想が重視されてきた。文学は表現の快樂としてではなく、哲学や思想に代わるものとして受け止められてきたといえよう。私達はその経緯を背負っている。私は、その重さに無頓着でいることが出来ないのである。

ここで高橋は、作家と作品とを切り離すテクスト論的方法が力を持つようになった研究状況に対し、作品論の伝統を引き継いできた者としての戸惑いを告白している。このように自身が学び、そして背負ってきた方法論と、研究界の動向との乖離に真摯に向き合おうとする立場からは、本論の姿勢はひどく冷淡で、まさに無知そのものに見えるかもしれない。事実、高橋は二〇〇七年九月に出版された『藤村の近代と国学』（双文社出版）において、ともすれば「作家や読者の実体性や主体性というものが空自化される」現代の文学論に警鐘を鳴らし、「個人とはそのように受動的なものなのか。たしかに九分九厘まではそうかもしれないが、そうした受動性に抗うエネルギーが個人の内にあるのではないか。だから人は苦しむのではないか、文学はそこに関わるものではないか」と自身の立場を明確に示し、やはり「書きつつ生きる」藤村を問うことを主題として、「その凄絶な様相」を作品から読み取ろうとしている。

しかし藤村に対して〈無知〉であろうとする本論の姿勢は、このような高橋の立場と決して矛盾するものではない。本論は島崎藤村という人物の实在をなかつたことにするのではない。一筋の道で結ばれる通時的統一性をもった像とは、異なる藤村像を描き出すことも可能なのではないかと考えるのである。通時的な統一性としての「主体」とは、過去の「主体」のある部分に対する忘却や意味の読み替えを必然的に孕むものであろう。藤村が繰り返し描いてきた自画像や作品論の方法は、そこで生じる「主体」のズレを不可視化するものであったといえる。本論が共時的な軸を置くことによって行おうとするのは、そのズレを可視化することである。

西田谷洋は、『認知物語論とは何か？』（ひつじ書房、二〇〇六年七月）の中で、物語テクストにおける「送り

手側の図／地配置」を読者がずらすことも可能だと述べている。「読者が図／地配置をずらせばテキストの表意作用も変容する」^四、本論が試みるのは、このようにして藤村文学における認知の枠組みをずらすということである。作家が描く自画像に対して〈無知〉の姿勢を維持しながら、その時々藤村の周囲、テキストの周囲にあったものには積極的に目を配る。そのようにして横軸で繋げられる「地」から、藤村のテキストを捉え直すようになるか、藤村の生や思想と強固に結び付けられてきた歴史と旅をめぐるテキストは、どのように読み直していくことができるだろうか。

二・作品論的藤村像の系譜

個別の作品に関するものは各章に譲ることにして、本節では本論が主な対象範囲とする時期、つまり藤村がフランスから帰国した一九一〇年代後半から一九三〇年代にかけての藤村の文学が、先行研究においてどのように論じられてきたのかについて概観する。先述した通り、藤村研究においては、その作品に藤村その人の生や思想の展開を読み取る作品論的方法が、伝統として強く残っている。

後述する中山弘明が詳細に論じているように、一九六〇年代から八〇年代における作品論の時代には、その「起源」として一九五〇年代前半における「国民文学」論争とのねじれた関係がある^五。「国民文学」の提唱者であった竹内好は、西洋における近代を基準として日本の近代における「歪み」を説く「近代主義」による文学批評——例えば中村光夫『風俗小説論』（河出書房、一九五〇年六月）や『近代文学』同人たちを批判し、その近代主義派の人々が忌避する「民族」の問題を、改めて思考の範疇に入れなければならないとした^六。そこから、以下のように「国民文学」の必要性を主張している。

たとい「国民文学」というコトバがひとたび汚されたとしても、今日、私たちは国民文学への念願を捨てるわけにはいかない。(中略) 民族の伝統に根ざさない革命というものはありえない。全体を救うことが問題なので、都合の悪い部分だけ切り捨てて事をすますわけにはいかない。かつての失敗の体験は貴重だ。手を焼くことをおそれて現実回避を行ってはならない。(竹内好「近代主義と民族の問題」七)

ここで竹内が「かつての失敗の体験は貴重だ」と述べていることから分かるように、竹内の「国民文学」論は日本浪漫派の再評価と一体のものであった。橋川文三による『日本浪漫派批判序説』(未来社、一九六〇年二月)をはじめとした一連の研究は、竹内のこの発言を端緒としている。前掲、中山論によると、三好行雄による作品論は、近代文学における「反近代」の系譜を捉えようとする「文学史」の志向に顕著なように、「国民文学」論の影響を多分に残しながらも、一方では「国民文学」論争当時に顕著であった「政治と文学」という枠組みからの脱却を目指し、文学および文学研究の政治に対する自立を目論んだものであったという⁸。

本論にとって興味深いのは、ことフランス行きから『夜明け前』にかけての藤村に対しては、三好を始めとする作品論が、日本浪漫派同人の一人であった亀井勝一郎による藤村像をまるごと引き継いでいる点である。つまり、脱却を図ったはずの「国民文学」論によって再評価されることになった日本浪漫派的な読み方が、ここでは無批判的に継続、継承されてきたのである。

亀井による藤村像は、以下の部分に集約されている。

自伝的作品を中心に考へるなら、彼(引用者注、藤村)は生涯にたゞ一つのテーマしかもたなかつたと云つて過言であるまい。「我とは何か」と問ひつゝけたのだ。しかし自己凝視は、自分の内部に向けられただけではない。彼を生んだ肉親、家、血縁、村落へと次第にひろがつて行き、十九世紀日本の考察にまで辿りついた。これは彼を貫く一本の線である。(中略) 文明批評は、単に知的な批評能力でなく、血統の探求を根底

とし、父祖の血の紐帯から離れて存在しえなかったことを言ひたい。／同時にいまひとつの線として、フランスの旅がある。生涯を画した最も重要な時期で、後半生の一切を決した要因はこゝに見出される。起死回生を祈らざるをえぬやうな生の危機感（「新生」）と、ヨーロッパの現実からかへりみた近代日本の成立過程（「夜明け前」）と、云はば自己の危機と日本の危機とが密着して、文明批評はこゝにはじめて「肉体化」されたと云つてよく、この面が感想集紀行集で展開された。（亀井勝一郎『島崎藤村論』新潮社、一九五三年二月）

引用部を要約してみると、まず亀井が提示するのは、「文明批評家」としての藤村像である。そしてその「文明批評家」としての藤村は、彼の徹底した「自己凝視」の過程によつて導かれたものであり、その必然的帰結として、「父」や故郷、さらに「十九世紀日本の考察」がある。そしてその「自己発見の深化」は、やはりフランスの旅を画期としている。つまり「新生」事件という個人的な危機が、その内省の帰結として「父」の存在を經由し、日本の危機の自覚に繋がった、というものである。

このような亀井の藤村像は、「マルクス主義世界観によつて解釈してくれた維新史明治史によつて教へられるよりもこの「夜明け前」によつて教へられるところが多い」^九という林房雄や、「個性とか性格とかいふ近代小説家が戦つて来た、又藤村自身も戦つて来たものゝもと奥に、作者が発見し、確信した日本人の血といふものが、この小説を支配してゐる」^十という小林秀雄など、一九三〇年代における藤村評価と地続きのものであることは言うまでもない。マイケル・ボードラッシュが論じているように、一九三〇年代における藤村の再評価は、林のような転向者によつて担われ^{十一}、また彼等がマルクス主義に代わつて見出した「日本的なもの」は、当時の流行語であつた^{十二}。またその「日本的なもの」の称揚を牽引した日本浪漫派と藤村との関わりや共通点については、近年では黒田俊太郎が盛んに論じている^{十三}。

問題なのは、そのように一九三〇年代の問題系を引き継ぐ亀井による戦後の藤村像が、その後の作品論におい

てもほぼそのままの形で受け継がれていることである。前節で確認したとおり、三好行雄の『若菜集』から『夜明け前』にかけての藤村像もまた、「家」「父」「故郷」を媒介とした「個」から「歴史」へという一本の線を描き、その契機として藤村のフランス行きという「旅」を置くものであった。

この亀井から三好へと引き継がれた藤村像は、その後の藤村研究においても長きに渡って効力を発揮している。例えば、一九八〇年一月に出版された十川信介『島崎藤村』（筑摩書房）所収の「二筋の街道」、「蘇るもの」は、亀井の藤村論を引用しながら、それを引き継ぐ形で議論を展開している。また十川は岩波文庫の『藤村文明論集』（岩波書店、一九八八年七月）の編者でもあるが、その「解説」でもまた、亀井の論を引用し、それに沿う形で藤村の「文明批評」を論じている。この系譜を引き継いでいるものに、近年の成果としては梅本浩志『島崎藤村とパリ・コミューン』（社会評論社、二〇〇四年八月）、細川正義『島崎藤村文芸研究』（双文社出版、二〇一三年八月）がある。

こうした作品論的藤村像の問題点は、日本浪漫派的藤村像を無批判的に継承していることが示すように、藤村の文学における政治性について、あまりに無頓着なことである。「文明批評」という言葉が覆い隠してきた藤村の政治性に、改めて目を向ける必要がある。また作品論が描く藤村像は、基本的に藤村自身が描いてきた自画像をそのまま受け入れる形になっていることも看過できない。もちろん、本論でも亀井や三好の議論を度々引用しているように、今なお示唆を与えてくれる鋭い読解もある。しかし前節でも述べたように、藤村の文学が孕む政治性に向き合い、また彼が描く自画像と距離を置く姿勢こそが、藤村を新たに読み直し、今後の文学研究全体へと藤村のテキストをひらいていくことに繋がるのではないだろうか。

三・同時代性・政治性への注目

近年の先行研究では、そのような藤村文学の政治性と、それと不可分な関係にある同時代性の問題が議論されている。代表的なものをとりあげると、まず国民国家論の立場からその政治性に注目するものについて、第一次世界大戦後という文脈から『新生』の読み直しを図った紅野謙介『『新生』における戦争―島崎藤村の「創作」と国民国家』(『日本文学』四四(一一)、一九九五年一月)、一九三〇年前後という維新史をめぐる三派鼎立という同時代状況の中で『夜明け前』の歴史の語りを官学アカデミズムと同様に「国民」のプロットに属するものと論じた成田龍一『『歴史』はいかに語られるか―一九三〇年代「国民の物語」批判』(日本放送出版協会、二〇〇一年四月)が挙げられる。同様の立場から藤村におけるナショナリズムの問題を批判的に論じたものに Bourdagh, Michael(2003) *The Dawn That Never Comes: Shimazaki Tōson and Japanese Nationalism*. New York: Columbia University Press が挙げられる。

同時代性に力点を置いているものには、以下のようなものがある。先述した昭和一〇年代における「転向」と藤村の再評価の問題を扱うマイケル・ボーダッシュ「転向と近代日本文学史という物語の成立―昭和十年代における島崎藤村の再評価」(前掲)、藤村の国学を同時代言説との関係から論じる高橋昌子『藤村の近代と国学』(前掲)、戦間期における「人民戦線」というスローガンのもと、藤村の周囲に集まった人物たちの思想・動向に注目する中山弘明『戦間期の『夜明け前』―現象としての世界戦争』(双文社出版、二〇一二年一〇月)は、特に本論第一部で扱う『夜明け前』の周囲にあったものの存在をとりあげている。

また第二部第六章で扱う一九三六年の藤村の南米訪問については、目野由希『『東方の門』執筆前の藤村』(『島崎藤村研究』三五、二〇〇七年九月)、「南米の島崎藤村―国策的国際文化交流の再考」(『文学研究論集』二六、二〇〇八年一月)が、藤村が初代会長を務めた日本ペン倶楽部と国際連盟脱退後の外務省政策との関わりを詳細に論じている。ほかに、戦時下の「文学館運動」をめぐる『文芸懇話会』と藤村の関わりを論じる大木志門『十五年戦争下の〈文学館運動〉―「文芸懇話会」と「遊就館」、そして島崎藤村』(『日本近代文学』九二、二〇一五年五月)、透谷の存在を媒介とした日本浪漫派と藤村との接近を論じる黒田俊太郎『二つの近代化論―島崎藤

村「海へ」・保田與重郎「明治の精神」(『語文と教育』三〇、二〇一六年八月)がある。

これらの先行研究によって、特に一五年戦争下における藤村と国策との関わりや、国粹主義的、全体主義的な思想との接近が、詳細に明らかになりつつある。黒田前掲論でも述べられているように、ここではこの時期の藤村の両義性ということが遡上に挙げられ、「文明批評」や藤村の国際性を重視する立場^{十四}と、藤村のナショナリズムを断罪する立場^{十五}との二項対立的な状況を乗り越えるような議論が展開されている。

さらに中山弘明は、『溶解する文学研究―島崎藤村と〈学問史〉(前掲)』において、戦後の日本近代文学研究における藤村の読まれ方の問題にまで視野を拡げている。戦後文学研究においてカノンであった、そして現在ではほとんど読まれなくなった藤村という存在を考えることは、日本近代文学研究のあり方そのものの変遷としても捉えられるわけである。

以上のような近年における先行研究の問題意識を、本研究もまた引き継いでいる。だが、近年の傾向として顕著なのは、一九三〇年代から四〇年代前半にかけての藤村の動向そのもの、あるいはその周囲に形成されていた場に注目が集まっているということである。その反面、藤村が何を書き、どう表現したかというテキストの読解には、そこまでの注意が注がれていない。テキストの読解を興味の外に置くことで、見えてくるものがあることはもちろん理解できる。しかしそれは、ともすれば従来の作家論・作品論のように、藤村その人の思想の展開を追うことに、テキストを従属させてしまう可能性もある。テキストは必ずしも作家の思想や意図に沿うものではないし、表現を読み込むことによっては見えてくる作家像というものもある。本論はやはり、藤村のテキストを通して、藤村文学を同時代の文脈へひらき、看過された政治性の検討へと促すことを試みたい。

また、先に言及した本論が導入する共時的な軸は、同時代のテキストだけではなく、特に第一部では幕末維新期のテキストを『夜明け前』の読みに導入している。藤村のテキストと先行テキストという同一平面上に置くことで、次節で詳述するように『夜明け前』の語りの問題を捉えようとするものである。そして同時代のテキストにおいても、例えば第四章、第五章のように、藤村のテキストと別作家のテキストを比較してみること、藤村

の表現の問題に注目し、その特異性を含めて同時代の文学表現の中に位置づけることを試みる。本研究の立脚地はテキストにあり、以下に述べていくように、語りの問題、表現の問題を主眼としていく。

四・歴史と旅をめぐる語りとは

以上の問題意識のもと、本論では歴史と旅をめぐる藤村のテキストについて考察していく。確認してきたように、藤村文学における歴史と旅は、これまで藤村その人の生や思想と強固に結び付けて読まれてきた。しかし、藤村文学における歴史と旅は、そのように彼の内面の問題だけに還元しきれるものではない。

まず歴史については、前節で言及した成田龍一が詳細に述べているように、一九三〇年前後において歴史、それも明治維新史を語ることは、歴史学のみならず文学においても、同時多発的な現象であったということである。つまり、これまで藤村個人の思想的営為として捉えられていた明治維新史への関心は、同時代の社会や文化の動向と重なり合うものであったのである。そこには、維新から六〇年ほどになる一九三〇年前後の現在において、「私たち」の起点、あるいは起源を知りたいという欲望があったと考えられる。また、その関心の対象が近代日本の始発点であったということからは、その後の「近代の超克」論にも繋がるような日本の近代化に対する省察の意図も含まれていただろう。歴史学においては、官学アカデミズムによる実証主義史観、マルクス主義による史観、国粹主義的な皇国史観という異なる立場からの維新史像が鼎立している状況であったし、郷土史も盛んに編まれた時期であった。また文学においても、改造社による『維新歴史小説全集』（一九三四・一九三六年）が刊行され、林房雄『青年』（中央公論社、一九三四年三月）や、江馬修『山の民』（全三冊、飛騨考古土俗學會、一九三八・一九四〇年）といった新たな書き手による歴史小説が登場した時代であった。本論第一部の目的の一つは、このような歴史をめぐる同時代的文脈において、藤村のテキストを捉え直したいということである。その問題意識は、

特に本論第一部第三章に強くあらわれている。

歴史をめぐるもう一つの問題は、それが語られるものである以上、必然的に孕んでしまう過去の事実に対する隠蔽や排除、読み替えに関するものである。現在問題になっているような歴史修正主義とは次元が異なるとはいえ、歴史はやはり、何よりもそれが語られる現在のための物語なのである。異なる歴史像が鼎立していた一九三〇年前後は、それが強く意識された時代であったと思われる。第二節で引用した林房雄の「マルクス主義世界観によつて解釈してくれた維新史明治史によつて教へられるよりもこの「夜明け前」によつて教へられるところが多い」という言葉からは、歴史が何よりも現在の自分たちのためにあるものという意識を強く感じ取ることができる。

藤村における歴史もまた、このような過去の出来事に対する隠蔽や排除、修正の問題と無関係ではない。本論第一章、第二章において、『夜明け前』の先行テキストである幕末維新期の史料をとりあげているのは、このような問題意識に基づくものである。藤村における歴史の語りが、過去の出来事の何を語り、また何を語らないのか。過去の出来事をどのように解釈し、意味付け、再編成することで、一九三〇年前後に向けた明治維新像を提示しているのかを読み取ることが、本論第一部におけるもう一つの目的である。

次に旅に関してだが、これも歴史と同様、藤村の旅の語りを、同時代の文脈、また政治性の問題として捉えたいと考えている。旅を語ること、また語られた旅を読むということは、歴史と同様、「私たち」を知りたいという欲望に基づくものである。国内の旅に関していえば、その土地ごとの地理や風景を語るとは、「国土」というものを再配置することに繋がる行為である。また海外の旅を語るとは、世界のなかの「日本」を立ち上げらせることに繋がる。この点については、藤森清や五井信が明らかにしている通りである^{十六}。

だが、藤村の旅の語りに改めて向き合う時、顕著に感じられるのはその語りの異質さである。本論第二部第四章、第五章で考察するのは、そのような本来期待されている役割を拒否するような藤村の旅の語りである。考察を通して、藤村の旅の語りが従来の「文明批評」の枠組みでは捉えきれない表現上の問題に満ちていることを示

すつもりである。表現の問題は、藤村研究において看過されがちな問題であるが、藤村のテキストを他作家の紀行文と並べてみることで、旅を語る藤村の表現の実践者としての側面を浮かび上がらせたいと考えている。

また旅の政治性については、本論第二部第六章、第七章で考察する一九三六年における藤村の南米行きを通して明らかにしたいと考えている。ここでの藤村の旅は、個人としての旅とは異なる公的な性格をもった旅であり、その政治性を孕んだ旅を、藤村のテキストがいかに語っているのかについて考えていきたい。またこの旅において、藤村は近代における移民すなわち移動が抱える問題とも向き合うことになるのだが、その際に生じる藤村の移動の時代が生む文化摩擦に対する態度や、日本語観の問題、また〈文学〉の言葉に覆われたナショナリズムの問題についても考察を通して明らかにするはずである。

本節の最後に、本論が藤村のテキストからどのような語り、そして語りの方法を読み取ろうとしているのかについて言及する。先述したように、本論は、藤村の繰り返し語る自画像、および作品論的藤村像によるテキストの図／地配置をずらすという目論見のもと、藤村その人の生や思想の展開という通時的な軸ではなく、共時的な軸として、藤村の周囲やテキストの周囲から、藤村のテキストを眺めようとするものである。また作品論的方法が統一性に重きを置くのに対し、本論は差異に注目する。このため、本論が想定する語りとは、藤村のテキストに別のテキストを対置し、比較することで立ち上がってくるものである。

このような本論の方法の原点にあるのが、よく知られたE・M・フォスターによる以下のようなストーリーとプロットの相違である。

われわれはストーリーを、「時間の進行に従って事件や出来事を語ったもの」と定義しました。プロットもストーリーと同じく、時間の進行に従って事件を語ったものですが、ただしプロットは、それらの事件や出来事の因果関係に重点が置かれます。つまり、「王様が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ」といえばプロットです。時間の進行は保たれていますが、ふたつの出来事のあいだに因果関係が影を落とします。(中略)

王妃の死を考えてください。ストーリーなら「それから？」と聞きます。プロットなら「なぜ？」と聞きます。これがストーリーとプロットの根本的な違いです。十七

フォスターによると、ストーリーとプロットとは因果関係の有無によって区別される。因果関係とはすなわち、時間の進行に従って起こる数々の出来事に、ある解釈、何かしらの意味付けが行われるということであり、フォスターが右の引用のあと、「プロットにおいては行動も言葉もすべて重要な意味がなくてはなりません。（中略）どんなに複雑なプロットでも、すべての出来事が有機的につながり、無機物がまったく混じらないものでなくてはなりません」と続けるのはこのためである。

本論第一部第一章、第二章における『夜明け前』とその先行テキストである島崎正樹の遺稿との比較は、基本的に以上のようなプロットとストーリーの関係として捉えている。もちろん、全てがこの図式に当てはまるわけではないが、出来事の羅列に留まる正樹の自伝的テキストや、その時々には詠んだ和歌や詩が記録されているだけの歌集から、『夜明け前』がどのような有機的な結び付きを提示し、物語化しているのかを捉えようとしている。さらに、本論が重視する差異の問題に深く関わるのが、そのストーリーからプロットへの「飛躍」十八にともなう選択と排除の問題である。前田愛は、『文学テキスト入門』（前掲）において、以上のストーリーとプロットの区別をもとに芥川龍之介「羅生門」論じた後、以下のように述べている。

しかし、どれほど精緻に仕組まれたプロットにしても、結局は様々な解釈のなかから選択された一つの解釈であるにすぎないだろう。読者はそこに語られたテキストの本当らしさを受け入れる代償として、作家が排除したもろもろの可能性からも遮断されてしまう。

このようなプロットがもつ選択と排除の性質は、坂部恵『かたり』（弘文社、一九九〇年二月）が提示する（か

たり」のあり方に通じるものがある。坂部はフォスターと同様に「へかたり」と「へはなし」を区別し、「起承転結のまとまりを失った「はなしにならない」「へはなし」がありうるのに対して、「へかたり」はそもそも起承転結のまとまりを欠いてはおよそ「へかたり」として存立しえない」という。そしてその「へかたり」は、「意識の屈折」を孕む故に「誤り、隠蔽、欺瞞さらには自己欺瞞にさえ通じる可能性」をそのうちに孕んだものとなると論じている。

先行テキストの方から藤村のテキストを捉え直すという本論の方法は、このような藤村のテキストにおける選択と排除、それに通じる語りの濃淡、誤り、隠蔽といった差異の問題をあぶり出すことに他ならない。それは、テキストの「虚構」に対し、「事実」を提示することでその虚偽を糾弾するものではない。先行テキストはあくまで可能性の集合体としてある。本論は、その先行テキストを読み込み、あり得たかも知れない可能性から、藤村のテキストの読み直しを図るものである。

また、第三章以降も、プロット同士の比較として、基本的にはこの方法に沿って考察を進めていく。それは「中間層」という幕末維新期の歴史的事実をめぐると同時代テキストと藤村のテキストを比較することであつたり、同一の旅行の体験を描いた他作家のテキストと藤村のテキストとを比較することであつたりする。また、「事実」ではなくとも、例えば一九三六年の藤村の南米行きの周囲にはどのような場が形成されていたのかということとは、当時の邦字新聞の記事などから読み取ることができる。そしてそこから考えられるあり得たかも知れない物語をもとに、藤村のテキストを見返してみる。以上のような比較、そしてそこから浮かび上がる差異から、歴史と旅をめぐる藤村の語りの方法を捉えていくことが本論の目的である。

五・本論の構成

本論文は、第一部「歴史をめぐる語りの方法」、第二部「旅をめぐる語りの方法」の二部構成になる。第一部に

は第一章から第三章まで、第二部には第四章から第七章までを収めている。

第一部第一章「脱「政治」化と「狂気」——和歌の引用をめぐる」では、『夜明け前』に引用されている島崎正樹の和歌に注目し、その和歌が示す意味と、『夜明け前』の語りが示す意味との齟齬を、テキストの中の亀裂として捉えるところから考察を始めている。そこから、『夜明け前』における国学と政治に対する語りの方法を明らかにすることを試みるものである。

第二章「〈個〉の創出と共同体——島崎正樹「ありのまゝ」と『夜明け前』」では、引き続き島崎正樹の遺稿に注目し、そこから『夜明け前』というテキストの読み直しを図ろうとするものである。特に「王滝参籠」の場面をめぐる、『夜明け前』における先行テキストの意味の転換について指摘する。そこから、テキストの表現の問題として、『夜明け前』はいかなる語りによって青山半蔵という〈個〉を浮かび上がらせているかについて考察する。

第三章「中間にあることの両義性——『夜明け前』とマルクス主義歴史学、郷土史との対話」では、幕末維新期における中間層をめぐる、一九三〇年前後に書かれた歴史叙述と『夜明け前』との比較を行ったものである。また同時に、『夜明け前』と不可分のものとして度々語られる「草莽」についても、歴史的にそれが帯びた意味を考察することで、『夜明け前』との安易な結び付けに疑問を呈している。

第二部第四章「旅の語りと〈粹〉——「旅」の方法」では、一九〇九年二月における伊豆の旅を題材とした、藤村、花袋、有明による紀行文を扱う。ここで藤村のテキストは、自らの旅を〈紀行文〉ではなく〈小説〉として書くという方法を意識的に行っている。旅を〈小説〉として書くとはいかなることなのか、同時代の紀行文論にも目を配りながら、藤村の旅の表現を読み解いていく。

第五章「「私」語りの可能性——『海へ』」では、一九一三年から一九一六年に渡る藤村のフランス行きのうち、特にその往復航海を描いた『海へ』を扱う。本テキストは従来の先行研究では、フランス経験後の「文明批評」あるいは私小説への転身という文脈で論じられてきたが、本論では同時代読者が指摘した表現への違和感に改めて注目し、先行研究の視点では捉えきれない、『海へ』の特異な表現である過剰な「私」語りに注目し、その可能

性について論じる。

第六章「『巡礼の旅』のポリテクス——一九三六年の南米訪問と『巡礼』」では、一九三六年における藤村の南米行きと、その旅をもとにする『巡礼』を扱う。特に藤村と現地の日本人移民たちとの間で形成されていた空間に注目し、藤村の旅がどのような公的性格を帯びていたかを、現地の邦字新聞などを通して明らかにする。それを踏まえた上で、その公的性格や政治性を隠蔽するような『巡礼』の語りの問題について考察していく。

第七章「『大和言葉の碑文』と南米移民——戦前における忘却と戦後の再発見」は、その南米行きに際し、藤村が現地の移民子弟たちに贈った「大和言葉の碑文」のその後を追うものである。旅とともに作家が届けた言葉は、その後どのように享受されていったのか。それをここでは、作家が届けた言葉の旅として捉え、戦前戦後、さらに現代にまで続く旅の歴史を探るものである。直接藤村の旅の語りを扱うものではないが、彼の旅を外側から捉え直す試みである。

補論として収めたのは、本論では扱いきれなかった一九四〇年前後における藤村に関するものである。『東方の門』の問題にも繋がる、この時期の藤村における岡倉天心の再評価について、同時代に同じく天心を盛んに顕彰した日本浪漫派の言説との比較を行った。

一 三好行雄「詩人藤村——『若菜集』の世界」(『島崎藤村論』至文堂、一九六六年四月)より引用。

二 島崎藤村『海へ』第二章第六節。引用は『藤村全集』第八卷(筑摩書房、一九六七年六月)による。

三 初出は『現代文学講座昭和の文学2』(至文堂、一九七五年六月)。引用は日本文学研究史料刊行会編『島崎藤村2』(日本文学研究資料叢書、有精堂出版、一九八三年六月)による。

四 前掲、西田谷『認知物語論とは何か?』第三章「事象認知とテクスト生成」より引用。

- 五 中山弘明『溶解する文学研究—島崎藤村と〈学問史〉』（翰林書房、二〇一六年十二月）第二章、第四章を参照。
- 六 「国民文学」論争については、臼井吉見『近代文学論争』下（筑摩書房、一九七五年十一月）を参照。
- 七 初出は『文学』一九五一年九月。引用は、『中村光夫・唐木順三・臼井吉見・竹内好集』（現代日本文学大系七
八、筑摩書房、一九七一年十一月）による。
- 八 前掲、中山『溶解する文学史』第四章を参照。
- 九 阿部知二、河上徹太郎、小林秀雄、島木健作、武田麟太郎、林房雄、舟橋聖一『夜明け前』合評会（『文学界』
一九三六年五月）。引用は前掲、日本文学研究資料刊行会編『島崎藤村2』による。
- 十 前掲『夜明け前』合評会「座談会後記「日本の作家だ」」。引用は前掲、日本文学研究資料刊行会編『島崎藤村2』
による。
- 十一 マイケル・ボーダッシュ「転向と近代日本文学史という物語の成立—昭和十年代における島崎藤村の再評価」
（文学・思想懇話会編『近代の夢と知性—文学・思想の昭和十年前後』（翰林書房、二〇〇〇年一〇月）参照。
- 十二 河田和子『戦時下の文学と「日本的なもの」—横光利一と保田與重郎』（花書院、二〇〇九年三月）参照。
- 十三 黒田俊太郎「二つの近代化論—島崎藤村「海へ」・保田與重郎「明治の精神」」（『語文と教育』三〇、二〇一六
年八月）参照。
- 十四 代表的なものに、細川正義「島崎藤村における国際性と文明批評」（『日本文藝研究』六八、二〇一七年三月）。
- 十五 代表的なものに、前掲、Bourdagh, Michael(2003)がある。
- 十六 藤森「明治三十五年・ツーリズムの想像力」（小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー—明治三十年
代の文化研究』小沢書店、一九九七年五月）、五井「表象される〈日本〉—雑誌『太陽』の「地理」欄 1895-1899」
（金子明雄ほか編『ディスクールの帝国—明治三〇年代の文化研究』新曜社、二〇〇〇年四月）を参照。
- 十七 E・M・フォスター『小説の諸相』（中野康司訳、みすず書房、一九九四年十一月）より引用。

十八 前田愛『文学テキスト入門』（筑摩書房、一九九三年九月）より引用。

第一部 歴史をめぐる語りの方法

第一章 脱「政治」化と「狂気」——和歌の引用をめぐる

一．はじめに

島崎藤村の小説『夜明け前』は、近代日本の出発点である明治維新を、彼の故郷である中山道馬籠宿を舞台に描いた小説であり、一九二九年から一九三五年にかけて雑誌『中央公論』に連載された。連載開始直前に、読者に向けて藤村自身が本作を「一つのスタディ」だと語っているように、『夜明け前』は藤村が直接馬籠やその近辺に足を運んで収集した史料や、主人公青山半蔵のモデルである実父島崎正樹による歌集や自伝、同時代の維新史研究や国学研究の書籍や論文など、実に膨大な史資料群を用いて「下から」見る明治維新を描いたものである。

『夜明け前』がいかなる史料を参照しているのかについては、これまでに北小路健二や鈴木昭一三による研究の蓄積がある。『夜明け前』とその参照史料との関係は、以下に述べるように極めて重要な問題であり、本論は彼らの功績に多くを負っている。しかし、そのような『夜明け前』の文献学的・注釈学的研究においては、両者の整合性に注意が向けられる分、『夜明け前』と史料との記述に相違が見られる部分については、単に虚構であるという指摘に留まり、その意味が詳細に検討されることがないという問題があった。

そこで本論第一章、第二章では、主人公青山半蔵のモデルである島崎正樹の遺稿に注目し、それらと『夜明け前』との差異を積極的にとりあげていく。それは、こうした先行テキストの方から『夜明け前』を眺め返す試みである。それによって、『夜明け前』というテキストが幕末維新期に書かれた史料といかに向き合い、史料に對しどのような選択と排除、あるいは意味内容の転換を行いつついるのかを明らかにする。

本章では、島崎正樹が書き遺した和歌に注目する。正樹の和歌は『夜明け前』全編を通して随所に引用され、半蔵の心情を代弁するものとして扱われている。しかし、本論が最初に問題とするのは、引用される前後の語り

との不協和音を生み出すような和歌である。それを本論では和歌が生んだテキストの亀裂と捉え、そこから思想とその政治性に対する『夜明け前』の語りの方法を明らかにしていく。結論を先取りすると、『夜明け前』の語り手には「政治」の拒否という一貫した姿勢がある。それは以下で触れるように先行研究においても度々指摘されてきたことだが、本論ではそれをテキストと先行テキストとの関係として論じ直し、さらにそのような先行テキストの脱「政治」化に、「狂気」の問題が深く関わっていることを示していく。

二・和歌が生む亀裂

『夜明け前』第一部第五章には、万延元（一八六〇）年、一年前に発する「横浜開港の影響」が「諸国の街道筋にまであらはれて来る頃」として、「銭相場引上げ」や「小判買の声」、急激な物価の高騰など「地方の動揺」を目の当たりにする半蔵たちの姿が描かれる。そんな中、半蔵の「時事を詠じた歌」として、以下の九首の和歌が登場する。

あめりかのどるを御国のしろかねにひとしき品とさだめしや誰
しろかねにかけておよばぬどるるをひとしと思ひし人は誰ぞも
国つ物たかくうるともそのしろのいとやすかるを思ひはからで
百八十の物のことぐくたくくうりてわれを富ますとおもひけるかな
土のごと山と掘りくるどるるに御国のたからかへまく惜しも
どるらるにかふるも悲し神国の人のいとなみ造れるものを
どるらるの品のさだめは大八島國中あまねく問ふべかりしを

しろかねにいたくおとれるどるらるを知りてさておく世こそつたなき

国つ物足らずなりなばどるらるは山とつむとも何にかはせむ

『夜明け前』第一部第五章二、以下一・五・二のように記す）^四

これらの歌からは、日本の良質な金貨が悪質な洋銀（ドル）で買われて大量に外国へ流出していくことを嘆く半蔵の姿が覗えるが、鈴木昭一によれば、これらの歌は、島崎正樹（重寛）の歌稿「松乃下枝」にある次の和歌を原歌としている^五。

あめりかのどるを皇国のしろかねにひとしき品とさためしやたれ

しろかねにいたくおとれるどるらるをひとしとおもひし人ハたれそも

国つ物たかくうるともそのしろのいとやすかるをおもひはからで

百八十の物のことぐくたかくうりてわれをとますとおもひけるかな

土の如山とほりくるどるらるに美邦の貨かへまくをしも

どるらるにかふるも悲し神邦の人のいとなみつくれるものを

どるらるのしなのさためハ大八しま国内あまねくとふべかりしを

しろかねにいたくおとれるどるらるをしりてさておく世こそつたなき

けちめもたてすさておくへしや

邦つ物たらすなりなはどるらるハ山とつむとも何にかはせむ

また同氏は、以上の歌の他に開国和親の時代に対する正樹（重寛）の心情を読み取れるものとして、『夜明け前』には登場していない四首を挙げている。

横はまによこさまえミしおきしより物のねたなくなりまさりつゝ

神国のひとのちからに成るものをえミしかともになとかうるらむ

国つ物えミしにうりて邦人のたしなむまになす人やたれ

他邦之往来止^{斯古乃}功績破^{流類事}袁斯叙惟思

さらに、鈴木が触れていないものとして、「松乃下枝」には同様の心情を歌った以下のものも収められている。

やよえみし／しかさかしらを／にくミけむ

皇国の為に／告し心は

言葉乃／不通国^登／交^{良布波}神乃掟^袁／背^{套也}将言

先に引用した正樹の九首には、悪質な洋銀を良質な「皇国のしろかね」と等価のものと決めたのは一体誰であるのかという怒り、または、「国つ物」を高値で売ったところで、支払われる金銭にどれほどの価値があるのかも知らず私欲に溺れる人々に対する批判が詠われている。さらにその後の四首では、「横はまによこさまえミしおきしより物のねたなくなりまさりつゝ」と、横浜開港に伴う物価の高騰を「よこさまえミし」によってもたらされたものとして「えミし」への敵意を剥き出しにする正樹の姿も窺える。『夜明け前』に引かれている先の九首は、正樹においてはこのような一連の文脈において詠われたものであった。それは、「やよえみし／しかさかしらを／にくミけむ」とあるようないわゆる「攘夷」思想として解釈できる。正樹にとっては、そもそも外国との交際（「言葉乃／不通国^登／交^{良布波}」）自体が「神乃掟」に背く悲しきこと・悪しきことであり、そこでは当然にして鎖国こそ「正道」——当為であり、徳川幕府による鎖国の歴史は未来へ受け継がれるべき「功績」であった（「他邦之往来止^{斯古乃}」

功績破流類事 袁斯叙惟思」。左記の二首は、そのような正樹の「攘夷」思想、鎖国を是とする心情がよく表されている。

ますらをのミたまよりなるかミなりはえミしのかしらうちくたきてな

あらかしめ後の世かけてひとくにの船なよせそとのらしゝものを

では、そのような文脈のもとで詠われたものを、『夜明け前』の語り手は半蔵によるそれとしてどのように扱っているのだろうか。『夜明け前』における先の九首は、半蔵と同じく平田派の思想を信奉する蜂谷香蔵が青山家を訪ねた際、日頃誰にも見せずにしまっていたものとして、その友の前に差し出される。

「わたしがこんな歌をつくつたのはめづらしいでせう。」と半蔵が言ひ出した。

「しかし、宮川先生の旧い弟子仲間では、半蔵さんは歌の読める人だと思つてゐましたよ。」と香蔵が答へる。

(中略)

「でも、香蔵さん、吾家の阿爺が俳諧を楽しむのと、わたしが和歌を詠んで見たいと思ふのでは、だいぶその心持に相違があるんです。わたしは矢張、本居先生の歌にもとづいて、いくらかでも古の人の素直な心に歸つて行くために、歌を詠むと考へたいんです。それほど今の時世に生れたものは、自然なものを失つてゐると思ふんですが、どうでせう。」(一・五・二、傍線は引用者)

これは、和歌が差し出された直後に交わされた二人の会話であるが、ここでは先に見たような、正樹による一連の和歌がもっていたはずの文脈——「攘夷」の心情がまったく切り離されている。半蔵と香蔵の二人は、そこに詠われている内容、つまり横浜貿易によってもたらされた様々な問題について語り合うよりも、歌を詠むという行為自体について語る。歌の中での切実さに反して、「半蔵さんは歌の読める人だと思つてゐましたよ」などと

った二人の会話は、全く暢気なものである。さらにここでの半蔵は、自身が和歌を詠みたいと思う気持ちを、宣長の意志の継承であると語る。つまり「もののあはれ」の精神の継承として自身の和歌を意味づけるのであるが、ここでは正樹の「攘夷」思想が、宣長的な「文学的主情主義」^六に転換されているといえよう。この二人の会話は、不自然なほどに和歌の内容とのズレがあるのである。

では、それらの歌の主題ともいえる当時の時勢についての半蔵の心情は、一体どこで語られているのか。先述したように、この場面では、「横浜開港の影響」としての「銭相場引上げの声」や「小判買いの声」が毎日のように半蔵の耳に届くような「地方の動揺」が描かれる（一・五・一）。「銭相場引上げに続いて急激な物価高騰を惹き起した横浜貿易の取沙汰ほど半蔵等の心をいら／＼させるものもない」（一・五・二）とあるなか、彼のもとを訪ねた香蔵もまた、「小判買い」の噂を持ち込んでくる。しかし、「半蔵さん、君はあの小判買いの声をどう思ひます」という香蔵の問いかけに対して、半蔵が発したであろう言葉は語られない。代わりに語り手は、以下のように彼の心情を代弁している。

近づいて来る六月二日、その横浜開港一周年の記念日をむしろ屈辱の記念日として考へるものあるやうな、さかんな排外熱は全国に捲き起つて来た。眼のあたりに多くのものゝ苦しみを見る半蔵等は、一概にそれを偏狭頑固なものゝ声とは考へられなかつた。（一・五・二）

先の一連の和歌から窺えた正樹の心情は、ここでの「さかんな排外熱」にあたるものといえる。つまり、正樹によって詠まれた和歌は、横浜開港による種々な影響に、「あらかしめ後の世かけてひとくに船なよせそとのらしゝものを」と、開港そのものを「禍事」と見なし、「え／＼し」への敵意を剥き出しにするものであり、語り手が言うところの「横浜開港一周年の記念日をむしろ屈辱の記念日として考へる」やうな、「偏狭頑固」な「排外熱」の一種である。しかし語り手は、半蔵に対しては、彼をその「排外熱」の外に位置づける。物価高騰などによる

「多くのものゝ苦しみ」を目の前で見ている半蔵にとって、さかんに湧き上がる「排外熱」は、「一概にそれを偏狭頑固なものゝ声とは考へられ」ない、一定の理解を示すことができるものである。けれども、その「排外熱」は、あくまでも彼自身の心情とは別物であり、右記のように客観視できるほど、彼はその外側にいる人物として描かれるのである。開国に伴う種々の影響は、確かに半蔵を「いら／＼させるもの」として示されている。しかし、語り手はそうした彼の「いら／＼」を、「多くのものゝ苦しみ」を目の当たりにしたうえでの苛立ちとしており、ここでの半蔵は、「苦しみ」を抱える人々に心を痛めはしても、それを極端な排外主義に結びつけるようなことはせずに、社会の有様をじっと眺める存在として描かれるのである。

そして先に触れたように、半蔵による時勢を詠じた和歌は、今度は半蔵自身の言葉によって、宣長的な「文学的主情主義」に変換される。つまり、自身の言葉を持つ半蔵にとっても、開国や諸外国との貿易は、それに伴う悪影響を嘆くことはあっても、その悪影響の「原因」としての諸外国を「排斥」しようとするまでには至らないものなのであろうか。ならば、彼が記したあの和歌達はどう捉えたらよいのだろうか。注意深く、「日頃誰にも見せずにしまつて」いた先の九首の歌を、ありのままの彼の心情の吐露として捉えるとき、ここに和歌をめぐつてのテクストの亀裂、もしくは半蔵という人物における矛盾が生じる。

また、この場面の前には、半蔵と香蔵の旧師である宮川寛斎が横浜で生糸の貿易にかかわる様子が描かれているが（一・四）、そのような旧師の「出稼ぎ」に対して、「国学者には君、国学者の立場もあらうぢやありませんか、それを捨てゝ、たゞ儲けさへすれば好いといふものでもないでせう」として非難する香蔵に対し、半蔵の口から出る言葉には、そこまでの非難の色は見えない。寛斎について「漢ごころ」が抜け切らないのではないかとする香蔵の言葉に対して、彼は「さう君に言はれると、わたしなどは何と言つていゝか分らない。四書五経から習ひ初めたものに、なか／＼儒教の殻はとれませんよ」（二・五・二）と、師匠の立場を擁護する。けれども、彼が詠った「百八十の物のこと／＼たかくうりてわれを富ますとおもひけるかな」という歌は、私欲のために諸外国と交易し利益を得ようとするものに対する批判の念が、彼の中に存在していたことを示している。ならば、半

蔵の寛齋に対する失望の念は、香蔵の言葉よりも更に厳しいものになるはずではないだろうか。

このように、語られる半蔵と彼が詠んだとされる歌との間には、見逃すことのできない差異がある。正樹の歌を当時の半蔵による生の声として引用しながら、語り手はその「攘夷」思想や、排外主義的な側面を隠蔽し、そうではないものとして半蔵を語る。ならば『夜明け前』の語り手は、半蔵をいかなる人物として語ろうとし、またさらに半蔵の人物像と深く関わるものとして、彼の信奉する国学、特に平田篤胤の思想を、いかなるものとして提示しようとしているのだろうか。

三・平田国学の脱「政治」化

まず、前節で引用した半蔵と香蔵との会話の直後に示される『夜明け前』における国学像を確認していこう。

半蔵等はすべてこの調子で踏み出して行かうとした。あの本居宣長の遺した教を祖述するばかりでなく、それを極端にまで持つて行つて、実行への道をあけたところに、日頃半蔵が畏敬する平田篤胤の不屈な気迫がある。半蔵等に言はせると、鈴の屋の翁には何と言つても天明寛政年代の人の寛闊さがある。そこへ行く

と、気吹の舎大人は狭い人かも知れないが、しかしその迫りに迫つて行つた追求心が彼等の時代の人の心に近い。(一・五・二)

半蔵が篤胤の思想に学ぶのは、宣長の掲げた思想を追求するその精神にある。またここでは宣長の「寛闊さ」が強調される一方で、「実行への道」を開いた篤胤には、「極端さ」や「狭さ」が感じられている。この図式は、全編を通してこの後も繰り返し語られるのだが、その篤胤における「実行」性や、それ故の「極端さ」や「狭さ」

が具体的に記されることはない。しかし、この篤胤認識に非常によく似たものを、市村威人『伊那尊王思想史』（下伊那郡国民精神作興会、一九二九年一月）に見ることが出来る。

篤胤は宣長の主張精神の在る所を体して、更に、之を極端にまで發展せしめた。宣長の研究は静的学究的であつたのに反し、篤胤のそれは著しく動的で、宗教的の熱度を加へ、巧に民衆の意向を捉へて、よく当代思潮の変動を促せることは、遙かに師翁を凌ぐものがあつた。宣長は、温厚真率玉の如き君子人であつたのに反し、篤胤の学風は鋒鏖鋭利、峻烈にして、よく皇国の元気を振興し、惟神の大道を宣揚し、忠君の志気を激励し、外国崇拜の風教を一変して、皇国の稜威の重んずべきことを知らしめた。（傍線は引用者）

ここでは、『夜明け前』における「あの本居宣長の遺した教を祖述するばかりでなく、それを極端にまで持つて行つて」という部分が、市村による「宣長の主張精神の在る所を体して、更に、之を極端にまで發展せしめた」に対応していることが分かる。また、『夜明け前』で語られる篤胤の「実行」性が、ここでの「篤胤のそれは著しく動的」とされるものに当たる。そしてまた、市村の提示した篤胤像には、より具体的なものが含まれている。市村は、宣長の研究が「静的」でかつ「学究的」な態度に終始したのに対し、篤胤の学風を「著しく動的」であり、「鋒鏖鋭利、峻烈」にして「忠君の志気を激励」し、そこには時に「宗教的の熱度」さえあつたと規定する。その「宗教的の熱度」という言葉の後に続く、「巧に民衆の意向を捉へて、よく当代思潮の変動を促せることは、遙かに師翁を凌ぐものがあつた」という一文を合せて眺めれば、これらの部分が『夜明け前』での「そこへ行く」と、気吹の舎大人は狭い人かも知れないが、しかしその迫りに迫つて行つた追求心が彼等の時代の人の心に近い」と対応し、つまり市村が「宗教的の熱度」さえあると規定した篤胤像を、『夜明け前』の語りは「狭い人」という一言に置き換えていることがわかる。

ここまでで、すでに『夜明け前』が市村の提示した篤胤像に依拠し、それを語りのなかに反映させていること

は明らかであろう。しかし、市村が「宗教的の熱度」と言った篤胤像を、語り手が半蔵における国学受容としてそのまま採用しなかった点、「狭い人かもしれない」という言葉に置き換えた点は、注目すべき事柄である。語り手が「宗教的の熱度」という言葉を敢えて使わなかったこと、敢えて具体化して述べなかったことは、半蔵が受容する篤胤像として、この言葉がそぐわなかったことを示している。つまり語り手は、半蔵に体现される平田国学から、「宗教的の熱度」と呼ばれるようなものを排除しているのである。

このような『夜明け前』の国学像の問題は、亀井勝一郎の以下の言葉のように、先行研究においても指摘されてきたことであつた。

半蔵は（中略）平田門人として終始してゐるが、「夜明け前」全篇を通して藤村の解釈を見ると、篤胤の所謂「窮屈なもの」は排除されてゐる。とくにその門下にはあらはれた極端な排外主義、独善的な実行力、フアナティシズム（狂信性）には警戒し、批判的態度をとつた。むしろ宣長風の精神にこれを変形し、宣長に重点をおいて、そこから半蔵の思想を見ようとしたやうである。（亀井勝一郎『島崎藤村論』新潮社、一九五三年一二月）

ここで述べられている「極端な排外主義」、「独善的な実行力」、「狂信性」の排除とは、即ち国学における「政治」性の排除を意味している。語り手によつて描かれる半蔵は、篤胤、さらには宣長についても、その露骨な「政治」性を悉く排されたかたちで受け入れ、体现する存在として描かれるのである。

そしてそうした語り手における、国学を政治的に「無害」にする―つまり脱「政治」化しようとする姿勢は、東山道軍の通行を迎える正樹／半蔵の様子から「天神地祇」や「祝詞」という言葉の排除によつて、半蔵におけるその行為の意味―「祭政一致」の理念を隠蔽したことにも表れている。まずは正樹について、その小伝「ありのまゝ」では、

是より先維新の始め慶応四年の春中山道鎮撫総督岩倉公の東下し玉ふや勤王有志の徒争て其軍に従ふ者多し
正樹爾時別老樓に独居し天神地祇を祭り官軍の鎮撫平定を禱る岩倉卿に其祝詞を貴覧に備ふ卿に召れて拜謁
す（島崎正樹小伝「ありのまゝ」、傍線は引用者）^七

と記されていた。つまり、正樹におけるこの行為は、平田門人としての、そして「勤王」を掲げ「王政復古」
を志す者としての、「祭政一致」の理念の表明であり、宗教的であると同時に極めて政治的な行為でもあったので
ある。しかし、この記述に対応する『夜明け前』における半蔵の様子は、以下のようになっている。

半蔵は独り一室に退いて、総督一行のために祈願を籠めた。長歌など作り試みて、それを年若な岩倉の公子
にさゝげたいとも願つた。（二・三・四）

ここでは、「ありのまゝ」の記述から「天神地祇を祭り」という言葉が消え、「祝詞」も「長歌」という言葉に
書きかえられている。それによって、ここでの半蔵の行為は個人的な領域に閉じ込められ、正樹において見られ
たような平田門人としての「祭政一致」の理念は切り捨てられてしまう。これは、語り手による露骨な「祭政一
致」のイデオロギーの隠蔽である。このように、『夜明け前』の語り手はことごとく半蔵の体現する国学を脱「政
治」化して語ろうとするのである。

そして語り手によって抜き取られた国学の「政治」性は、「武家の学問」（二・十一・三）としての水戸学に押
し付けられることになる。『夜明け前』第一部第六章五において、「足利氏木像梟首事件」^八を起して京都から逃走
してきた暮田正香（モデルは角田忠行）を馬籠の本陣に迎えた半蔵は、継母おまんの手を借りつつ、その先輩を
一晚匿うことになるのだが、「青山君、やりましたよ」と、その「実行」について「無造作にも、短気にも、突飛

にも、また思ひ詰めたやうにも」語る先輩を前に、半蔵は「物まなびするともがらの実行を思ふ心は、そこまで突き詰めて行つたか」と思うと同時に、「平田大人没後の門人と一口には言つても、この先輩に水戸風な学者の影響の多分に残つてゐることは争へないとも考へさせられ」ている。

さらに、同じく平田門人であり伊那地方における門人の中心的な人物である倉沢義髓についても、その「実行」性が批判されている（一・十一・三）。半蔵は水戸学を「武家の学問」、つまりは「封建社会」の産物として規定し、それと国学とを切り離すとき、国学者のなかにある「狂信性」、「極端な実行性」などとして表れる「政治」性をすべて水戸学に押し付ける。ならば国学者が行うべき「国事」とは、真の「実行」とは何なのか、それは明確に記されることはない。むしろここで抜き取られる「政治」とは、「狂信的」・「独善的」なものも含めて現実に行われるすべての実行ともとれる。半蔵がそうした「政治」、彼曰く水戸の思想をあらゆる場面で嗅ぎ付ける度に、繰り返し彼が思い出す本居宣長、平田篤胤の教えは、常に彼の心の中、言わば「言葉の世界」に終始するのであり、それが現実世界で実行され「政治」性を帯びた途端に、その国学のあり方は、語り手において拒否されるのである。半蔵における国学は、あくまでも「言葉の世界」という、政治的に「無害」な「学問」として体现される。そしてそれ故に、篤胤に対する曖昧な語りの代わりに、本居宣長に対する饒舌な語りが挿入されるのである。

四．「学問」としての置換

先に引用した部分には宣長に対して「寛闊さ」を見る半蔵の姿が語られていたが、以下は、その「寛闊さ」とは具体的にどういふことなのかが示されている。

国学者としての大きな先輩、本居宣長の遺した仕事はこの半蔵等に一層光つて見えるやうになった。何と

言つても言葉の鍵を握つたことはあの大人の強味で、それが三十五年に亙る古事記の研究ともなり、健全な国民性を古代に発見する端緒ともなつた。(中略)それらの異国の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢ごころ」をかなぐり捨てて、言挙げということも更になかつた神ながらのいにしへの代に帰れと教へたのが大人だ。(中略)大人が古代の探求から見つけて来たものは、「直毘の霊」の精神で、その言ふところを約めて見ると、「自然に帰れ」と教へたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復帰の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、又は大人のあの恋愛観も、物のあはれの説も、すべてそこから出発してゐる。(中略)半蔵等に言はせると、あの鈴の屋の翁こそ、「近つ代」の人の父とも呼ばるべき人であつた。(一・五・二)

『夜明け前』第一部一章二には、半蔵にとつての国学の意味が「言葉の世界に見つけた学問の歎び」と語られていた。あの場面では具体的に提示されることのなかつたその「歎び」の意味は、ここにあるような「言葉の鍵」、つまり言葉を頼りにした古代研究であり、それによる「健全な国民性」の発見である。「言葉の鍵を握つた」宣長による「古事記の研究」は、「言挙げということも更になかつた神ながらのいにしへの代」がいかなるものであつたかを明らかにした。そしてそのことによつて、これまで「所謂仁義礼讓孝悌忠信などといふやかましい名」によつて「きびしく人間を縛りつけて」きた儒教という「北方支那の道徳」も、禅宗や道教といった「南方支那の道徳」も、すべて「異国の借り物」であることが示される。語り手によると、宣長はそうした「異国の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢ごころ」をかなぐり捨て」た先にある「自然」なままの姿へ帰る道を、すべて「言葉」を研究することによつて教えてくれた。その「自然(おのづから)」なる世界への道がすなわち「古代復帰の夢想」であり、「中世の否定」、「人間の解放」であるという。

篤胤への語りの希薄さに対して、「あの鈴の屋の翁こそ、「近つ代」の人の父」とまで語る『夜明け前』の語りには、同時代における宣長の再評価を見ることが出来る。以下、近代の思想史研究において、宣長、また篤胤がどのように語られていたのかを参照しておく。

桂島宣弘は、明治三〇年代から四〇年代という「世紀転換期前後の時期、すなわち日清・日露戦間期」という
国日本の最初の跳躍の時期」を、「一国史」の内実を決するための重要な学問的確立がなされていた時期」と
し、そこに、「中国を差異化しての」、さらに「西洋との同一化という眼差し」をもってしての日本の「固有性」
の「発見」があったという。そしてこの時期において、芳賀矢一によって提示された「日本文献学」としての国
学の再評価が、「一国思想史」としての「日本思想史」という「学術知」の成立において決定的な役割を果たした。
桂島によれば、芳賀は「科学的・学術的」学問としての文献学を、国学Ⅱ文献学と規定し、その目的を「国民の
特性」の記述にあるとした。そしてそのように「学術知」としての明治における国学を提唱した芳賀は、「自らの
先駆としての宣長学を見いださしめ、かくて宣長に淵源するものとしての自らの学問」を位置づけたという^九。
そして、そうした「西洋との同一化という眼差し」による「文献学」としての国学の規定、宣長学の再評価を
芳賀から継承したのが、「狭義の意味の日本思想史学の確立者」⁺としての村岡典嗣であった。では、次にその村
岡典嗣において、宣長が、また篤胤がいかに言及されているかを見てみよう。

けだし Aug. Boeckh によって成立した文献学が、「認識されたところの認識」即ち「古代人の意識の再造」を
目的として、人間的教化の源泉たる希臘・羅馬の古典を対象に試みた学的業績は、その教養的精神やその学
問的精神に於いて、その研究の分野に於いて、よくわが国学の一致し共通するところであり、国学は実に、
独逸の文献学に先立つ一世代に、もとより全く独立に、同様の業績を、我が古典において実現したものであ
った。(村岡「国学の学的性格」^{十二})

村岡は、芳賀から受け継いだ「文献学」としての国学の規定を受け継いで、国学と文献学における「性質」の
一致を指摘し、さらには「国学は実に、独逸の文献学に先立つ一世代に、もとより全く独立に、同様の業績を、
我が古典において実現したものと」、「わが国学」の「西洋文献学」に対する先駆性を語る。もともと「文献学」

は、「形式的方面（文法学・注釈学・考証学等）」においても「内容的方面（哲学・宗教・道德・文学・芸術・法律・経済・自然科学等）」においても、「その広汎なる内容が、一個の学的系統として整へられており」、その点において「国学の不完全なる比ではない」とされるが、しかし村岡は、「説明学的方面と規範学的方面とを合せ有し、また往々にして混淆的傾向を有した」ことは文献学も国学も同様であり、その原因は「両者の学的性質」に内在しているとする。さらにそこで触れられた国学の「学的性質」について、村岡は国学における反儒教という視点から、国学による儒教への批判点を三つ挙げている。

国学の儒教反対は、大体三つの方面に存したと為し得る。第一は、一派の儒者の儒教信奉の余り生じた中華至上主義の、尊外卑内に対して、日本主義の尊内卑外を主張したことである。第二は、儒教の道学主義の余弊として生じた形式主義、煩瑣主義また偽善主義に対しての、簡素主義・自然主義の唱道である。人情の解放はその結果として説かれたのである。第三には、古典解釈上における儒教的（又仏教的）曲解の一切を排除して、儒教（又仏教）以前の古典と、その古意とを、その以前のありのままの真相に於いて明らかにしようといふ学的欲求である。（同前）

ここで引用した村岡による国学像は、先の『夜明け前』における宣長像と類似している。まず『夜明け前』での「言葉の鍵」というもの、言葉を頼りにした古代研究は、村岡の規定する「文献学」としての国学という見方と共通性を持ち、また国学における「儒教の道学主義の余弊として生じた形式主義、煩瑣主義また偽善主義に対しての、簡素主義・自然主義の唱道」による「人情の解放」は、『夜明け前』の語りが宣長に見る「人間の解放」に当てはまるだろう。さらに村岡は、ここに提示された三つの点、特に第一の点から国学における「規範学的方面」の展開を見ると言う。即ち、「そこに国学を以て道德的規範の学となす見解が生ずる。国学が日本主義の道德の信仰や提唱を、その重要な使命として有し、また目的として掲げたことは固より顕著である」（同前）というこ

とで、反儒教による日本主義から導きだされる「日本人」としての道德、規範性の要請であるが、それは『夜明け前』で言うところの「健全な国民性」である。

『夜明け前』の語りは、同時代においてすでに「近代學術の祖」としての地位を獲得していた宣長像から、半蔵における国学を描いていた。それは、先に引用した亀井によって、篤胤における「極端な排外主義、独善的な実行力、フアナティシズム（狂信性）」への「警戒」と、「宣長風の問題」への「変形」と捉えられていた。しかしここでは「変形」というよりも、半蔵において篤胤はあくまで宣長を継承するものとして受け取られていることに注意しておきたい。つまり、亀井ほどに明確な篤胤と宣長における断絶を、『夜明け前』の中で読み取れるかは疑問なのである。先の村岡は、篤胤について以下のように述べている。

彼（篤胤）は人格に於いて、固より宣長の如き温厚な学者ではなく、（中略）諸外教に対する敵愾心に燃えること烈しく、（中略）是に於いてか、古伝説に基いて、外教に對抗し得べき神道を建設しようとの衷心の要求は、自然に彼をして、その伝へようとし、また或る程度まで伝へた古代人の意識の垣を超えざるを得らしめた。その結果は、古史成分に見る古典の幾分の主観的改作と、古史伝に見る主観的若しくは理論的解釈となつた。（而も注意すべきは、両者の程度の、比較的少くして、その態度の破壊的でなかつたことで、是彼が宣長の学徒たる所以である。）（村岡「古神道に於ける幽冥観の変遷」^{十二}）

村岡による右の論稿が発表されたのは一九一五年のことであるが、これ以降の篤胤像が辿る歴史を背景において見たとき、この時期の篤胤は未だ宣長の継承者であって、篤胤における古典の「改作」や「主観的解釈」が指摘されつつも、村岡がそこに「破壊的」な逸脱を見えない点は注意すべきことであろう。この時点においては未だ篤胤は宣長の後継者として位置づけられ、そしてそれは、宣長の提示した国学が村岡において「道德的規範の学」として認識されていることに由来する。村岡における国学とは、「説明学的方面と規範学的方面とを合せ有

し、また往々にして混淆的傾向を有した」とあるように、古典注釈学としての科学性と、それによって明らかにされる「日本古来の精神」への回帰を提唱するという道徳規範性とが混淆した存在なのであり、その規定によって篤胤もまた、宣長の精神の継承者として国学の範疇に入り込むことになる。『夜明け前』においても同様に、篤胤があくまでも宣長の継承者として捉えられていることに注目しておきたい。ここに、単なる宣長との置き換えや、宣長的な平田国学の再解釈と安易には述べることのできない、あくまでも半蔵を平田門人として存在させる『夜明け前』の語りの特徴がある。そしてそれは、半蔵にとつての国学を脱「政治」化し、「学問」に置換することによって可能になるものであった。

五・「献扇事件」の脱「政治」化と「狂気」

では、ここで改めて先述の横浜開港による種々の影響を嘆じた正樹の和歌の、『夜明け前』における意義について考察したい。これまでに見てきたように、半蔵が詠んだものとして引用されている九首の和歌は、正樹において諸外国を「えミし」として敵視し、排斥を望む彼の心情を表したものであった。つまり正樹は『夜明け前』の語り手が言うところの、きわめて「政治」的な存在なのである。しかし半蔵においてはその「政治」性は容認されず、彼はあくまで「学問」としての国学に順じなければならない。ならば、なぜあの一連の和歌が引用される必要があったのであろうか。『夜明け前』におけるあの九首の和歌の意味とは、一体何なのか。

ここで、先に見た正樹による九首と、同様の心情を詠ったものとしてその次に挙げた八首の歌とを比べてみて欲しい。『夜明け前』で引用されている前者の和歌には、後者にある「えミし」という言葉が無い。そして、このことに関連して特に注目すべき場面が、後に描かれる半蔵の「献扇事件」（二・十一・五）である。そこでは、これまで追究してきた、語り手による「政治」への姿勢を確信させる、ある削除が行われている。

明治の七年甲戌の冬十月十七日東京の神田の錦町に天皇の行幸を拝みし時献りしつねに持たりし扇の奥書

古關邪管見録所載川北重憲主原城紀事総論也方今異教將復萌因表斯篇以備鑑戒且以示同志云

璞堂

かにのあなをふさきとめすはたかつゝみのちにくゆへきときなからめや
としつきにこゝろつくしてえみしらかうかゝひをるかやまとしまねを^{十三}

右に挙げたのは、モデルである正樹が扇に認めていたもの、即ち彼が「鑑戒」――いましめとして常に持ち歩き、天皇の行幸時に献じた和歌である。しかし、『夜明け前』では、正樹においては二首の和歌が記されてあったはずのものが、一首のみに減らされている。

彼の腰には、宿を出る時にさして来た一本の新しい扇子がある。その扇面には自作の歌一首書きつけてある。(中略)深い草叢の中にある名もない民の一人でも、この国の前途を憂ふる小さなこゝろざしにかけては、あへて人に劣らないとの思ひが寄せてある。東漸する欧羅巴人の氾濫を自分等の子孫のためにもこのまゝに放任すべき時ではなからうとの意味のものである。その歌。

蟹の穴ふせぎとめずは高堤やがてくゆべき時なからめや

半蔵

この扇子を手にして、彼は御通輦を待ち受けた。(二・十一・五)

半蔵における「献扇事件」では、先に引用した正樹の二つ目の和歌、「としつきにこゝろつくしてえみしらかうかゝひをるかやまとしまねを」という和歌が、意識的に削除されているのである。そして、この削除された和歌

にもまた、「えみし」という言葉が使われている。この削除を、先の九首の問題と合せて考えてみるならば、半蔵においては「敵」としての「えみし」、「日本」の「敵」としての外国人に対する敵意が排除されているのであり、半蔵が憂い嘆くのはあくまでも西洋諸国との交際によって起きた事象、西洋近代がもたらした日本の西洋化であるということが出来る。これをより突き詰めれば、西洋諸国が非西洋国に対して強引に開国を迫る「万国交際」という近代、そしてその結果としての日本の表面上における近代化に対する批判ということになるだろう。つまり『夜明け前』における「献扇事件」は、「攘夷」思想に基づく正樹の行動を「近代批判」として読み替えることではじめて可能になったのである。

しかし、たとえ半蔵のとった行動があくまでも近代批判として描かれたとしても、その場面の直前には、彼の行き過ぎた「政治的」行為をなんとか合理化して説明しようとする語りが挿入されている。つまり語り手は、半蔵による「実行」を彼の「乱心」―即ち「狂気」故の行為として理由付け、非合理の枠に押し込めて不可知の領域として処理することで、「学問」としての国学像を守ろうとするのである。そして、そのように行き過ぎた「実行」に及んでしまう半蔵の「狂気」を表すものとして引用されるのが、次の正樹の和歌である。

亡き人の言問ひもしつ幽界に通ふ夢路はうれしくもあるか（二・十一・二） 十四

「献扇事件」という、憂国の情に耐えかねた末の「実行」の直前、馬籠を離れ神祇官の後身である教部省に勤務していた半蔵は、国学の衰退と急速な勢いで進む文明開化の勢いに失望し、「この世の旅を半ばに正路を失った人」（同前）と記される。ひどく思い疲れた日に、仮住まいの枕元で「不思議な心地」を辿る彼は、途方に暮れながら町を彷徨い、ふと普段気にも留めないような「見知らぬ人の眼」を見つける。それはどう見ても「恐ろしい眼」、「こちらの肩をすくめなくなるやうな眼」である。「かういふのが夢かしらん」と歩みを進めるうちに、彼は「大きな河の流れてあるところ」で、亡き父と母に出会う。

その時は彼も一生懸命に母を呼ぼうとしたが、あいにく声が咽喉のところへ干からびついたやうになつて、どうしてもその「お母さん」が出て来ない。(中略)思はず彼は自分で自分の揚げたうなり声にびつくりして、眼をさました。(二・十一・二)

この場面は、半蔵における「不思議な心地」の体験として、目が覚めるまで現実とも夢とも判別のつかないような描かれ方をしており、また半蔵と死者達との対面は、この世とあの世の境界を彷徨うような半蔵の姿を浮き彫りにする。先に引いた正樹による和歌は、以前に半蔵が父母の夢を見た時に歌った「こんな自作の歌」(二・十一・三)として思い出されるのであるが、まさに「幽界に通ふ夢路」というに相応しく、この世とあの世を繋ぐような幻の世界を歩む半蔵の姿を象徴するものとなっている。そしてこうした幻の世界を巡り、時に見知らぬ「恐ろしい眼」の恐怖に襲われる半蔵の姿とは、まさしく行き場(「正路」)を失った彼の苦悩と失望の深さを物語るものとして位置付けられ、挫折と苦悩の末の、後の彼における「狂気」の予兆としての意味を与えられている。

つまり、後の彼が起す万福寺への放火未遂と同じように、ここでの半蔵の「実行」にも、苦悩の末という、感傷的、同情的な留保が加えられつつも、結局は「乱心」「狂気」という一方的な価値判断がなされているのである。「献扇事件」は、あくまでも「狂気の沙汰」のひとつとしてしか描き出されない。「どうして其方はそんな行為に出たかと言はれても、わたしには自分の思ふことの十が一も答へられませんでした」(二・十二・一)という半蔵自身の言葉にも表れているように、その「実行」は、「正気」の彼自身にも説明し得ない非合理の領域へと押し込まれてしまう。『夜明け前』における「実行」、即ち「政治」への立場は一貫しており、それは、「学問」としての国学とは結びつき得ないもの、「狂信的」なものに他ならないものとして位置付けられているのである。

六・おわりに

ここまでの考察を整理しておくと、まず本章第二節では、『夜明け前』に引用されている正樹の和歌について、その元々の文脈を正樹の「攘夷」思想として位置づけた。しかし、『夜明け前』の和歌の前後の語りを分析すると、その文脈としての「攘夷」思想が半蔵においては反映されていないことを示した。そこから第三節、第四節では、半蔵における国学が、脱「政治」化―すなわち「実行」ではなく「学問」として置換されていることを指摘し、それが同時代における国学像を踏まえたものであることを明らかにした。

そして第五節では、ではなぜ語り手が回避する「政治」性をもった正樹の和歌が、敢えて引用される必要があったのかという疑問から、改めて『夜明け前』における和歌の選択について考察した。それによって、「攘夷」思想として終始一貫した思想に基づく正樹の和歌や行動から、「えみし」の言葉に象徴される排他性を抜き取ること、それを半蔵における近代批判として描き直すという『夜明け前』の脱「政治」化の方法を明らかにした。しかし、特に半蔵の「献扇事件」については、たとえそれが近代批判のかたちになっていたとしても、『夜明け前』が回避し続けてきた「政治」性を帯びざるを得ない。そこで『夜明け前』において選択されたのが、半蔵の「実行」を「狂気」として語るという合理化の方法であった。『夜明け前』の第一部と第二部については、発表当時から語りの性質の違いを指摘する声が少なくないが^{十五}、この点から見れば、『夜明け前』の語りの方法は終始一貫しているといえる。

興味深いのは、この一貫する脱「政治」化の過程を追っていくと、方法としての「狂気」が浮かび上がるということである。藤村文学における「狂気」は、『春』（自費出版、一九〇八年一〇月）の青木、また『家』（自費出版、一九一一年一月）の父、「ある女の生涯」（『新潮』一九二二年七月）のおげんなどを通して繰り返し描かれ、北村透谷と藤村との関係、父や姉から受け継がれる「血統」を語るモチーフとして読まれてきており、『夜明け前』の「狂気」もその延長線で捉えられてきた^{十六}。しかし本論の考察を踏まえると、モチーフとしての「狂気」は、

半蔵の政治行動を脱「政治」化するための方法として読み直すことができる。歴史を語るという、ある意味で史実という名の拘束を受けつつも、それを一九三〇年前後の現在に描き直そうとする過程の中で、モチーフの意味にズレが生じたと考えられるのである。

また、『夜明け前』が連載された一九三〇年前後は、五・一五事件（一九三二年）、二・二六事件（一九三六年）に代表されるような「昭和維新」の時代、また国体明徴運動のように「不敬」や「叛逆」といった言葉が飛び交う時代でもあった。本論第三章では、その思想や行動に共感した文学者の存在についても触れているが、先行研究においては『夜明け前』もまた、そのような思想と親和性をもつものであると論じられることが少なくない^{十七}。しかしこれまでの考察を踏まえると、『夜明け前』の語りはそのような発表当時における現実世界に繋がるような「政治」性を、極めて危うい方法ではあるが、やはり拒絶していると考えられる。しかし問題は、そのように分かりやすい「政治」性を抜き取り、一見イデオロギーとは無関係にあるものとして自らを提示する『夜明け前』延いては藤村文学の語りにあるだろう。本論第六章では、その問題についても考察するつもりである。

一 島崎藤村『夜明け前』を出すについて（『中央公論』一九二九年一月号）。

二 北小路健『木曾路文献の旅』正、続（芸草堂、一九七〇年七月、一九七一年五月）。

三 鈴木昭一『夜明け前』研究（桜楓社、一九八七年一〇月）、『夜明け前』論―史料と翻刻』（おうふう、一九九四年二月）、『夜明け前』研究―史料と翻刻』（おうふう、一九九八年一〇月）、『夜明け前』『東方の門』研究―史料と翻刻』（おうふう、二〇〇八年一月）など。

四 以下、『夜明け前』の引用は、『藤村全集』第十一卷（筑摩書房、一九六六年九月）、第十二卷（筑摩書房、一九六六年一〇月）による。

五 鈴木前掲『夜明け前』論―史料と翻刻』所収、島崎正樹（重寛）自筆歌稿「松乃下枝」（翻刻）より引用。以下も同じ。

六 松本三之介「幕末国学の思想的意義―主として政治思想の側面について」（芳賀登・松本三之介校注『国学運動の思想』日本思想史大系五一、岩波書店、一九七一年三月）参照。

七 『藤村全集』別巻（筑摩書房、一九七一年五月）四男春樹編島崎正樹遺稿『松か枝』より引用。「ありのまゝ」は、大正元年一月に「四男春樹編」として刊行された島崎正樹遺稿『松か枝』の末尾におかれているが、その原本である正樹直筆の「安理能萬磨」は、現在藤村記念館に所蔵・展示されている。こちらの「安理能萬磨」は鈴木昭一によって翻刻されているが、藤村編「ありのまゝ」とは、漢字・片仮名交じり↓漢字・平仮名交じりなどの本文の変更が見られる。詳細は鈴木『夜明け前』論―史料と翻刻』（おうふう、一九九四年二月）を参照されたいが、その内容を解読する上では大きな変更は見られないため、便宜上本論では藤村編『松か枝』における「ありのまゝ」を使用する。

八 足利氏木像梟首事件については、前掲市村『伊那尊王思想史』参照。

九 桂島「一国思想史学の成立―帝国日本の形成と日本思想史の「発見」」（西川長夫ほか編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、一九九九年二月）より引用。

十 同前。

十一 村岡典嗣『増訂 日本思想史研究』（初稿版は一九三〇年二月、岩波書店、一九四〇年一〇月）より引用。
十二 同前。

十三 前掲島崎正樹遺稿『松か枝』より引用。この歌集以外にも正樹はこの二首を度々記録しており、正樹にとっての「猷扇事件」は、『夜明け前』における半蔵の「狂気」の発現としての位置づけとは、異なるものであったことがうかがえる。

十四 前掲島崎正樹遺稿『松か枝』に収録。

^{十五} 先行研究においては、第一部は馬籠を中心とした地方史に重点が置かれているのに対し、第二部は青山半蔵の個人史に重点が置かれていると論じられている。服部之総「青山半蔵―明治絶対主義の下部構造」『文学評論』一九五四年一月）などを参照。

^{十六} 佐藤泰正『ある女の生涯』―『春』から『夜明け前』のはざままで』（『国文学 解釈と観賞』五五（四）、一九九〇年四月）。

^{十七} 北條浩『島崎藤村『夜明け前』リアリティの虚構と真実―木曾山林事件に見る転落の文学の背景』（御茶の水書房、一九九九年八月）。

第二章 〈個〉の創出と共同体―島崎正樹「ありのまゝ」と『夜明け前』

一．はじめに

前章で言及した『夜明け前』とその参照史料をめぐる先行研究の問題は、本章で扱う『夜明け前』の重要な参照史料である島崎正樹の自伝的テキスト「ありのまゝ」に対しても当てはまる。管見の限り、「ありのまゝ」と『夜明け前』との関係に焦点を当てた先行研究は、鈴木昭一による一連の研究¹が唯一のものである。しかし鈴木論の目的は「ありのまゝ」と『夜明け前』本文との整合性を明らかにすることにあり、『夜明け前』の虚構の問題については十分な考察は行っていない。そこで本章では、「ありのまゝ」と『夜明け前』の語りを比較し、『夜明け前』が島崎正樹という実在の人物を青山半蔵としてどのように語り直しているのかについて分析する。

「ありのまゝ」(原題「安理能萬磨」)は、島崎正樹による自身の天保二(一八三一)年の誕生から明治七(一八七四)年頃までの半生を記録した自伝的書物であり、『夜明け前』の青山家の歴史や半蔵に起こる出来事の多くが、この史料をもとに語られている。藤村編『松か枝』に収録されている「ありのまゝ」²は、原文のカタカナを藤村自身がひらがなに直したものとなっており、原本「安理能萬磨」は鈴木昭一によって翻刻されている³。また、原本には、本文の下に〈葛ノ袴地ヲ賜ヘリマデハ友人小松氏ノ説 元治以下ハ正樹、自記〉とあり、つまり「正樹初名は…」から始まる島崎家の歴史と、正樹の生い立ちから独学の日々、師や学友、国学との出会いや結婚、村内における貧民の救済と、それに対する尾張藩からの表彰までが「友人小松氏」による記述で、それ以降が正樹の筆によるものとなる。その「友人小松氏」の記述にあたって、正樹がどの程度の干渉を加えたのかは不明であるが、前半部と後半部では記述の方法においても相違が見られる。

前半部は、先に挙げたようなそれぞれの出来事が時系列に従って記述されているのに対して、後半部の記述は、

必ずしも時系列に沿ってはならず、水戸浪士の通過、父吉左衛門の病とその治癒祈願のための王滝御嶽神社への参籠、父の死、島崎家の貧窮、東山軍の通過、山林事件と戸長免職など、正樹によつて選択された出来事や主題が、互いに関連し合うことなく、それぞれ独立したエピソードとして叙述されている。例えば、後半部の始めに記される水戸浪士の通行は元治元（一八六四）年十一月のことであるが、その後記されている父の病氣祈願のための王滝参籠は、元治元年の四月のことであり、こちらの方が半年ほど前の出来事になる。そしてそれ以降の記述は安政五（一八五八）年からの二度の大火や慶応二（一八六六）年の飢饉、維新後の問屋本陣庄屋の廃止などについて触れられ、島崎家の財力が正樹の経済面での無能もあいまって徐々に落ち込んでいく過程が記されるのだが、先述したようにそれらのエピソードが相互に関連を持つものとして描かれることはない。

その一方で『夜明け前』は、上記のような正樹の個人史と馬籠やその周辺地域の歴史、そして黒船来航以降の国家史という次元の異なる三つの歴史を組み合わせて叙述を展開しており、語られるエピソード同士には、何らかの影響関係や因果関係が付与されている。そしてここでは、正樹の個人史や馬籠とその周辺の地域史が、より高次に位置する国家史の枠組みに沿って意味付けられ、語り直されているわけだが、その点に関しては成田龍一による詳細な分析がなされている^四。しかし本章が注目したいのは、そうした国家史レベルからの意味付けを背景としながら、島崎正樹に関する個々の出来事が、『夜明け前』においてはどのように語り直され、解釈し直されることでひとまとまりの歴史Ⅱ物語として繋がられているのかという点であり、さらにはそうして描かれた物語のなかで、島崎正樹という人物が、青山半蔵という小説の登場人物として、いかに描かれているのかということである。

こうした人物像をめぐる正樹と半蔵との差異、もしくは半蔵という人物像の特徴については、具体的な史料との比較によらないものの中でもすでに多くの指摘がなされている^五。代表的なものとしては、前章でも言及した「極端な排外主義、独善的な実行力」といった平田門下における「ファナティズム」への半蔵の批判的態度とその思想の「宣長風の精神」への変形という亀井勝一郎による指摘^六、また十川信介による、正樹の実生活上における

不義―異母妹お喜佐との関係という「過失」の排除という指摘がある。しかし、こうした先行論の問題点は、その差異や半蔵という人物像の「起源」を、作者藤村の国学認識や「十九世紀日本の考察」といった作家の思想的営為の問題のみに還元してしまうという点にある⁸。

本章では、このような従来の作家・作品論的解釈を克服するために、語られた内容やそれに付随する意味の差異、そしてそこから浮かび上がる正樹から半蔵への人物像における変化を、その「起源」とされる作家または同時代の認識ではなく、それらの差異を生み出す描き方そのものに注目したい。具体的には、「ありのまゝ」という史料とそれを参照する『夜明け前』、そして島崎正樹と青山半蔵との関係を、実像と虚像の関係として捉えるのではなく、ある人物とその人物の経験についての描き方の違いと見做すことで、それらの差異を考察していく。

以上の点を踏まえて、次節からは「ありのまゝ」と『夜明け前』における正樹／半蔵の王滝御嶽神社への参籠の場面を中心として分析を進める。それは以下に見ていくように、この場面に「ありのまゝ」と『夜明け前』における語りの差異が最も顕著にあらわれているからであり、さらに『夜明け前』におけるこの場面は、テキスト全体を通しての青山半蔵の描かれ方を最も象徴的にあらわしているからである。

前章では、和歌の引用のされ方の分析を通して、青山半蔵という人物が、いかに描かれた時代を「当時」とみなす視点を体現しているかについて考察してきた。その視点は、一九三〇年前後というある程度達成された〈近代〉からの視点と言い換えることもできる。本章では、特に表現の問題に注目することで、日本の近代とは何かを問う『夜明け前』そのものが体現する〈近代〉性を浮かび上がらせたい。

二・病氣祈願としての王滝参籠

前節で述べたように、「ありのまゝ」において描かれる個々の出来事は、互いに関連性のないままに記された、

いわば出来事の羅列でしかないものである。しかしながらエピソード単位としてみれば、「ありのまゝ」における個々の出来事の叙述は、それぞれに主題を持ち、時間軸に沿った記述がなされている。そしてそのような正樹によつて選ばれ、記された様々なエピソードの中には、それだけの単位で見れば物語性のあるプロットとして判断できるものも含まれている^九。特に正樹の王滝御嶽神社への参籠は、以下に引いたように、病に苦しむ父の姿を見た正樹が心を痛めたために、その治癒を医薬の神である大巳貴・少彦名に祈りに行くという、その行為に対する理由や意味づけが記述されている。そしてその後の記述も、参籠の甲斐あつて父の体調は回復し、しかし一年後にはまたしても病に倒れ、治療や看護を尽くすも翌年には亡くなつてしまふという明確な結末をもつのである。

三十二歳の時父中風病を發し右の半身不仁なり最初病の發するや口言ふこと能はず手動すこと能はず治療手を竭し漸にして半身癒ることを得たり父性淨潔を好て自ら庭園及宅地を掃除す病起しより以来右手萎て箒を執るに不便なり又字を書するに便ならず素と俗様を善す字体麗なりしも病後小字を書くこと能ず宛も八九歳の児童の書の如し正樹に語て曰吾病起りしより治療の効に依て半身の自由を得て食事便事独自にして事を弁ずるは幸なり然れども箒を執り筆を執るの二事の不自由なる誠に悲むべしと時々嘆ぜらる正樹斯言を聞毎に心刺さるゝが如く悲嘆に勝る能はず思惟するに御嶽の神は木曾の総社にして（今郷社となる）大巳貴少彦名の二神なり医薬の神なりいかで彼社に参籠して誠心を以て父の病を瘳らばやと思發して元治元年の四月彼社に参籠して三昼夜寢食安んぜず懇禱祈念す爾時祈て曰僕吾が稟得たる齡の数幾年ありとも其中を耄年返し上げ奉りて其を父の病に看易へ玉ひて直し賜ひ癒し賜へ猶一年にて其病を償ふに足らずば二年三年の命数を返上奉るも辞む所に非ずいかで父の病を直し賜へと篤く禱り家に歸りて神撰の撒を持らし来て父に呈す父悦ばるること限なし^十

「ありのまゝ」において読み取れるのは、父吉左衛門の病状に心を痛め、その回復を望んで医薬の神に祈りを

捧げる正樹の姿である。父の発病当初、その病状は「口言ふこと能はず手動すこと能はず」といった深刻なものであったが、治療を尽くしたことによってなんとか「半身癒ることを得たり」というところには回復した。しかし、元来「性浄潔を好て自ら庭園及宅地を掃除」していた父が、「病起しより以来右手萎て箒を執るに不便なり」というように、箒を握ることも難しくなり、また書をするにも、もともとは「字体麗なり」であったのが、今では「八九歳の兒童の書」のようなものしか書けなくなってしまった。父は正樹に対し、治療のおかげで半身の自由を得ることが出来、「食事便事独自にして事を弁ずるは幸」せである、けれどもこのように箒を執ることと筆を執ることのできないのは誠に悲しいと嘆く。正樹はその歎息を聞く度に、「心刺さるゝが如く悲嘆に勝る能はず」と、自身も心を痛めていた。そこで木曾の総社であり、医薬の神である大己貴・少彦名の社である王滝御嶽神社への参籠を思いつき、元治元年四月にそれを実行したのである。そこでの正樹は、「三昼夜寢食安んぜず懇禱祈念す」と、ひたすら神に祈りを捧げ、自分に与えられた寿命の一年、それで足りなければ二年でも三年でも返上してかまわないから、なんとか父の病を治して欲しい、父の寿命を少しでも延ばして欲しいと神に伝える。こうした「ありのまゝ」の叙述からは、いかに正樹の参籠に込めた想いが深かったかが分かる。正樹の王滝参籠は、言うまでもなく父の病氣治癒の祈願のためであり、それが参籠に込められた意味のすべてであった。

このような「ありのまゝ」における記述に対して、『夜明け前』の語りを対置してみると、そこではまったく関連をもたなかったはずの王滝参籠と水戸浪士の馬籠通過という二つの出来事が、ある必然的な関連性をもつものとして語られている。そしてそれは、王滝参籠においても水戸浪士の通行においても、語られる半蔵のあり方が、常に「平田門人」としての彼であることに由来している。水戸の浪士を待ち受けるときの半蔵を描く場面では、「平田門人としての彼が、水戸の最後のものとも言ふべき人達の前に自分を見つける日のこんな風にして来ようとは、猶々思ひがけないことであつた」（二・十・三）と、平田国学とも関係の深い水戸学の思想に殉じようとする人々との思ひがけに、小さな感激を覚える様子が描かれている。そしてまた、以下に見ていくように、王滝御嶽神社への参籠の場面でも、私達は「平田門人」としての半蔵に出会う。二つの出来事は、激動する世界に対面する

「平田門人」半蔵によって経験された出来事として、その苦悩や感激が描かれているのである。このことは、『夜明け前』における半蔵の王滝参籠が、父の病のための祈祷の他に、半蔵においてはより重要なもうひとつの意味をもつ出来事となっていることを示す。そしてここに、「ありのまゝ」に記された出来事を『夜明け前』の物語として再編成する際の大きな相違点が見出せるのである。

三．「道」の発見としての王滝参籠

まず注意しておきたいのが、『夜明け前』における半蔵の王滝参籠は、元治元年の正樹のそれよりも一年早い文久三（一八六五）年に設定されていることである。そして、その文久三年とは、「当時の排外熱の絶頂に達した年」（一・七・一）と位置づけられている。そんな中で参籠を思い立つまでの半蔵は、景蔵に続いて香蔵の京都行きを見送り、同じ平田門人としての二人の友との違いに「心が騒いで仕方ない」との焦りを感じていた。父の病状に心を痛める半蔵の様子は語られつつも、それは「この（引用者注、父の）嘆息を聞く度に、半蔵は胸を刺される思ひをして、あの友の香蔵のやうな思ひ切った行動は執れなかった」（一・七・二）と、彼が家を離れられない理由の一つとして語られる。このような状況のもとで半蔵が思い立ったのが王滝への参籠であり、以下の引用部にはより端的にその目的が示されている。

「お民、俺は王滝まで出掛けて行つて来るぜ。後のことは、清助さんにもよく頼んで置いて行く。」／と半蔵は妻に言つて、父の病を療るために御嶽神社への参籠を思ひ立つた。（中略）半蔵はそれを機会に、往復数日の僅かな閑を見つけて、医薬の神として知られた御嶽の神の前に自分を持って行かうとした。同時に、香蔵の京都行から深く刺戟された心を抱いて、激しい動揺の渦中へ飛び込んで行つたあの友達とは反対に、しば

らく寂しい奥山の方へ行かうとした。(一・七・二、傍線は引用者)

このように、『夜明け前』での王滝参籠には、同じ平田門下に属しながらも二人の友と同じ道を歩むことのできない半蔵が、その焦る心を落ち着かせるためという新たな目的が加えられている。もちろん、父の病気のための祈願という目的が全く削除されているわけではないが、その目的は霞んで見える。正樹が父への想いと神への祈りを込めて作成した長歌に關しても、初稿時にはその大意が本文で説明されていたが^{十一}、改訂後にはその部分が削除され、半蔵が長歌に込めた父への想いは切り取られてしまうのである。

さらに、この引用部においても一つ注意しておきたいのは、そのように王滝に籠もることですら心の落ち着かせようとする半蔵の行為が、ここでは「神の前に自分を持つて行」くという言葉で表現されていることである。この「く」に自分を持つて行く」という表現そのものは藤村が好んで使う表現であるが、このような「神」という存在に自らを対置させようとする半蔵の姿は、後に見るように参籠当日の場面においても登場し、さらにはその後の物語上の重要な局面においてもある機能を果たす。詳細は次節に譲りたいが、こうした「神」に対峙しようとする半蔵、歴史の動きに「神」の心を見ようとする半蔵のあり方は、本論が問題とする小説表現としての『夜明け前』の〈近代〉性を浮き彫りにするものとなるはずである。

以上を踏まえた上で、王滝での場面がどのように描かれているのかを見ていく。まず参籠直前の晩、半蔵は改めて現在の平田門人としての自身の立場をいかに全うするかに悩むことになる。排外熱の絶頂に達した頃にあつて、静かな山奥に身を置く半蔵は、「熱する頭をしづめ、逸る心を抑へて、平田門人としての立場に思ひを潜め」(一・七・三)る。そうしたなか、「同じ勤王に志す」ものの内にある「水戸の志士藤原東湖等から流れて来たものと、本居平田諸大人に源を發するもの」の二潮流の違いに気づいた彼は、「国学者から見れば多分に漢意の混つた」水戸派の「行くところまで行かずに置かないやうな」勢いに、「攘夷」の行く末への不安を抱く。そして彼は「王滝の宿であけて見たいと思つて」わざわざ持参した篤胤の講本『静の岩屋(志都能石屋)』を開き、そこに現

れてくる師の「大きさ」に驚かされる。「自分の浅学と固陋と馬鹿正直と」を痛感し、「深い溜息」をついた半蔵は、「先師は異国の借物をかなぐり捨て、本然の日本に帰れと教へる人ではあつても、無暗にそれを排斥せよとは教へてない」と、師篤胤は決して現在彼の耳に聞こえてくるような「攘夷」を唱えたものではなかったことを発見する。そしてその直後、そのことを心に刻みこむように、篤胤の言葉「一切は神の心であらうでござる」を口にするのである。

そして参籠当日、半蔵は昨晚開いた先師の著作のタイトルそのままのような「神の住居」に腰を下ろすのだが、何かとやかましい世間の様子や国学者仲間の動向といった「彼が眼に触れ耳に聞くものの多くは、父のために祈ることを妨げさせ」、父のための祈禱に集中できない。そしてその心は、ついにはしばらく離れるつもりで来た馬籠の方へも向かう。参勤交代制度の变革以来、馬籠の宿場に起こった様々な現象を思い起こし、「街道の犠牲」に思い悩むのだが、ここでついに彼は「平田門人」、そして「庄屋」としての自分の役割を見つける。しかしその一方で、「ありのまゝ」に対応する部分、父の病の治癒を必死に祈る半蔵の姿は、わずかに以下の記述にとどまっている。

四日目には半蔵はどうやら心願を果し、神前に祈りを捧げる人であつた。仮令自己の寿命を一年縮めてもそれを父の健康に代えたい、一年で足りなくば二年三年たりとも厭わないという風に。(一・七・四)

このように「ありのまゝ」の記述を反映しつつも、『夜明け前』の語り手にとって、父のために必死に祈る半蔵の姿はさして重要ではない。代わりに、王滝への参籠をきっかけにして「平田門人」としての自らの焦りを落착かせようとする姿、師篤胤の本来の教えを発見し、「庄屋」としての自分の役割を再発見する半蔵の姿が、ここでは重要となるのである。つまり、ここでは同じ「王滝参籠」という出来事でも、そこに込められている意味が異なっている。王滝参籠を一つのプロットとして見たとき、父の病氣平癒を祈願するためという「ありのまゝ」

のプロットが、『夜明け前』では迷う半蔵が自己と向き合い自分なりの「道」を発見するというプロットへと変換されているのである。そしてこのことによつて、この小さな物語の結末も変化する。「ありのまゝ」では「家に帰りて神撰の撒を持ち来て父に呈す父悦ばるること限なし」という、父のための参籠としての結果に相応しく、参籠を終えて父のもとへ帰ったところが結末となるが、『夜明け前』では「さうだ、われ／＼はどこまでも下から行かう。庄屋には庄屋の道があらう」（二・七・四）という、これまでの迷いが吹っ切れたことを示す半蔵の言葉で閉じられるのである。

以上のように改変された半蔵の王滝参籠は、その後の彼にとつて重要な意味をもつ出来事になる。まずは参籠によつて見出された「平田門人」かつ「庄屋」としての半蔵の立場は、先に触れたように、その後の元治元年一月の水戸浪士の馬籠通過において、早速その意義を半蔵に再確認させる出来事として描かれる。参籠の前夜には「攘夷」をめぐるの国学との立場の違いが強調されていた水戸学が、ここでは思想に殉じることに対する共感の対象となつている点に違いが見られるものの、彼ら水戸浪士の通過は、「庄屋」として街道の混乱を最小限に抑えようとする立場と、地方における「平田門人」の一員として国事に関わろうとする立場とを同時に満たす出来事として位置付けられている。

また、慶応二（一八六六）年、一昨年に続く再度の長州征伐や、前年五月の江戸をはじめとした諸国での大規模な「打ち毀し」など、いよいよ乱世極まるかと思われる頃、半蔵は情報を求めるために名古屋行きを決める。遂に家を飛び出すかと心配する両親に対して、彼は「わたしは黙つて家を出るやうなことはしません。庄屋には庄屋の道もあらうと考へますし、黙つて家を飛び出して行くくらゐなら、もともと何もそんなに心配することはなかつたんです」（二・十二・一）と答える。このようにはつきりとした言葉で、それも長年気を遣つてきた両親の前で、庄屋としての「道」に生きることを示す半蔵の姿に、王滝行きが彼にもたらしたものの大きさを見ることができる。さらにその一年後、慶応三年二月八日の「王政復古」を迎えた半蔵は、「今一度、神武の創造へ――遠い古代の出発点へ――その建て直しの日がやつて来たこと」（二・十二・六）を確信するのだが、そこで彼の胸に

浮ぶのもまた、王滝参籠において見出した先師篤胤の言葉「一切は神の心であらうでござる」となっている。半蔵による王滝参籠とは、そのプロットを変換されることによってはじめ、物語上における重要な転機となり得たのである。

四・〈個〉の創出と共同体

病氣祈願のプロットから「道」の発見のプロットへ、前節で行った分析は、正樹と半蔵の王滝参籠の場面における物語内容の違いを明らかにすることを目的としてきた。では、この一場面をめぐる『夜明け前』の上記のような変化は、「ありのまゝ」と『夜明け前』という二つのテキスト全体がもつそれぞれの性質と、その差異に関する問題として、いかに位置づけることができるだろうか。ここでは、これまでの分析を手がかりとしながら、それぞれのテキストから浮かび上がる正樹と半蔵との人物像の違い、より正確には、テキストがある人物を描く方法そのものの違いとして捉え直してみたい。

ここでヒントとなるのが、『夜明け前』における「平田門人」としての青山半蔵のあり方である。先述したように、『夜明け前』においては、王滝御嶽神社への参籠もその後の水戸浪士の通過も、すべて「平田門人」としての青山半蔵によって経験された出来事として描かれている。そしてそれは、前節で分析したように、王滝参籠のプロットの変換によって獲得された「道」——出来事に関わる立場、視点であった。しかし注意しておきたいのは、ここで使用している「平田門人」とは、歴史的に実在した集団としての平田門人ではなく、あくまで青山半蔵という個人のもつ価値観によって規定された立場であり、半蔵の内面や個性を表現する言葉としての「平田門人」であるということである。このことは、半蔵にとつての「庄屋」という言葉にも同様に当てはまる。この意味での「平田門人」らしき、「庄屋」らしきとは、これまでの先行論においても言及され、また前章でも確認した「政

治」性の排除や「学問」としての国学、または民衆の側に立とうとする立場などが、その内実として挙げられるだろう。しかし、ここで重要なのは、そのような内面や個性の内実の問題ではない。「ありのまゝ」に記されている正樹にまつわる個々の出来事が、『夜明け前』においては「平田門人」や「庄屋」としての半蔵というある固定した視点から描き直されているということが重要なのである。

さらに、こうした『夜明け前』の語りの特徴は、王滝参籠の場面以外にも見出すことができる。例えば、「ありのまゝ」の冒頭で記される島崎家の歴史は、『夜明け前』においては以下のように半蔵の父吉左衛門の「炬燵話」として語られ、半蔵にとっては父によって幼い頃から刻みつけられた伝統として登場する。

「金兵衛さんの家と、俺の家とは違ふ。」／吉左衛門が自分の倅に言つて見せるのも、その家族の歴史を指す。
（中略）／子供の時分の半蔵の前に坐らせて置いて、吉左衛門はよくこんな古い話をして聞かせた。（中略）
／隣家の伏見屋などない古い伝統が年若な半蔵の頭に深く刻みつけられたのは、幼い頃から聞いたこの父の炬燵話からで。（一・一・一）

ここで重要なのは、「ありのまゝ」においては地の文において語られている島崎家の伝統が、『夜明け前』においては父の言葉として間接的に表現されているということにある。つまりそれは、『夜明け前』における青山家の伝統が、半蔵の視点から見れば距離をもつて表現されるもの、外から押し付けられたものとして描かれるということを示している。他にも、「ありのまゝ」においては正樹の人物を示すものとして記される祖父母に対する献身的な看病も、『夜明け前』においては、国事に奔走することも勉強に励むこともできない中での、半蔵にとっての本意な行為として描かれている¹¹。つまり、『夜明け前』では「ありのまゝ」に記されたあらゆる出来事が、ある内面、個性を持った半蔵という個人の価値判断に沿った形で、構造化もしくは階層化されて描き直されているのである。一方で、「ありのまゝ」においては、そのような固定した視点にもとづいた出来事の叙述は見られない。

亀井秀雄は、近代的な小説文体とは、「語り手（あるいは作中人物）の身体性を媒介に情景を時・空間的に構造化し、情景の概括的な描写ならぬ、いまここという一回性の経験を印象づける散文表現」^{十三}であるとしている。この「身体性」をもった視点による一回きりの「いまここ」としての情景とは、柄谷行人がその著名な風景論において述べたような、「固定的な視点を持つ一人の人間から、統一的に把握される対象」としての「風景」^{十四}と言いつてもできるだろう。このような情景／風景をめぐる近代小説における描写の特質は、『夜明け前』における出来事の叙述においても当てはまると考えられる。そしてこの点において、小説表現としての『夜明け前』における〈近代〉性を読み取ることができるのではないだろうか。

このような視点から考えた場合でも、『夜明け前』における王滝参籠の場面の語りは注目に値する。安藤宏は、近代以前の文学とそれ以降の文学とを区別する指標として「写実主義」と「個人主義」を挙げ、「事実らしさ」をよそおいながらも「他の誰とも違う自分」を描く近代小説の「表現機構」の一つに、「反照装置としての「自然」」^{十五}があることを以下のように述べている。

一般に「近代」以前と以後とを分ける分水嶺の一つは、それまでの共同体意識とは異なる「個」の自覚——他の誰とも違う自分——を志向する動きにあり、「孤独」な「個」はみずからを照らし出すために、心情の素朴な投影としての自然とは異なる「客観的な自然」をまず言葉で仮構していくことが要請される。その意味でも観察の対象となる「自然」は、一見科学的な客観性をよそおいつつも、実は孤絶した「個」を言葉にするために要請された、多分に創られた反照装置であった。^{十六}

ここで注意したいのが、先述したような『夜明け前』における表現上の〈近代〉性——固定した視点に基づく出来事の構造化は、そのような視点がはじめからあったことを意味しないということである。安藤によれば、むしろその固定した視点や半蔵の内面、個性といった〈個〉の表現は、その目の前に広がる「自然」や情景が、伝統

的・共同体的な記憶としての「景」から切り離され、〈個〉を照らしだす反照装置として機能することによってはじめて浮かび上がる。こうした視点から『夜明け前』における王滝参籠の描かれ方を見ていくと、御嶽神社の本殿に到着した場面では、半蔵の目の前に掛けられた「二つの大きな天狗の面」が収められた額の様子が、以下のように描かれている。

耳のあたりまで裂けて牙齒のある口は獣のものに近く、隆い鼻は鳥のものに近く、黄金の色に光った眼は神のものに近い。高山の間に住む剛健な獣の野性と、翼を持つ鳥の自由と、深秘を体得した神人の霊性を兼ね具へたやうなのがその天狗だ。製作者はまたその面に男女両性を与へ、山岳的な風貌をも付け添へてある。例へば、杉の葉の長く垂れ下つたやうな粗い髪、延び放題に延びた草のやうな髯。あだかも暗い中世はそんなところにも残つて、半蔵の眼の前に光つてゐるかのやうに見える。(二・七・四)

ここでは、御嶽における修験道的な神仏習合の世界が、「獣」や「鳥」、「男女両性」が混じり合つた混沌の世界として描かれており、半蔵はそこに「暗い中世」の跡を読み取っている。さらにこの直後には、「こゝは全く金胎両部の霊場である。山岳を道場とする「行の世界」である。神と仏の混じ合つた深秘な異教の支配するところである」(同前)と、その空間が半蔵にとっては全く異端なもの、違和感を覚えるしかなないものとして表現されている。このように描かれる木曾御嶽山は、古くから修験道における霊山の一つに数えられ、近世後期には御嶽講を中心として木曾だけでなく東海、関東地域にまで広く浸透した御嶽信仰の聖地として、多くの民衆の信仰を集めた土地であつた^{十七}。正樹にとつての王滝もまた、おそらくこのような伝統的な民衆信仰の空間としてあつたと思われる。しかし、『夜明け前』の語りは、そのような伝統的・共同体的な意味をその空間から引き離し、それを「混沌」や「異端」の場として描き直すのである。

さらに注目したいのは、そのような「現世に超越した異教の神」が支配する空間から逃れるために、「もつと人

格のある大己貴、少彦名の二神の方へ自分を持つて行」(二・七・四)こうとする半蔵の姿である。この「神」の前に自分を持つていくという表現は、前節でも引用したように、半蔵が王滝行きを思い立つ場面においても登場していたものである。安藤による「反照装置」という概念を援用すれば、ここには半蔵という〈個〉を浮かび上がらせるために、反照装置としての「神」が機能しているといえるだろう。

安藤によれば、伝統的な「景」から切り離された「自然」を描くことによっていかなる〈個〉が発見されようとも、究極において〈個〉が〈個〉のままでは生きられない以上、どこかに普遍的な共同体の根拠が求められなければならないという¹⁸⁾。『夜明け前』において半蔵が対峙しようとする「神」とは、伝統的な共同体から孤絶した〈個〉としての半蔵を浮かび上がらせながら、同時にそれに代わる新たな普遍性を半蔵が獲得するための装置として捉えることができるのである。こうした表現上の機能によって、「神」と向き合う半蔵は、深く〈個〉の内奥に降りていくことができる。『夜明け前』における「道」の発見としての王滝参籠は、この反照装置としての「神」が機能することによって導き出された結末なのである。

つまり、近代とそれ以前の時代とを区分する近代小説独自の表現は、以上のように『夜明け前』の語りにおいても当てはまる。そしてさらに重要なのは、こうした〈個〉を浮かび上がらせるための「神」をめぐる二段のプロセス―「景」からの切り離しと、普遍性の志向は、『夜明け前』の描写のみならず、半蔵自身が実行するプロセスそのものとしても表現されているということである。ここに、小説としての『夜明け前』における〈近代〉が顕在化しているのである。

五・おわりに

ここまで、『夜明け前』における語りの特徴を明らかにするために、幕末維新期に書かれた史料である正樹によ

る自伝「ありのまゝ」と『夜明け前』を、王滝参籠の場面を中心に比較してきた。「ありのまゝ」における父の病氣祈願のための王滝参籠は、『夜明け前』においては半蔵の「道」の発見の物語として読み替えられており、その場面の描写は、父のために祈る姿よりも、文久三年という排外主義による攘夷運動が絶頂に達した時期にあつて、「平田門人」でもあり「庄屋」でもある半蔵が、自らの生き方と静かに向き合う姿が主題として描かれていた。

さらに、そのような物語内容における差異を生み出す『夜明け前』における人物と出来事の描かれ方の問題に注目すると、そこには「平田門人」や「庄屋」といった言葉で象徴的にあらわされるような、ある内面をもった固定的な視点によつて、半蔵をめぐる出来事や情景の意味が解釈され構造化されるという『夜明け前』の語りの特徴が見出された。特にその中でも王滝参籠をめぐる場面の描写は、王滝御嶽神社という空間を伝統的・共同体的な意味から切り離し、「混沌」とした「異端」の「神」の支配する空間として客体化することで、半蔵という人物を固定的な視点や内面をもった〈個〉として浮かび上がらせるという機能を果たしていた。と同時に、そこから半蔵が新たに対峙しようとする「神」は、伝統的な共同体から引き離された半蔵が、それに代わる新たな普遍性を獲得するための装置として働き、半蔵がその内面に深く潜り込み「道」を発見することを促すものとして表現されていたことを明らかにした。このようにして半蔵を〈個〉として描く『夜明け前』は、極めて〈近代〉的な小説表現のあり方を体現しているのである。

最後に言及しておきたいのは、こうした小説表現としての『夜明け前』の〈近代〉性が、物語の結末である座敷牢における半蔵の狂死という悲劇に深く関わっているということである。『夜明け前』第二部第十四章の水無神社からの失意の帰郷以降、狂気に蝕まれつつある半蔵の幻覚としてあらわれるのは、「暗い中世の墓場から飛び出して」(二一・十四・三二)きた亡霊と表現されており、それは参籠の場面において見られたような本殿の描写―伝統的な「景」すなわち従来の共同体の記憶からの切り離しの問題に深く関わっている。また、同章における半蔵の馬籠万福寺の放火未遂は、彼の座敷牢への監禁―つまり共同体からの疎外を招くこととなるのだが、この場面の直前には、「御霊さまと一緒に居れば寂しくない。(中略)もう一度俺は勇気を出して神を守りに行かにならん、

「一切は神の心であらうでござる」というように、再び「神」の存在が召喚されているのだ。つまり、ここで半蔵は再び反照装置としての「神」と向き合い、それによって深く〈個〉の内面に降りていくと同時に、その生を支える普遍性を獲得しようとするのだが、そのことが〈個〉としての半蔵自身と馬籠の人々との一層の乖離を生んでしまうのである。つまり、「神」という反照装置を通して半蔵という〈個〉がこれまでの伝統的な共同体から離れ、それに代わる普遍性を求めようとすればするほど、半蔵は共同体から疎外されていくのである。

これを近代小説における表現の問題と合わせて考えるならば、このような〈個〉を突きつめることによって「自然」や「神」といった普遍に繋がるというモチーフは、白樺派の文学や大正教養主義によって引き継がれていく。しかし安藤によるとここでは「個」は現実の「世間」を飛び越え、(中略)個人と個人が利害を持つて対立し合う、いわば中間項としての「社会」のイメージ^{十九}が抜け落ちてしまうという。半蔵の座敷牢における悲劇は、いわば近代小説の表現そのものが生んだ悲劇でもあるのだ。つまり表現というレベルにおいて〈近代〉を体現する青山半蔵という人物は、同時にその悲劇をもって〈近代〉が抱え込んだ問題を浮かび上がらせて対象化する、そのような存在として位置づけることができるのである。

一 鈴木昭一『『夜明け前』論―史料と翻刻』(おうふう、一九九四年二月)。

二 『藤村全集』別巻(筑摩書房、一九七一年五月)。

三 前掲、鈴木『『夜明け前』論―史料と翻刻』。

四 成田『『歴史』はいかに語られるか―一九三〇年代「国民の物語」批判』(日本放送出版協会、二〇〇一年四月)。

五 本文中に挙げていないものに、芳賀登『『夜明け前』の実像と虚像』(教育出版センター、一九八四年三月)がある。本書では思想史学の見地から島崎正樹と青山半蔵における相違が指摘されているが、ここでの芳賀の関心は正樹の〈実像〉の究明に向けられており、半蔵はあくまでも〈実像〉に対する〈虚像〉としての価値しか

持ち得ておらず、両者の差異がもつ問題には触れていない。

六 亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社、一九五三年十二月）。

七 十川信介『島崎藤村』（筑摩書房、一九八〇年二月）。

八 こうした視点からの近年の研究成果としては、細川正義『島崎藤村文芸研究』（双文社出版、二〇一三年八月）が挙げられる。『若菜集』から『東方の門』までの主要作品に対する詳細な読みによって「文明批評家」としての藤村像を照らしだす本書は、藤村研究における重要な成果のひとつであるが、本論においてはそのような作家藤村の思想の展開や確立を自明視せず、そうした作家の「自我」もまた、あくまでも表現においてあらわれる問題として考察したい。

九 歴史叙述における年表のような出来事の羅列に留まるストーリーと、そこに因果関係が付与されたプロットとの違いは、ヘイドン・ホワイト『物語と歴史』（海老根宏・原田大介訳、《リキエスタ》の会、二〇〇一年二月）、また前田愛『文学テクスト入門』（筑摩書房、一九九三年九月）を参照。

十 前掲『藤村全集』別巻より引用。

十一 『中央公論』一九三一年一月号参照。

十二 『夜明け前』第一部第二章二参照。

十三 亀井秀雄『明治文学史』（岩波書店、二〇〇〇年三月）より引用。

十四 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波書店、二〇〇八年一〇月）より引用。

十五 以上、安藤宏『近代小説の表現機構』（岩波書店、二〇一二年三月）より引用。

十六 前掲、安藤『近代小説の表現機構』より引用。

十七 菅原壽清・時枝務・中山郁編『木曾のおんたけさん―その歴史と信仰』（岩田書店、二〇〇九年七月）参照。

十八 前掲、安藤『近代小説の表現機構』参照。

十九 前掲、安藤『近代小説の表現機構』より引用。

第三章 中間にあることの両義性―『夜明け前』とマルクス主義歴史学、郷土史との対話

一・はじめに

『夜明け前』について語られる時、しばしば出会う表現のひとつに「草莽」がある。例えば、主人公である青山半蔵が信奉する地方における国学は「草莽の国学」と称され、『夜明け前』は古くは伊東多三郎や芳賀登、また近年においても宮地正人といった思想史研究者によって、度々言及されている^一。さらに戦後歴史学においても、「草莽」は半蔵のような幕末維新期において政治的に行動した豪農層や豪商層を指す言葉として用いられており、『夜明け前』はそのような「草莽」を描いた代表的作品として位置づけられている。こうした戦後の研究者によって語られる時の「草莽」は、例えば色川大吉『明治維新史』に顕著のように、支配者層と被支配者層との中間にあるが故に、社会における矛盾に敏感となった、ある種の目覚めた市民のような存在として意味される^二。維新に民主主義の萌芽を期待し、地方においてその思想を実践しようとして倒れたという悲劇の人・青山半蔵は、こうした「草莽」研究において、今なおアイコンとしての効力を持つているといえる。

しかし、こうした「草莽」像というのは、これから見ていくように『夜明け前』の同時代には未だ形成されていなかったといえる。この点で示唆的なのは左記の『夜明け前』の本文である。主人公の青山半蔵が、ある写本を手にしながら「王政復古」の実現を知る以下の場面では、次のように「草莽」ならざる「草叢」が、維新を支えた「下から」の力を表現する言葉として使用されているのだ。

中津川の友人香蔵から半蔵が借り受けた写本の中にも、このことが説いてある。建武の中興は上の思召しから出たことで、下々にある万民の心から起ったことではない。だから上の思召しがすこし動けば忽ち武家

の世となつてしまつた。ところが今度多くのものが期待する復古は建武中興の時代とは違つて、草叢の中から起つて来た。さう説いてある。草叢の中が發起なのだ。(一・十二・六、傍点は引用者)

ここで登場する「写本」の内容は小洲処士「復古論」を典拠としており、原文では次のように、「草叢」ではなく「草莽」の語が使用されている。

然ルニ今度ノ復古ハ、右ニ反シ、万民元弘ノ覆轍ヲ恐レ居ルガ上ニ、草莽ヨリ勤王ノ論起リ、最初ハ浪士ヨリ始リテ、藩士ニ及ビ、藩士ヨリ大夫ニ至リ、大夫ヨリ君侯ニ及ビ、終ニ草莽ノ發起尽力ヨリ、日々ニ盛大ニナリ、自然ニ復古シタルナレバ、万カ一モ上ノ思召ハ変スルトモ、万民ノ心ガ変セサレバ、武家ニ政道ノ戻ルベキ道理ナシ。(傍線は引用者) 三

つまり『夜明け前』の先の引用は、わざわざ「草莽」という言葉を「草叢」に言い換えているのだ。こうしたテキストにおける言葉の選択に対して、松島栄一は、以下のような重要な指摘を行っている。

この「草叢の中が發起なのだ」という「下」からの盛り上がり＝エネルギーを認めることは、じつは新しい歴史に対する見方であり、明治維新史観として一ばん早く着眼したのは、いうまでもなくマルクス主義歴史学であつた。(中略) ファシズムの進行とともに、「草叢」を「草莽」というようにかわつた。(中略) おうおうにして、藤村の『夜明け前』が、草莽の史観であるといわれ勝ちであるが、じつはそれは、あくまでも草叢であつて、草莽ではない。四

この松島の指摘は示唆に富むが、あくまで同時代を生きた人の実感の範囲を出るものではない。「草莽」と「草

叢」という同じ「草むら」を示す言葉に付与されるものの差異が明らかでないのである。よって、本章における一つ目の課題では、この松島の指摘に沿いながら、「草莽」という言葉が持つ歴史性に注目し、「草莽」が時代ごとの象徴性を持つ以前の時期に属するテキストとして、『夜明け前』を位置づけたい。こうした手続を踏む理由は、一つには先述した歴史学における『夜明け前』への度重なる言及が、テキストの安易な実像化すなわち史実化に繋がるのではないかということ、また政治思想的に両義性を帯びやすい言葉である「草莽」が、現在でもなお、便利な言葉として盛んに称揚されている状況を危惧してのことである。

またこの他に高橋章則『夜明け前』における「草叢」をめぐっては、前述「復古論」の記述と『夜明け前』との綿密な比較を行いながら、テキストにおける「草叢」の選択を、藤村の「武家」とは異なる「庄屋」の歴史観によるものと指摘している^五。しかしこの場合の「庄屋」とは、藤村によるいわば文学的言語としての「庄屋」であり、それが具体的にどのようなものであるのかについては明らかでない。そこで本章における二つ目の課題では、このように曖昧に語られてきた「草莽」「草叢」、あるいは「庄屋」を、地方における中間層というやや大雑把な枠組みとして再定義することで、『夜明け前』とその同時代における歴史叙述が、青山半蔵のような階層をどのように描き、位置づけたのかについて考察してみたい。ここでのいう中間層とは、具体的には豪農層や豪商層に属する村役人などで、支配者側と被支配者側のどちらにも属し、両者の間にいる人々のことである。

すでに数々の先行研究で議論されているように、『夜明け前』が執筆された一九三〇年前後とは、近代化のある程度の達成とそれに対する反省から、実に様々な立場から明治維新が語られた時期であった^六。成田龍一はこの時期の歴史学を、実証的な官学アカデミズムとマルクス主義歴史学、皇国史学の三派が鼎立していた時代と位置づけ、その中で『夜明け前』が「国民の物語」を創造する官学アカデミズムの立場に近接していることを指摘しているが^七、この中間層の歴史叙述という点から見れば、この時期の官学アカデミズムや皇国史学はその存在を維新史の中に位置づけられておらず、この中間層をめぐる『夜明け前』の叙述には、成田が提示したものとは異なった文脈が存在しているのである。

二・近代日本における「草莽」

広義には「草むら」の意を表す「草莽」という言葉が、官に対する在野、あるいは在野に属する人々、そして特に明治維新において活躍した下級武士や浪人、豪農層、豪商層等を意味するようになった起源には、『孟子』の「在国曰市政之臣。在野曰草莽之臣」という一節がある。ここから分かるように、「草莽」はもともと、「臣」の意識――為政者に対する忠誠の意識との親和性が高い言葉であると考えられるが、高木俊輔によれば、一八世紀以降の日本において、現状打破を「草莽」に託す発想が形成され、「草莽之臣」という言葉が政治を論じる際の謙譲語や定型句として機能するようになったという。そして一九世紀中頃からは、対外政策をはじめとした幕藩体制の揺らぎにより、忠誠の対象が幕府から朝廷へ移行し、吉田松陰「草莽崛起」論に代表されるような在野的意識と尊皇攘夷論、政治行動論とが結合し、下級武士や浪人、豪農層、豪商層といった人々が、社会変革を支える政治主体として成長していった^八。

「草莽」という言葉が、高木の指摘するように在野性に価値を置く言葉として用いられる例は、わずかではあるが明治の文献の中にも見出される。例えば、一八七六年八月の『中外評論』第三号に掲載された植木枝盛「明治年間国勢ノ沿革ヲ論ス」では、「夫レ明治ノ中興ハ王家ノ泰運ニ属スト雖モ其形勢ヲ未然ニ制スルハ一二有志者ノ力ニ在リ看ヨ旧幕ノ末年ニ当リ志士草莽ニ崛起シ大義ヲ唱ヘ甲斨テ乙起リ…（後略）」というように、「復古論」に共通するような在野から起こった変革へのエネルギーを高く評価する視点が見出せる。また、『朝日新聞』に掲載された小室信介「平仮名国会論」第十三篇では、「苟も官吏の肩書ある位階の尊貴ある者ある時は必ずしもこれを賢とし知としてこれを敬する事を知り町人なり百姓なりと云ふ時は之を輕蔑して無知文盲なる者となす」という考え方を、「是れ今日に於ては決して取るべからざるの弊風なり」とし、「今日草莽^{マヤ}の間安ぞ学問知術官吏より

勝りたる者あらざるを知らんや」^九と、民衆がもつ力に対する為政者の無知を諷めている。

しかし一方で、幕末維新时期全体を見れば、右のような「草莽」の使われ方はやはり少数であると言わざるを得ない。この時期に圧倒的に見られるのは、「脱藩草莽士」^十や「草莽一介ノ身」^{十一}、「草莽の微臣」^{十二}といった定型句や直訴の際の肩書としての「草莽」であり、ここに高木の述べるような在野に属する人々自身がその在野性に価値を置くというような「草莽意識」^{十三}や、「草莽」という言葉そのものに象徴性を置くような意識を見出すことは難しい。例えば、一八七八年一月一九日に創刊された『草莽事情』は、「人民ノ義務」として「国家ノ大権ヲ快復」し「人民ノ精神ヲ警醒」するために「中外ノ異事奇聞時事ノ変動ニ関スル者アレハ尽ク摘撮シテ之レニ評論ヲ附」^{十四}す雑誌として「草莽」の語が冠されているが、ここでの「草莽」もやはり直訴の際と同様の謙譲語的、定型句的な域を出るものではないと言える。

そしてさらに時代が下ると、「草莽」の語は「右翼的修辭」^{十五}として、在野性よりも天皇や国家への忠誠を示すものとしてステレオタイプ化していく。そうした意味での「草莽」のアイコンとして盛んに顕彰されたのが、「草莽の臣」として著名な高山彦九郎であつたわけだが^{十六}、こうした「右翼的修辭」としての「草莽」は、その後五・一五事件や二・二六事件などに代表されるような、いわゆる「昭和維新」の時代を通過することで拡がりを見せる。例えば日本浪曼派の中心的人物であつた保田與重郎は、一九四〇年後から自身を「草莽の詩人」^{十七}と称するようになる。これは保田の初期の作品には見られない文言であり、この背景には影山正治^{十八}などの「昭和維新」の直接行動に関わつた人物との交友があつたと考えられる。そしてこの他に折口信夫も、二・二六事件を起こした皇道派将校たちを「草莽人」^{クサカゲビト}と表現し、彼らへの共感を示す歌をのこしている。

今にして思ふ。昭和十一年春早く、雪ふたゝび到り、銃声の街に轟くを耳にした。

我どちよ。草莽人となり果てゝ 慨たきときは、黙し居むとす^{十九}

つまり、「昭和維新」に関わった人々が自身を過去の「草莽の臣」たちの姿に重ね合わせるのと同時に、それに共感した文学者たちによって、「草莽」が文学の場に持ち込まれたということである²⁰。これらの文学者たちの語る「草莽」には、〈報われなき〉ということが前提になっている。敗北したからこそ価値があるという、保田的な「イロニー」の思想を表現する新たな鍵語として、「草莽」が再発見されたということだ²¹。

さらに戦時下に入ると、一部の文学者や運動家だけでなく、より広い範囲で「草莽」の精神が盛んに喧伝されるようになる。例えば、太平洋戦争が勃発した翌年の一九四二年六月、国民歌人会から非売品として刊行された『大東亜戦争歌集』に、門井眞という人物による「草莽賦」と題された歌がある。ここでは開戦を寿ぐ詞書が添えられた後、「世界地図をかかげて蒼生^{みたみ}のあけくれや配給へのなげきもいつか絶えたる」と、戦時における「銃後」の決意が詠われている。この他にも、大戦末期の一九四五年七月一六日の『朝日新聞』では、「一億一蓮托生で出し切らう戦力 勝利の道は一つ まだ足らぬ敵愾心」という見出しのもと、新聞社に送られた読者からの投書を「草莽の赤心」として、扇動的な煽り文句とともに紹介している²²。この時期における「草莽」は、もはやそれまでに有していた「真の」忠誠心のためなら反体制的行為をも厭わないというような革新性を失い、ひたすらに戦時下の困難を忍び、国をあげた戦いを支える存在として意味されている。

このように、戦前・戦中における「草莽」像は、国家や天皇に対する「臣」の意識と密接なつながりをもった言葉であった。ここには、戦後の歴史学において見出されたような、民主主義の先駆けや目覚めた市民としての「草莽」に繋がるような性質は見当たらない。そして、以下に見ていくように、そうした戦後的な明治維新史における「草莽」像とは、一九三〇年前後における中間層をめぐる歴史叙述を通して、後の時代に再発見されたものだと考えることができるのである。

三・マルクス主義歴史学における「中間搾取者」と『夜明け前』

先述したように、本論で注目する地方における中間層に限らず、維新期のまさに草陰に隠れた民衆たちについては、この時期の実証史学や皇国史学は、その存在を維新史の中に位置づけられていない。例えば、藤村が『夜明け前』の執筆において参照している井野邊茂雄『幕末史概説』（紀元社、一九二七年一〇月）では、貨幣経済の発達に伴う町人階級の勃興や、学問の発達に伴う階級縦断的な「国民的自覚」や「尊王思想」の拡大という、社会経済状況とそれに伴う精神史的变化に維新の遠因を見つつも、あくまで「外国勢力の刺激こそ、幕府滅亡王政維新の最大の原因であると断定」する立場に立ち、政治史の観点から維新を説明するため、豪農層はもちろん、地方に関する叙述は皆無に等しい。また、同じく対外的危機に対する日本の統一的な独立国家形成の過程を重視する藤井甚三郎も、「勤王運動」の階級を越えた拡がり指摘しているが、その関心は主に浪人層に向けられている^{二十三}。

そしてこの時期に唯一、維新时期における民衆たちの存在に注目し、地方における中間層をその史観の中に位置づけ得たのが、社会主義の立場からの維新史であった。その中でも特に多くの議論を残しているのが、羽仁五郎と服部之総である。彼らは二人とも明治維新を絶対主義体制の確立とみなす講座派的維新史観を共有しており、その中で地域に根を置く中間層、特に地主などの豪農層は、民衆と対立する「中間搾取者」として位置付けられている。服部によれば、「中間搾取者」とは「年貢高が固定し、生産性が増大し、年貢率が相対的に減少して耕作農民のもとに余剰労働の生産部分が残されるに至ったとき、この残された余剰部分を横合から収奪することによって農奴制搾取率を実現・快復せしめたもの」と定義づけられ、彼らは基本的には「反革命」的性質をもっているという^{二十四}。

特に手厳しいのは羽仁であり、羽仁は、そのような豪農層が大半を占める「村役人」についても、「彼等は形

式的には選挙せられたる村落行政の首脳者として、農民の代表者たるごとき地位をもって、実質的にはほかならぬ封建的大土地領有者の手先として、その農民に対する支配の直接的な代表者として活動せしめられたのであった」と主張している^{二十五}。服部の場合は、羽仁に比べるとより柔軟な姿勢をみせており、こうした「中間搾取者」としての豪農層は、「封建的地主としての反動的な魂」をもちつつも、一方では「最初の産業資本家としての変革的な魂」をもった「過渡的な階級層」であり、「幕末変革運動の基本的な地盤」だとしている^{二十六}。この点は、服部の戦後の議論にも引き継がれ、前掲の色川や高木などの戦後歴史学における「草莽」像に繋がる視点を提示している。

このようなマルクス主義の立場からの中間層の位置づけに対して、作者である島崎藤村は、それとは異なる立場に立つものとして『夜明け前』の叙述があるとの言葉を残している^{二十七}。この点について先述した高橋章則は、

「『志士』としての変革の主体的・能動的立場に立つものに着目する」羽仁論文に対する藤村の反発を主張するが^{二十八}、本論におけるこれまでの議論を踏まえると、むしろその反発は『夜明け前』の叙述の中心となる中間層の位置づけに対するものだとして理解することができる。つまり、これまで見てきたように、マルクス主義歴史学において、中間層は結局のところ封建制支配者側の末端としてしか位置付けられず、それに対して『夜明け前』は、地方における庄屋や本陣・問屋といった羽仁によって批判的に語られた「村役人」層を「下積の人たち」^{二十九}として重視し、彼らの性質は民衆への搾取だけではないということを示そうとするのである。このような『夜明け前』の取る態度は、連載当時から戦後にかけて、歴史学者による度重なる批判を受けてきた。個別の批判やそれに対する藤村の応答については、黒田俊太郎「歴史と文学―服部之総「青山半蔵」を読む」（『島崎藤村研究』四〇、二〇一二年九月）、中山弘明「〈底辺〉から歴史を見る―田村栄太郎の『夜明け前』批判」（『溶解する文学研究―島崎藤村と〈学問史〉』翰林書房、二〇一六年二月）に詳しい。

だがその一方で『夜明け前』においては、マルクス主義的な視点がまったく否定されているとは言えないような記述も散見される。例えば、第二部第六章四では、明治元（一八六八）年の冬、江戸の道中奉行の代わりに京

都駅通司が設置されたことで交通組織にも変革が起き、荷物の継ぎ立てをめぐる弊習が廃されて課役の平等が命じられた際、これまで特権的な地位を占めていた御伝馬役から不満の声があがる場面が描かれている。そうした中で主人公の青山半蔵は、特権層にある旦那衆からの苦情は取り合わず、自らも人足の一人として働くことで「それを一切の答に代へよう」とするのだが、こうした半蔵の姿に対し、「「ホウ、本陣の旦那だ。」／と訳もなしに面白がり、「半蔵の方を盗むやうに見て（中略）くすくす笑ひながら荷物を背負って行く」当の人足仲間たちの反応は冷淡なものである（二・六・四）。民衆たちに対する半蔵の想いとは裏腹に、彼らの側から見た時の半蔵の姿は、やはり紛れも無く彼らとは異なる特権的な地位にいる人物として描かれるのである。

つまり『夜明け前』は、マルクス主義的な視点を批判し、中間にある者の意義を見出そうと模索しつつもなお、特権層としての彼らの姿を度々暴露させてもいるのである。ここには、五節で検討するように、テキストにおける同時代言説との対話性を見出すことができると考えられる。

四・市村威人『伊那尊王思想史』における中間層と『夜明け前』

『夜明け前』における中間層について、「村役人」の他にもう一つ重要な側面となっているのが、主人公をはじめとした登場人物の多くが平田国学の門人であること、つまり知識階級であるということである。そしてその点に関する『夜明け前』の叙述には、島崎正樹の遺稿とともに、第一章でも引用した長野県下伊那地方の郷土史家である市村威人^{三十一}が著した『伊那尊王思想史』が重要な役割を果たしている。その参照部分については後述するが、『夜明け前』における地方知識人たちに関する叙述は、同書の内容によってはじめて可能となったといえる。そこで本節では、『夜明け前』と同書との比較も行いつつ、市村の著書がもつ時代的意味や、そこでの地方知識人、つまり中間層の人々がどのように描かれているのかについて考察する^{三十二}。

『伊那尊王思想史』（以下、『尊王史』と略）は、一九二九年一月に下伊那郡国民精神作興会から刊行され、前編「和歌勃興期」・中編「平田学発達期」・後編「実行教宣揚期」の三部から成り、中世から続く伊那地方の「尊王思想」について、史料をもとに考証した書物である。そのうち『夜明け前』が参照しているのは中編であり、『尊王史』に記される北原稻雄や倉澤義髄、松尾多勢子といった門人仲間の中心的存在たちが実名で登場する他、水戸浪士の中山道通過や伊那門人によって建設された本学神社についての叙述などは、『尊王史』の記述に拠るところが大きい。

しかし、両者を比較してみると、そこには平田国学及び伊那の門人たちに対する評価に、一見して分かる明らかな差異がある。詳細は第一章で検討した通りだが、『夜明け前』での平田国学に対する評価は、篤胤よりも宣長に重きが置かれることで、平田国学の実行性・政治性に対する批判を読み取ることができる。一方で、『尊王史』においては、「宣長は、温厚真率玉の如き君子人であつたのに反し、篤胤の学風は鋒鏘鋭利、峻烈にして、よく皇国の元気を振興し、惟神の大道を宣揚し、忠君の志気を激励し、外国崇拜の風教を一変して、皇国の稜威の重んずべきことを知らしめた」^{三二}と、宣長よりも篤胤の実行性や扇動性の方に価値が見出されている。そして両者におけるこのような差異は、これから見ていくように『尊王史』が出版された背景と、同書が担った役割に由来するところが大きいと考えられる。

まず出版の背景について、『尊王史』「序言」には、以下のように執筆に至った経緯が述べられている。

本書は、初め、長野県下伊那郡山吹村條山に鎮座の国学四大人の霊を祀れる本学神社復興事業の計画せられたる際、その由来記を編する目的を以て、伊那郡平田学の発達といふことを主題として昭和二年の初に起稿し、（中略）其後、下伊那郡国民精神作興会の森本州平君から、御大典記念事業として出版したいから整理を続行してはどうかとの勸奨を受けた（後略）。

ここから読み取れるのは、『尊王史』の成立と下伊那郡国民精神作興会という組織との密接な関わりである。この下伊那郡国民精神作興会（以下、作興会と略）とは、一九二三年の「国民精神作興ニ関スル詔書」を受け、下伊那地方における青年の「赤化」、つまり社会主義運動の台頭に対抗する「思想善導機関」として組織された団体で、役員の中心は在郷軍人会、さらに郡長、飯田町長、各村長を動員させ、警察や教育界からも代表者を参加させており、いわばこの地方の名望家たちによって成り立っている組織であった。そしてその主な活動は、機関紙『作興』の発刊、思想教化のための勉強会、建国祭など国家の祭事の主催などで、皇室中心主義、国粹主義による青年の教化を目指しており、『尊王史』もまた、その活動の一貫として出版された書物であったのである^{三十三}。

その作興会において、『尊王史』の出版にどのような役割が期待されていたのかについては、同書における中原謹司という作興会幹部による「巻末そへがき」から読み取ることができる。ここで中原は、「実際に当つて見ると思想の善化と云ふことは極めて至難な業であつた」と作興会の左傾青年に対する「思想善導」の困難を語り、それと同時に「歴史を貫ぬく民族の伝統には何者も克ちとる事が出来ない力強い魅力があり、特にもつとも親しい郷土の史実には、簡明に、直截に人心の意欲を鼓舞し、作興する強烈なる偉力のある事」を痛感したと述べている。つまりここでは、思想教化活動の困難を克服するための装置として歴史が要請され、それに伴い過去の門人たちが召喚されたということが読み取れる。市村に求められたのは、地域共同体における歴史的同質性としての「尊王思想」を、史実によつて「実証」することにあつたというわけだ。

こうした文脈のもとで描かれた地方における中間層の姿は、やはり民衆の方を向いているとは言えない。例えば、以下の引用は、松尾多勢子の帰郷後の様子を伝えるものであるが、ここでは地方の名望家としての松尾家の繁栄が讃えられ、さらにその後多勢子が明治三二年に政府によつて正五位を贈られたことが記されている。市村の叙述する多勢子の姿には、民衆に対する特権層としての性質は皆無である。

多勢子が文久二年に京都へ出て勤王の為に奔走を始めてより約十数年間家のことは少しも省みる違がなく

且浪士出入の為家産の大半を蕩尽したので帰郷後は専ら家政に力を致し家人と共に其軌回に努めた結果間もなく昔の如く有福になった。多勢子はこの家庭にあつて農桑多忙の時には子女を励まし僕婢を鼓舞して（中略）悠々自適以て徐ろに其余生を楽んだ。三十四

つまりここでは、維新时期に活躍した地域における英雄を語ることで、地域共同体における「尊王」という同質性の構築が目指されるため、共同体の中の階層性という差異に対する意識が希薄になるのである。市村の描いた中間層は、この点で皇国史観的な「臣民」像に近いが、それでも彼ら中間層を担い手とした地方における学問の受容と展開を記したことは革新的な意義があつたと考えられる。事実、市村が掘り起こした下伊那地方における国学門人たちの動向は、後に伊東多三郎『草莽の国学』において再発見され、戦後の思想史研究にとって重要な役割を担った^{三十五}。また、以下に見るように、『夜明け前』においても市村の描いた門人たちの活動は、まるごと否定されているわけではない。やはりそこには、彼らの中間層であるからこそ持ち得た歴史的な意義が、十分に見出されていると言える。

五・おわりに

ここまで、まずは幕末維新时期から戦前・戦中にかけての「草莽」像について概観し、こうした既存の「草莽」像とは異なるものとして、一九三〇年前後におけるマルクス主義や郷土史の領域での幕末維新时期における中間層をめぐる叙述を検討してきた。そして、そのことよって理解できるのは、戦時下における政治的な批判性を失った異常な「臣」意識としての「草莽」は例外におくとしても、幕末維新时期から戦前にかけての「草莽」像とは、基本的には「草莽志士」とか「草莽浪士」といった言い方に顕著なように、彼らが属していたはずの土地や共同

体から遮断された存在であったということである。その一方で一九三〇年前後における明治維新史の叙述には、中央に対する地方や地域における階層性や民衆など、土地や地域共同体に対する意識があったと考えられる。

マルクス主義歴史学による中間層と市村による中間層は、イデオロギーとしては対極にあると言っている。しかし両者とも、明治維新という出来事を地域から切り離して捉えなかった点に共通性がある。マルクス主義の場合、市村のようなある特定の地域を描くという意識とは異なるが、それでも人々が階層性という差異を孕みながらも生活を営む空間そのものを捉えようとした点に、その意識を見出すことができる。非「草莽」的な中間層という地域に根をおく存在についての歴史叙述が生み出されることになった背景には、以上のような歴史を捉える際のオルタナティブな視点があったのではないだろうか。

では、こうした同時代テキストと比較して、『夜明け前』における中間層の叙述とは、どのように特徴付けることができるだろうか。最後にこの点について考えてみたい。

先述したように、マルクス主義的な特権的存在としての中間層に対して、『夜明け前』はそれを一方では取り入れつつも、彼らが持ち得た肯定的な面を模索しようとする姿勢があった。その姿勢をあらわすものの一つに地方における国学門人の活躍という『尊王史』が提示する中間層の叙述があったわけだが、この『尊王史』に対してもまた、『夜明け前』は批判的な視点をあらわしていた。つまり『夜明け前』というテキストそのものが、幕末維新期の中間層の叙述をめぐる一九三〇年前後の状況をまるごと取り込み、それらに応答したテキストであると考えることができるのだ。そしてその具体的な応答は、以下の部分にも見出すことができる。

『夜明け前』第一部第十章三には、水戸浪士の通行を補佐した下伊那の門人たちに対して、「さう言へば、今度飯田でもよつぽど平田の御門人に御礼を言つていゝ。君達のお仲間もなか／＼やる」(二・十・三)という寿平次の言葉がある。『夜明け前』における寿平次という存在は、半蔵やその他の国学門人たちと階層を同じくしながらも、常に彼らにとって最も身近な批判者としての立場をもつ者であるのだが、水戸浪士の一件では例外的に門人たちのとった行動を評価しているのである。そしてこの寿平次の例外的な評価は、同時に『夜明け前』の『尊

王史』に対する評価でもある。

この評価は、具体的には街道―『夜明け前』における地域の秩序を平和的に保つための、中間層の行政能力に対するものであると考えられる。この水戸浪士通過の一件は、北原稲雄を中心とした門人たちが、水戸浪士に対する同情と飯田藩との衝突を避け、地域における混乱を最小限に留めるために浪士たちの間道の通過を斡旋したものであったが、この斡旋という行為こそ、『夜明け前』に描かれた中間層の最大の特徴であり、中間層であることの意義なのではないだろうか。それは支配者側と被支配者側の間に立つ、中間層の交渉力と言い換えてもいい。

本章第一節で示したように、一九三〇年前後の明治維新像において、黒船来航から物語を語り始める『夜明け前』は、官学アカデミズムと同様、「国民」のプロットに属すると指摘されてきた^{三六}。しかし以上で確認してきたように、中間層に対する叙述という点から見れば、『夜明け前』は「人民」のプロットに繋がるマルクス主義歴史観とも、「人民」のプロットに基づく郷土史からの皇国史観とも、対話性をもつものであった。「民衆」の時代^{三七}でもあった一九三〇年前後において、馬籠という「下から」歴史を語ろうとする時には、やはり同時代における両義性をもった二つの史観の取り込みが不可欠だったと考えられる。この意味で、『夜明け前』は成田が提示したよりもより複雑な、一九三〇年前後の歴史学における三派鼎立状況そのものを包含するような多層性、あるいは混交性をもったテキストとして位置づけられる。

一 伊東多三郎『草莽の国学』（初版は羽田出版、一九四五年一月、参照は名著出版、一九八二年三月）、芳賀登『夜明け前』の実像と虚像』（教育出版センター、一九八四年三月）、宮地正人『歴史の中の『夜明け前』―平田国学の幕末維新』（吉川弘文館、二〇一五年三月）。

二 色川大吉『新編 明治精神史』（筑摩書房、一九九五年一〇月）参照。

三 小洲処士「復古論」第一、戊辰八（一九六八）年（吉野作造（代表）編『明治文化全集』第二三卷 雜史篇、日本評論社、一九二九年一〇月）。

四 松島「草叢の間に歴史の視点を定めたリアルさ」（『国文学解釈と鑑賞』二六（六）、一九六一年五月）。

五 高橋「夜明け前」における「草叢」をめぐる（『島崎藤村研究』一七、一九八九年九月）。

六 成田龍一『歴史学のスタイル―史学史とその周辺』（校倉書房、二〇〇一年四月）、『歴史』はいかに語られるか―一九三〇年代「国民の物語」批判』（日本放送出版協会、二〇〇一年四月）、永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年三月）などを参照。

七 前掲、成田『歴史』はいかに語られるか』参照。

八 高木『明治維新草莽運動史』（勁草書房、一九七四年一〇月）参照。

九 『朝日新聞』一八八一年一月二五日一頁。

十 「脱藩草莽士之始末」（武熊武編『水戸藩末史料』一九〇二年二月）。

十一 太政官「高山彦九郎ヲ追賞ス」（太政類典・第一篇・慶応三年）明治四年・第三十四卷・官規・賞典恩典三、一八六九年二月二〇日、国立公文書館デジタルアーカイブを閲覧）。

十二 「田中正造氏の直奏文」（『読売新聞』一九〇一年二月二二日三面）。

十三 前掲、高木『明治維新草莽運動史』。

十四 「緒言」『草莽事情』第一号、一八七八年一月一九日（明治文化研究会編『明治文化全集』第五卷 雜誌篇、日本評論社、一九六八年一月）。

十五 橋川文三は、『昭和維新試論』（朝日新聞社、一九八四年六月）「一 渥美勝のこと」において、「悲しき浪人の心」とか「草莽」という言葉は、影山やその同志たち、またたとえば保田與重郎、浅野晃ら日本ロマン派の人々が好んで用いたものであった」と指摘し、これらの「右翼的修辭」に拘泥する必要はないとしている。

十六 中岡正剛「錦旗を草莽の間に立てよ」(『国民に与ふ 中野正剛大演説集』平凡社、一九二九年四月) 参照。

十七 保田「序」(影山正治『歌集 みたみわれ』ぐろりあ・そさえて、一九四一年四月) ほか参照。

十八 前掲、影山『歌集 みたみわれ』、『維新者の信条』(大東塾出版部、一九四二年七月)にも、「草莽」の語が頻出している。

十九 折口信夫「危急を告ぐる諷歌」(『東京新聞』一九四四年三月八・一〇日)、引用は、『折口信夫全集』第二八卷、(中央公論社、一九六八年二月)。この歌に關しての考察は、永井慎平『折口信夫の「性」と「政」―「折口像」の問題』(博士論文、名古屋大学、二〇一四年三月)を参照。

二十 ほかに保田「草莽の歌」(『コギト』一九四一年五月) 参照。

二十一 またこの点に、保田や林房雄、亀井勝一郎といった日本浪漫派によつて、『夜明け前』や藤村文学が再評価された理由を見出すことができるのではないかと考えられる。つまり、本論第一章において確認してきた半蔵の〈実行〉を処理するための「狂気」―つまり合理的であることが是とされる中での非合理的世界への転落が、日本浪漫派的な「イロニー」の思想のもとでは、だからこそ価値のあるものとして、まさしく「浪漫的」な消費の対象となつたのではないかということである。

二十二 『朝日新聞』一九四五年七月一六日二面。

二十三 藤井『明治維新史講話』(雄山閣、一九二四年三月)。

二十四 服部『明治維新の革命及び反革命』(岩波書店、一九八二年五月)より引用、参照。初出は『日本史資本主義發達史講座』第二卷第一部(岩波書店、一九三三年二月)。

二十五 羽仁「幕末における政治的支配形態」(『明治維新史研究』岩波書店、一九五六年九月)より引用。初出は『日本資本主義發達史講座』第一卷第一部(岩波書店、一九三二年五月)。

二十六 前掲、服部『明治維新の革命及び反革命』。また服部の戦後の議論については、『明治維新における指導と同

盟』(渡辺義通・平野義太郎・大塚久雄共編、社會構成史体系第一部、日本評論社、一九四九年七月)を参照。

二十七 青野季吉との対談『夜明け前』を中心として』(『新潮』一九三五年二月号)参照。

二十八 前掲、高橋『夜明け前』における「草叢」をめぐる」参照。

二十九 前掲、『夜明け前』を中心として」より引用。

三十 市村威人は、一八七八年に下伊那郡山本村に生れ、二五歳の時より郷里の小学校教員として勤務し、その傍らで、生涯に渡り郷土史の研究に取り組んだ人物である。彼の郷土史研究は、明治四五年から下伊那郡誌資料蒐集委員として、伊那地域における平田派国学の中心的人物であった松尾多勢子の伝記編集を委嘱されたことに始まり、それを元にした『松尾多勢子伝』(山村書院、一九四〇年六月)や、『伊那尊王思想史』等多数の著書を出版している。また『信濃時事』等の地方誌、小学校や青年会での講演等によって、郷土の歴史や偉人について語り、戦前戦後を通して伊那地方における郷土史の権威として活躍した。以上は『市村威人全集』第二二卷(下伊那教育会、一九八一年三月)「年譜」を参照。

三十一 同書については、鈴木昭一による先行研究があるが、それはあくまで『夜明け前』の典拠として本書を確定することを目的としたものであり、『伊那尊王思想史』という書物自体が持つ性質については触れられていない。鈴木昭一「『夜明け前』と『伊那尊王思想史』」(『『夜明け前』論』桜楓社、一九八七年一〇月)参照。

三十二 前掲、市村『伊那尊王思想史』中編より引用。

三十三 作興会については、佐々木敏二「二地方におけるファシズム運動―長野県下伊那の場合」(藤井松一ほか編『日本近代国家と民衆運動 立命館大学人文科学研究所叢書4』有斐閣、一九八〇年九月)を参照。しかし、管見の限り作興会と市村や『尊王史』との関わりについて触れたものはない。

三十四 市村「松尾多勢子」(『市村咸人全集』第五卷、下伊那教育会、一九八〇年八月)より引用。

三十五 前掲伊東『草莽の国学』における「伊那の本学神社」という章については、市村の日記に、伊東が市村を訪ねてきたと書かれており(前掲『市村咸人全集』第一二巻)、伊東は市村のもとで下伊那に関する調査を行ったと考えられる。その意味で、『尊王史』が当時の国学研究及び維新史研究において先駆的な役割を果たしていたことが分かる。

三十六 前掲、成田『歴史』はいかに語られるか―一九三〇年代「国民の物語」批判』。

三十七 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか―ジェンダー・階級・アイデンティティ』(青弓社、二〇一三年七月)参照。

第二部 旅をめぐる語りの方法

第四章 旅の語りと〈粹〉―「旅」の方法

一・一九〇九年、伊豆の旅と三つの紀行文

一九〇九（明治四二）年二月、島崎藤村は田山花袋、蒲原有明、武林無想庵とともに五泊六日の伊豆の旅に出掛けた。以下がその旅程である。

二月二日 三島から大仁着。徒歩で修善寺に行き、一泊

二二日 馬車で下田街道を湯ヶ島まで行き、一泊

二三日 馬車で天城を越え、下田で一泊

二四日 石廊崎を見て下田に戻り、一泊

二五日 船で下田から伊東に、一泊

二六日 帰京

修善寺から湯ヶ島、天城を越え下田へという伊豆半島を縦断するこの旅は、そこから約一ヶ月後、三者による三つの紀行文として発表された。島崎藤村「旅」（初出『太陽』一九〇九年四月）^一、田山花袋「北伊豆」（初出『中学世界』同前）、蒲原有明「豆北豆南」（原題「豆南豆北」、初出『趣味』同前）がそれである。本章では、花袋と有明による同一の旅を題材とした紀行文と藤村の「旅」とを比較し、藤村における旅の表現について考察したい。

藤村「旅」において特徴的なのは、それが〈紀行文〉ではなく〈小説〉として書かれているということである。これは、単に発表媒体でのジャンル分けの問題ではなく、藤村によって意識的に選択された方法であった。以下

の花袋の記述は、そのことを明らかにしている。

氏（引用者注、藤村）の短篇に『旅』といふ作がある。伊豆半島を三四人して旅行したことを書いたものである。氏はこれを決して『紀行文』として取扱はなかつた。『え、あれで好いんです……あれで小説になつてゐると思ひます』かう氏は言つたことがあるが、さういふ風に重く見た形が非常に面白い。（田山花袋「諸家の紀行文短評」、傍線は引用者）二

このテキストに限らず、この時期の藤村は、〈紀行文〉というジャンルから距離を置く姿勢を見せている。明治三〇年前後に書かれた「松島だより」（初出『文芸倶楽部』臨時増刊、一八九六年十一月）、「木曾谿日記」（初出『文学界』一八九七年一〇月）、「利根川だより」（初出『帝国文学』一八九八年六月）以降の藤村に顕著なのは、自身の実体験としての旅を、虚構化して語るという方法である。

例えば「津軽海峡」（初出『新小説』一九〇四年十二月）は、息子を亡くした老夫婦の白露戦時の海峡通過を描く一人称小説であるが、これは同年七月の藤村の函館行き（妻の父である秦慶治に『破戒』出版の援助を求めるため）の経験を題材としている。一九〇七年一月に出版された『緑葉集』（春陽堂）「序」では、「（引用者注、明治）三十七年の夏、函館にある秦慶治氏、同貞三郎氏、其他二三の家族を訪問する為に、津軽海峡を渡つて始めて北海道の土を踏んだ。丁度露艦襲撃の噂のある頃で、殺気は北海の空を掩ふて居た。小諸へ引返して書いたのが「津軽海峡」である」とされている。白露戦下のなかでの初の北海道行きという、それ自体として貴重な体験である自身の旅を、わざわざ「自分」と語る老人の視点を通して描きなおしているのである。

その後、「旅」に継いで一九一三年から一六年に渡るフランス行きの往復航海を描いた『海へ』（実業之日本社、一九一八年七月）もまた、〈紀行文〉ではなく〈小説〉として発表されたものであった。藤村が〈紀行文〉と銘打って自身の旅を描くのは、フランス滞在中の経験を語り直した『エトランゼ』（春陽堂、一九二二年九月）以降

のことである。このようなある時期の藤村文学における〈紀行文〉の不在について、先行研究は全く問題にしてこなかった。

一九〇〇年前後から二〇年以上もの間、なぜ藤村が〈紀行文〉を書かなかったのかを明らかにすることは困難である。しかし、同一の旅に基づく他作家による紀行文との比較によって、一作品という限られた範囲ではあるが、旅を描く藤村の表現上の特徴を見出せるのではないだろうか。旅を〈小説〉として描くとは、具体的にどのようなことなのか、考察していきたい。

二・明治四〇年前後における「新しい紀行文」論

本節では、テキストの分析に入る前に、同時代において紀行文がどのように議論され、いかなるものが理想とされていたのかについて概観しておく。

「旅」が書かれた明治四〇年前後の文壇では、田山花袋、吉江喬松（孤雁）、前田晃（木城）といった自然主義派の文学者を中心として、「新しい紀行文」をめぐる論議が繰り広げられていた。具体的な議論の様子を、一九〇七年一二月の『文章世界』での合評会「今の紀行文家」（片上天弦、水野葉舟、吉江孤雁、前田木城）で見てもよい。木城による「まづ紀行文の定義から定めませう」という発言の後に続くものである。

孤雁「同じく紀行文といっても今のと昔のとは自ら違ふと思ふ。交通の開けぬ時代のものには、好奇心が重い地位を占めて、即ち行く先々の風物がローマンチックに見えたから、従つて自然美を味ふよりも寧ろ見聞を書く方が先きになつた。又不便を侵して行つたといふ事が誇ともなつて、単に為た事実を書いた。

木城「僕もさう思うふ。で、われ／＼が今日の紀行文に望む所は、己れ其地を踏まずとも其処の人情風俗もしくは山川の風光等が歴然と味はれる様に、即ち身親ら其境に臨んで目のあたり之を眺める様に生き／＼と其味を伝へて欲しいことである。

葉舟「然し、昔のは好奇心といふけれど、実はそればかりではなく、寧ろ案内記風に書く必要があつたのだらうと思ふ。今後のにも勿論案内記的要素は要求されるだらうが、其程度は研究物で、何処から右折すれば何宿、其処で何を食つたとやうの記事よりは、もう少し大観した、地図を展げて見せる様な案内が欲しい。

天弦「昔のとの比較は兎も角も、今後の紀行文は人間をも総て自然の内に■めて（引用者注、判読不能）、其地方色を出して貰ひたい。それと同時に又作者その人の感情、興味即ちパーソナル、インテレストも出ねばならぬ。両者の調和したものが良い紀行文であらう、其或る一部分が勝つと案内記になつたり叙景文になつたりする。（傍線は引用者）

ここからは、「昔」と異なる「今」の紀行文に求められる要素が大きく分けて三点記されている。一点目は、「見聞」よりも「自然美」を描く―つまり「己れ其地を踏まずとも其処の人情風俗もしくは山川の風光等が歴然と味はれる様」に、「身親ら其境に臨んで目のあたり之を眺める様に生き／＼と」風景を描き出すことである。これは、言文一致体と「写生」概念の導入とともに、従来の美辞、美文による定型的な風景表現からの離脱が志向され、その土地固有の「ありのまま」の「自然」という新たな表現システム、あるいはレトリック^三がそれに代わるものとして制度化された文学史的経緯を背景としている。また、「己其地を踏まずとも」という木城の発言からは、藤森清が「明治三十五年・ツーリズムの想像力」^四で明らかにした「アームチェア・トラベリング」という紀行文をめぐる読書行為の成立もうかがえる。

二点目は、「地図を展げて見せる様な案内が欲しい」という葉舟の発言にあるように、旅行者の目―へいま・こ

こゝを通した風景描写とともに、より俯瞰的で「科学的」に土地を記述するという点である。このことは、五井信「表象される〈日本〉―雑誌『太陽』の「地理」欄 1895-1899」^五が論じているような明治三〇年代以降の「地理」への関心、「国土」への意識を読み取ることができる。紀行文に求められたのは、「科学的」な客観性にもとづいてその土地ごとの特徴を炙り出し、〈日本〉という想像上の空間に再配置することでもあったわけだ。このような俯瞰的な土地の記述は、次節で見る花袋「北伊豆」に顕著な特徴でもある。

三点目は、以上二点を踏まえた「地方色」、すなわち「ローカルカラー」とともに、それと調和した形での「パーソナル、インテレスト」、つまり作者その人の感情や興味、その人ならではの視点を提示するという点である。これは、文学者による紀行文と、ガイドブックや探検家、学者による旅行記との差異化の意図が込められたものである。こうした差異化への意識は、田山花袋の紀行文論の中にも見出せる。花袋は「新しき紀行文」と題した文章の中で、西洋において旅行記と言えば「学者の地理的旅行記か、探検家の探検旅行記か」を指しており、「モウパッサンの『水の上』のやうなものは旅行記と言つて居ない」としながらも、「其の学者の旅行記」は「われ等の要求するやうな旅行記ではない」とし、「直覚的印象と理解的印象との好い塩梅に調和されて、実際のロオカルがその句と句の間に出て、そして批評と感興とに富んだやうなものが出来たなら、さぞすぐれた旅行記が出来るであらう」と記している^六。

「ローカルカラー」については、本号以外にも、この時期の『文章世界』誌上ではいたるところでその言葉を見出すことができる。一九〇九年五月の『文章世界』新緑号「文章講話」中の一節「ローカルカラー」では、「何処にでも必ず其処に付随した特色がある（中略）作者は苟も筆を執る以上、或る舞台を其の小説に書く以上、其舞台の特色が分明に出て来るやうに研究し学ばなければならぬ」とされ、それを磨く方法として「旅行といふこと」、「其地方と他地方とを比較して見ること」が提示されている。他に、一九一三年三月『文章世界』若草号の「文話」にも、「地方色の描写」と題して「ローカルカラー」が議論されているが、その好例として挙げられているのは、藤村の『破戒』や『千曲川のスケッチ』である。このことから分かるように、藤村はこの時期におけ

る文学的テーマとしての「ローカルカラー」の牽引者の一人であったわけだ^七。その藤村が〈紀行文〉という「ローカルカラー」と不可分の関係にあったジャンルに、なぜ積極的にかかわらなかったのかがますます疑問となるであろう。

また「パーソナル、インテレスト」については、紀行文における「私」性の表出と言い換えることもできるであろう。佐々木基成「〈紀行文〉の作り方―日露戦後の紀行文論争」『日本近代文学』六四、二〇〇一年五月が詳細に論じているように、案内記等との差異化を図るためのこうした「私」性の重視は、徐々に「政治性や情報性を切り捨て、過剰に〈文学〉的な問題性が中心となる」紀行文の〈文学〉化という現象につながっていく。あくまで「ローカルカラー」と「パーソナル、インテレスト」との調和を重視した花袋に比べ、前田木城や吉江孤雁などは、「パーソナル、インテレスト」の方に徐々に重きを置いていくようになるのである^八。また佐々木によると、こうした紀行文の〈文学〉化は、会話の多用や視点者の心理描写、紀行文と小説とのジャンルの境界の曖昧化など、表現上、制度上の変化としても読み取ることができるという。

右に挙げた紀行文の〈文学〉化を示す会話文の増加やジャンルの越境は、藤村「旅」においても見出される特徴である。しかし以下に見ていくように、藤村のテキストには、「ローカルカラー」を求めて「都会」から「田舎」を旅するというこの時期の〈紀行文〉のあり方そのものを対象化するという、いわば〈紀行文〉をメタ化する表現が書き込まれている。以下、その表現の試みを見ていきたい。

三・藤村「旅」と花袋「北伊豆」、有明「豆北豆南」

前節で確認した同時代の紀行文論を踏まえ、三者のテキストを比較してみると、やはりその方法においても紀行文「らしさ」を持ち、洗練された表現を行っているのは、花袋「北伊豆」である。「大仁から修善寺へ行

くには道程がざつと一里あまりある」^九、「汽車は大仁へ着いた。修善寺通ひの馬車はそこに旅人を待受けて居た」^十と、有明と藤村は物語を大仁駅から始めているのに対し、花袋は三島駅で豆相鉄道へ乗換えるところから描き出している点にも特徴がある。「正面には晴れた空に富士の吹雪が雲のやうに立つのが見えて、竹藪に囲まれた百姓家だの、小川にかゝつた水車だの」^{十一}といった「いろいろなもの早く／＼眼の前を通り過ぎる」車窓からの風景を記述し、「国府を此処に置いた頃から三島は既に伊豆の中心であつた」と歴史的な知識を記述した後は、以下のように続いている。

北伊豆の最も開けた処は、私等がこれから入らうとする狩野川の細長い流域である。伊豆は箱根から天城火山に連つて居るので山が非常に多く、平地といふものが殆どない。狩野川の豊穰な谷でも、其幅が一里位なものである。冬と春との境、田には水が張つて、畠には麦がいぢけて、ところ／＼梅が白く咲いて居るばかり、野も村も寂として居る間を、玩具のやうな小さな汽車が白い烟をぼつ／＼と吐いて走つて行く。(花袋「北伊豆」)

ここで花袋は、車両内にある「私等」の視点を離れ、これから向かう土地の地理的情報を提示し、そこから「私等」のいる車両を「玩具のやうな小さな汽車」として見渡す俯瞰的視野を読者の前に提示する。車窓からの流れるやうな風景を書き留めつつ、歴史的、地理的知識―前節で見た合評会での葉舟の言葉を借りれば「地図を展げて見せる様な案内」をテキストの中に織り込んでいる。紀行文作家花袋の洗練された技が読み取れる。

西村真次『紀行文作法』(博文館、一九〇七年二月)によると、紀行文に記述される内容は、①叙事的要素(叙景、科学的記述、歴史、人情風俗)、②叙情的要素(思想、感情)、③戯曲的要素(会話、行動)の三つに分類できるといふ^{十二}。この分類に従えば、花袋の紀行文には以上の三点が①を主としながらバランス良く配置されていることが分かる。これまでに確認してきたものは叙景、歴史、科学的記述といった①であるが、『島崎君、反射

炉が見えますぜ!』と私は起した。／島崎君は昨夜遅く今朝は早かったものだから、つい仮睡をしてしまった!などと言つて」というような部分は③の戯曲的要素にあたる。また、②叙情的要素についても、例えば以下のように、「私」の感情(傍線部)とともに風景を描き出すという①と②を両立させる形での表現を行っている。

修善寺の谷の入口で、路は二つに岐れるのであるが、其処まで行く間は、鳥渡感じが好かつた。天城がもうすぐ前に連つて、明日越えて行かうと思ふあたりに、白い雲が夕日に照されて、湧くやうに靡いて居る。下田街道は真直に向うに通じて居る。山の両方から緩かに迫つて居る具合と、雲の具合と、路の具合とが取合せて何とも云へぬ感を私に与へた。(花袋「北伊豆」、傍線は引用者)

花袋の場合、特に「私」が面白味のないところと判断した時には、「青羽根といふ処で馬車を下りて、碌々火もありもしない火鉢に押冠せるやうに顔を当てたことゝ、(中略)家の構造が山国の風を帯びて来たことゝ、先づその位のものであつた」というように出来事の羅列によつて旅程の説明を済ませている。その一方で、「私」にとつて特に印象深かつた風景については、引用部にあるように静止した視点からの詳細な描写を行っている。

有明「豆北豆南」もまた、花袋と同様に「わたくし」にとつて印象深かつた光景は、以下のように事細かに記される。

わたくしは一目見てこの浴室が気に入つてしまつた。第一に構造法が面白い。二坪半ばかりの切り詰めた狭い範囲の中で、どうしたら愉快的浴室が拵らへられようかといった苦心の程をよく見てやらなければならぬ。(中略)灰白色の石段を下りて、湯槽に浸つて上を仰ぐと、鬱陶しい天井が張つてあるでもなく、ずつと二階まで吹き抜きになつてゐる。(中略)工夫を凝らした浴室の内部の様子を書きあげて見れば、ざつとかういふことになる。(有明「豆北豆南」)

一方で、藤村「旅」においては、花袋、有明と比べると自然や建築への描写には重きを置いていない。例えば、花袋が「谷が二つに岐れて、見事な溪流が両方から落合つて、其処に釣橋がかゝつて居る。橋の彼方には、こんもりした檜の木が茂つて、下には大きい岩に砕けた水が或処は白く、或処は碧く、頗る面白い趣をして居る」と筆を割いて描き出す湯ヶ島の宿についても、「吾儕の案内された宿は谷底の檜の樹に隠れたやうな位置にあつた」の一言で済ませてしまっている。その代りに藤村において見られるのは、以下のような伊豆に暮らす人々への詳細な描写である。

馬丁は馬車から降りて、馬の轡を執りながら歩いた。山の上までは斯うして馬に附いて行くといふ。彼は自分の財産を護るやうに―ある時は一人の友達を頼みにするやうに、馬を大事にした。馬も彼の言ふことを聞いて、脚に力を入れ、吾儕を乗せた重い車を牽きながら、御料林の中の山道を進んで行つた。(藤村「旅」)

ここでは、花袋、有明の二人が描かない馬丁について、「彼は自分の財産を護るやうに(中略)馬を大事にした」と、その「内面」にまで踏み込んだ描写がなされている。この他にも、湯ヶ島の温泉に浸かる場面では、「吾儕の眼には種々なものが映つた―激しく労働する手、荒い茶色の髪、僅かにふくらんだばかりの処女らしい乳房、腫物の出来た痛さうな男の唇……」と、「山家の人達」の生活、あるいは人生がにじみ出るやうな身体を書き留めている。前掲の西村『紀行文作法』の分類に従えば、藤村「旅」は「人情風俗」を主として①叙事的要素をあらわしていることになる。またここで想起されるのは、『緑葉集』以降の藤村における「ローカルカラー」の表出が、その土地に暮らす人々の生活を描き出すことによってであつたということである^{十三}。この点から見れば、藤村「旅」は同時代の「新しい紀行文」が求めるものを描き出しているといえる。

しかし、「旅」において以上の点よりも顕著な特徴は、直接話法による会話文の多さである。それは『僕の生

涯には暗い影が近づいて来たやうな気がするね（後略）』というK君（花袋）の発言や、『男が白足袋を穿くなんて、柔弱だ―よく阿爺に言はれたものだ。僕の阿爺はやかましかつたからねえ』というA君（有明）の発言のように、時に「私」と三人の旅行者それぞれの人生をも浮かび上がらせる。しかし一方では以下のように、紀行文としてはノイズになるような旅行中の費用に関する発言も、度々記されているのである。

仕度が出来ると、直に宿の勘定をした。／『君、僕の方で払はう。』と私が言つた。／『ナニ僕が出しとくよ。』とK君は懷中から紙入を出しながら答へた。／『ホウ、かゝりましたナ。』とA君は覗いて見た。／『随分食つたからね。』とK君は笑つた。早速M君は手帳を取出した。（藤村「旅」）

このほか、下田の宿で一泊し石廊崎に向かう朝の場面でも、「吾儕は勇んで旅支度を始めた。其時M君は手帳を取出した。兎に角こゝで一度帳面の締くゝりをして、出すものは出す、受取るものは受取るとした」というように、費用をめぐる四人のやりとりが書き留められている。また「旅」においては、宿泊先での食事についても事細かに記述されている。これは、前節で確認した「新しい紀行文」論においては「何処から右折すれば何宿、其処で何を食つた」というような記述であり、費用の話も含め、〈文学〉としての紀行文にはそぐわないように見える。

さらに西村による分類に従うと、会話や旅行者の行動は③戯曲的要素にあたり、全体的なバランスを見れば、藤村「旅」は比重が③に置かれているといえる。つまり「旅」は、紀行文が主とする①の叙事的要素^{十四}、つまり旅行先の土地そのものよりも、四名の旅行者による旅そのものが、その舞台裏をも含めて主として描かれているのである。「旅」という具体的な地名を記すことのないタイトルは、その意味でこのテキストに極めて相応しいといえる。

四、旅の語りと〈粹〉

藤村「旅」においても一つ特徴的な点は、以下のように旅の後に「吾儕」が帰っていく先である東京の風景を、テキストの中に織り込んである点である。

それは翌日東京へ帰るといふ前の晩だった。吾儕は烈しい、しかしながら楽しい疲労を覚えた。短い旅の割には可成種々な処を見て来たやうな気もした。皆な留守にして置いた家のことが気に掛かつて来た。同時に、しばらく忘れて居た工場の笛、車の音、唸るやうな電車、煤と煙と埃とで暗いやうな都会の空に震へる彼の響を思出すやうに成つた。彼の単調な、退屈な……（藤村「旅」、傍線は引用者）

右に挙げたのは、「旅」の末尾の部分である。東京へ帰る前夜、「吾儕」あるいは「私」は激しくも楽しい疲労とともにこの旅を振り返りつつ、留守中の家への心配から、「彼の単調な、退屈な」とされる「都会」の生活を想起する。このような末尾の表現は、「寒い北伊豆から暖かい南伊豆に私等の心は飛んだ。／『明日は天城、下田。』／と私等は繰返した」で閉じられる花袋、「伊東ではその晩、夕立がした」で閉じられる有明のテキストには見られない特徴である。さらに、この末尾の表現から藤村「旅」の全体を見渡してみると、テキストの冒頭に近い場面には、以下のような記述があることに気がつく。

其日、吾儕の頭脳の内は朝から出逢つた種々雑多な人々で充たされて居た。咄嗟に過ぎる影、人の息、髪のにほひ――汽車中のことを考へると、都会の空気は何処迄も吾儕から離れなかつた。吾儕は、枯々な桑畠や、浅く萌出した麦の畠などの間を通つて、こゝまで来たが、来て見ると斯の広い湯槽の周囲へ集る人々は、いづれも東京や横浜あたりで出逢さうな人達ばかりである。男女の浴客は多勢出たり入つたりして居る。中に

は、男とも女とも思はぬやうな顔付をして、女同志で湯治に来たらしい人達も居る。その人達の老衰した、萎びた乳房が、湯気の中に朦朧と見える。吾儕は未だ全く知らない人の中へ来て居る気はしなかった。(藤村「旅」、傍線は引用者)

これは、大仁駅から徒歩で修善寺の宿に到着した直後、浴室での様子を描いた場面である。ここでは、「吾儕の頭脳の内」での回想という心象風景として、「朝」―すなわち東京を出発してからここに至るまでに「私」が見てきたものが描かれる。つまりここでは回想による心象風景を通して、冒頭の大仁駅以前の旅の始まりが描かれているのである。これはまた、「西風の寒いく／＼日の午後に、私等は三島駅で、豆相鉄道の小さな車室に乗り替へた」で始まる花袋、また前節で引用した有明には見られないものである。

言い換えるならば、花袋、有明のテキストにおいて、物語世界は旅行先の土地に終始している。旅先という非日常世界を、本来連続している日常世界から切断することによって描き出しているのである。しかし藤村のテキストには、先に引用した冒頭に近い場面と結末の場面によって、その非日常的な旅先の世界を包み込む〈枠〉が存在していることになる。そしてこの〈枠〉は、「彼の単調な、退屈な……」と記される東京の風景と同時に、そこに暮らす生活者としての「私」あるいは「吾儕」の姿を、旅の語りのなかに持ち込んでしまう。

この点を踏まえると、藤村のテキストに描かれた旅が、旅の費用や食事といった旅の些事といえる事象を事細かに記している理由も見えてくる。〈枠〉の存在によつて、「私」や「吾儕」の実生活において不可欠な事象もまた、同時に侵入してしまうのである。また前節でも言及したように、その生活は人生とも言い換えることができる。先でも引用した『僕の生涯には暗い影が近づいて来たやうな気がするね(後略)』、『(前略)僕の阿爺はやかましかつたからねえ』といった旅行者の生に関わる事象は、本来旅先の風景を描き出し、読者をその世界に引き入れる〈紀行文〉には必要のないことであろう。むしろそのような「私」性は、読者のテキストを通じた空想上の旅を妨げることに繋がる。本テキストが〈紀行文〉ではなく〈小説〉であること理由は、ここに見出せ

るのではないだろうか。〈柰〉の存在が、本テキストが〈紀行文〉であることを拒否しているのである。

この「旅」というテキストはその後、改造文庫第二部第四五篇として出版された『藤村紀行文集 山陰土産その他』（改造社、一九二九年二月）に、「伊豆の旅」に改題されて再録されている。そしてこの「伊豆の旅」においては、本文末尾の一文「彼の単調な、退屈な……」が削除されている。このような、当初にはなかった地名が標題の中に明記され、本節で重視してきた最後の一文が削除されたところに、〈小説〉として書かれた「旅」を、〈紀行文〉として再編する際の作為の跡が見える。この変更の跡は、やはり問題は〈柰〉にあったということを、逆説的に示しているのではないだろうか。

以上、本章では一九〇〇年前後から一九二〇年前後までにおける藤村の〈紀行文〉の不在を、〈小説〉として書かれた「旅」というテキストをもとに考察してきた。この旅行記を〈小説〉として描くという方法は、先述したように、第五章で扱う『海へ』にも引き継がれていく方法である。しかしそれ以降、例えば『エトランゼ』などの〈紀行文〉として書かれたテキストが、「旅」や『海へ』との間にどのような表現上の差異があるのかは、未だ不明である。さらに一九九〇年前後に書かれた「松島だより」や「木曾谿日記」と、一九〇〇年前後の「旅」との間の空白についても、藤村の詩から散文、美文から言文一致体への移行の問題も含めて検討しなければならぬ。一九九〇年前後、あるいは一九二〇年前後を境とした藤村の旅の表現には、どのような差異があるのか、またそれは同時代の文学の状況と、いかなる関係をもつのか。今後引き続き考察していきたい。

一 「旅」はその後『小説藤村集』（博文館、一九〇九年十二月）に収録。また短編小説集『食後』（博文館、一九一二年四月）収録の「紅い窓」（初出『早稲田文学』一九一二年七月）は、この北伊豆の旅で馬丁から聞いた「色男の為に石碑を建てたとかいふ洋妾上りの老婆」の話に由来するものである。

二『花袋紀行集 第三輯』（博文館、一九二三年六月）より引用。

三 安藤宏『近代小説の表現機構』（岩波書店、二〇一二年三月）、永井聖剛『自然主義のレトリック』（双文社出版、二〇〇八年二月）参照。

四 小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七年五月）に収録。

五 金子明雄ほか編『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』（新曜社、二〇〇〇年四月）に収録。

六 田山花袋『花袋文話』（博文館、一九一〇年一月）より引用。

七 持田叙子は、「『紀行文の時代』と近代小説の生成——習作期の田山花袋を中心に」（『国学院雑誌』八七（七）、一九八六年七月）において、明治三〇年前後における「紀行文が盛行した頃の文壇は、一方では自然主義文学の形成期に当たっており、その最前線のグループは小説の主題に地方的素材を求めている」とし、その一人として藤村の名前を挙げている。

八 「旅行記の面白味」（『文章世界』一九一一年一月）という文章の中で孤雁は、「ローカル、カラーが如何とかいふやうな事よりも、或作家が如何にその地方を直感したか、その直感を如何に表現したかといふことが第一の重大な問題」であると述べ、その「個人的特色」あるいは「パーソナル、インテレスト」がよく表れた好例として『水の上』をはじめとしたモーパッサンの紀行文を挙げている。

九 有明「豆北豆南」の引用はすべて『飛雲抄』（近代作家研究叢書六六、日本図書センター、一九八九年一〇月）による。

十 藤村「旅」の引用は、『藤村全集』第三卷（筑摩書房、一九六七年一月）による。

十一 花袋「北伊豆」の引用は、『定本 花袋全集』第一六卷（臨川書店、一九九四年七月）による。

十二 分類の整理にあたっては、前掲佐々木「（紀行文）の作り方」を参考にした。

^{十三} 中山弘明『溶解する文学研究―島崎藤村と〈学問史〉』（翰林書房、二〇一六年十二月）第八章「水彩画家」の光彩―〈ローカル・カラー〉論」参照。

^{十四} 前掲、西村『紀行文作法』では、紀行文の定義を「文学中の叙事文」とし、そこには「叙景」が不可欠であるとされている。

第五章 「私」語りの可能性―『海へ』

一．はじめに

『海へ』（実業之日本社、一九一八年七月）は、一九一三年から一九一六年に渡る島崎藤村のフランス行きのうち、特にその往復航海を題材として描かれたテキストである。『平和の巴里』（佐久良書房、一九一五年一月）、『戦争と巴里』（新潮社、一九一五年二月）、『新生』（第一・二巻、春陽堂、一九一九年一・二月）、『エトランゼエ』（春陽堂、一九二二年九月）等、フランス行きに関わる作品は多くあるが、三年に渡るパリでの生活や第一次世界大戦下の経験をすべて省略し、東京とパリとの往復のみに焦点を絞った点に、『海へ』の特異性がある^一。

『海へ』は、もとは帰国直後の感想記（第五章）に始まり、その後スエズ経由での往路（第一・二章）と喜望峰経由での復路（第三・四章）が書き継がれる形で成立したテキストである。藤村が神戸から東京へ戻ったのが一九一六年七月八日であるから、一九一三年四月における出発時の様子が書かれるまでには、三年以上もの時間が経っていることになる。このため、既に先行論においても指摘されている通り、テキストに描かれた航海の様子は単純な見聞の事象を意味せず、帰国後の視点から再度意味づけられた出来事だと言える^二。

これまでの先行研究において、『海へ』は多くの場合、島崎藤村のフランス行きそのものをどう位置づけるかという視点から論じられてきた。すなわち、いわゆる「新生」事件を中心とする危機的状況からの「（再生）の道」の獲得^三として、あるいは『夜明け前』につながる近代化論への契機―「十九世紀日本」への関心^四といったようにである。しかし、『海へ』というテキストは、そのような作家の思想的営為の単なる反映として読むには、あまりにも厄介なテキストである。

その厄介さとは、すなわち以下のような、同時代読者が辛辣に批判した『海へ』における表現の奇妙さである。

「島崎藤村氏の中央公論に出された海へ」は、藤村氏が海外に行つて歸つて来ても、其れは少しも其創作の上に進化のなかつたことを表はして居るものである。／徒にセンチメンタルになつたり、何事かについて、意味の深さうに為る書き方は何といふ愚劣な事であらう。（中略）船の変つた土地に入つて行くのにもかゝらず、其変つた土地の状態すら、なほ甚だしく物足らなく描かれて居る此一文を、藤村氏は如何にして創作であると考へたのであらうか。斯んな浅いものは、創作としての価値のないものであることを言ふのである。

（KNH生「四月の文壇を評す（三）」五）

このような同時代の読者の声を、本論では重く見たい。それは、こうした同時代の読者が感じ取つた『海へ』の表現への違和感を、藤村の「詩精神の復活」^六と見るような読み方、またそれをあくまで藤村の自然主義から小説——つまり『新生』の告白への過渡的なものとして受け取る立場^七とは、異なる読み方を本テキストにもたらそうとするものである。このKNH生が本テキストに感じ取つた第一の違和感は、「船の変つた土地に入つて行くのにもかゝらず、其変つた土地の状態すら、なほ甚だしく物足らなく描かれて居る」という言葉に示されているように、旅をする作家の眼に映つたはずの風景を、本テキストが精緻に表そうとしないことに対するものである。洋行帰りの藤村に読者が求めていたのは、彼の眼を通して描き出される、西洋あるいは航海中の風景そのものにあつたわけである。しかし、『海へ』というテキストは、風景の描写も「物足らなく」、「徒にセンチメンタルになつたり、何事かについて、意味の深さうに為る書き方」によつて、読者が旅の世界に入り込むことを妨げる。つまりこのテキストは、洋行帰りの者に期待される旅の語りの約束事を、その表現によつて裏切つてゐるのである。

このことは、前章で検討した〈紀行文〉を書かない藤村とも繋がる問題である。本テキストは「旅」と同様、第五章を除いては全て〈小説〉として発表されたものであつた。また東京とパリとの往復のみに焦点を絞る本テ

クストは、前章において指摘した旅の〈杵〉そのものが全景化したものと考えられる。そしてその全景となった〈杵〉は、「旅」と同様、「私」の問題を旅行記の中に持ち込んでいく。『海へ』において力点が置かれているのは、船中や立ち寄った港の様子をリアリズム的に描写することではなく、旅する「私」自身を、時に感傷的な抒情を含みながら自己表出することにあるのだ。つまり同時代読者が『海へ』に感じ取った違和感は、この過剰な「私」語りにあったのである。帰国後の藤村は、なぜ読者の期待を裏切ってまで「私」について語らなければならなかったのだろうか。「私」を語ることによって、どのような旅を描き出そうとしたのだろうか。

しかしこうした問いは、先述のようにこれまでの先行研究では、『新生』の自己告白までの道のりとしてしか位置づけられてこなかった。だが、以上のように藤村文学における奇妙な旅の語りという視点から見ると、別の読み方も可能なのではないかと考える。そこで本章では、この『海へ』における「私」語りに改めて注目し、終始「私」について、特に以下に見ていくように「私」の「眼」について問い続ける語りをもつ、別の可能性について考察してみたい。それは具体的には、藤村文学における自己編集への省察と、『海へ』以降の藤村の日本近代化論を相対化させるような可能性として、浮かび上がるはずである。

二．「私」の「眼」への戸惑い

帰国後、最も早くに書かれた第五章「故国に帰りて」には、以下のような一節がある。

長旅は実に私を疲らせた。思へば帰朝者の心理は世の多くの人々によりて想像さるゝほど幸福なものではない。遠く故国をさして帰つて来るほどのものは一人として旅の楽しかれと願はぬは無からう。帰国の後に於いて実際彼等が経験するところのものは果して何であらうか。激しい神経衰弱に罹るものがある。強度に

精神の沮喪するものがある。種々な病を煩ふものがある。突然の死に襲はれるものがある。驚かれるではないか。それを見ても、異常で複雑な作用が、制へがたい動揺が、ある隠されたる働きが、仮令眼には見えず人には知られない迄も、多くの帰朝者の心を決して静かにしては置かないことが分る、是はそもく長い外国生活の結果か、まだく吾儕の異人種相競ふ海外の旅に慣れない証拠なのか、張り詰めた神経の急激な静止と休息とに因るのか、吾儕日本人の本国の生活が外国のそれに比べて余りに隔絶れて居る為なのか、それともまた風土の激変の結果か、いづれとも私には一概に言ふことが出来ない。日本に帰つて半年ほどの間、殆ど茫然自失の状態にあつたとは、ある友人の私に話したことだ。私は斯の友人の言葉の意味を自分の身に切に感ずる。『海へ』第五章一、傍線は引用者）^八

第五章に描かれるのは日本近海から神戸に上陸し、その後大阪と京都を訪ねて東京に戻つて来るまでの様子であるが、上記の引用には、帰朝後の「私」の心の動揺が、下線部の「激しい神経衰弱」「精神の沮喪」、「異常で複雑な作用」「張り詰めた神経」といったように、精神の錯乱のイメージをまとつて表現されている。この一節は、その後『エトランゼ』の冒頭に引用され、また『夜明け前』第二部第一三章二においても明治維新による街道の動揺というかたちで書き換えられている。第五章における「私」は、こうした精神の動揺と、「どうやら私は元の素人に返つたやうな気もする」（五・一）という書くことそのものへの不安を抱えながらも、「あの青い深い海から今が今這ひ上がつて来たばかりのやうな旅人としての自分の心持」そのままを、「読者諸君に伝へ」（同前）ることを宣言する。

さらにここで表出された錯乱のイメージは、その後同章において、以下のような表現を通して継続されている。

下駄穿で通る人を見るさへ不思議に思はれた。男や女の素足の風俗は既に新嘉坡あたりから見て来たものだが、でもめづらしい。そのあらはな足の皮膚から来る感じには、時としてはみだらなものをさへ伴つた。

どうかすると、私はまだ海に居るやうな気がする。何処かの港へ上陸したに過ぎないやうな気がする。自分の国が自分の国でないやうな気がする。私の心は南阿弗利加のケエプ、タウンへも行き、ダアパンへも行った。あのマレエ人や印度人や支那人などの欧州人と群居する新嘉坡あたりの町へも行つた。時々私は自分の眼を疑つた。何故といふに、自分の前を歩いて居る女が、それが実際日本の女ではなくして、マレエ半島あたりの土人の女ではないかといふやうな気を起こさせるのだから。『海へ』五・五、傍線は引用者

この一節が示しているのは、長い船旅で抱いてきた郷愁を、一瞬で冷めさせるやうな光景を映し出す「私」の「眼」に対する驚きである。その「眼」は、日本の特に女性たちの姿を、それ以前に見てきた植民地の女性たちに重ねてしまうまなざしであつた。「自分の国が自分の国でないやうな気がする」とは、日本が「ケエプ、タウン」や「ダアパン」、「新嘉坡」といった植民地に見えるということである。その後にも「私」は、「長い旅から、青い海から、遠い外の国の方から、私が持つて帰つて来た眼は自分ながら信じ難い程の別な眼だ。日本人でありながらエトランゼエのやうにものを観せる眼だ」（五・十八）と語り、その眼に映るものが「一時的の幻影なのか」、そこに「反つてより多くの真実が含まれるのか」（同前）と、答への出ない自問を繰り返す。

これまでの先行研究では、この帰国後に得た「エトランゼエ」の眼こそが、後の藤村の「文明批評」——日本の近代化論に繋がつたと論じられることが多いが⁹、ここで力点が置かれているのは、そのような「眼」をもつ「私」への戸惑いそのものである。語り手はそれを、日本の土を踏みつつも「どうかすると私はまだ海にゐるやうな気がする」という心身の未統合な状況——すなわち、先の引用と同様の錯乱のイメージとともに描き出す。つまりここで問われているのは、日本の近代の如何ではなく、そのような「眼」をもつに至つた「信じ難い」ほどの「私」そのものである。

またこの一節は、『新生』においても「町の空へ出て見ると、広い世界を遍歴して来た旅行者の誰しもが経験するやうな、旅の与へた心持がまだ彼には薄らいでいなかった」（三六）＋に続く部分で引用されている。『新生』

においては、『海へ』での日本を植民地としてまなざす「私」と、それを受け入れがたいものとする「私」という矛盾を孕んだ「旅の与えた心持」が、帰国後に結局節子とよりを戻してしまった自分の中の矛盾に繋がられている。ここでもやはり問われているのは、矛盾を抱えた「私」自身なのである。

以上のことを踏まえると、この第五章以降に書き継がれた各章が、執拗なほどに「私」というものを語る理由が見えてくる。『海へ』は、「実に失敗に終つて了つた」（五・七）とも語られる旅の「おわり」を始発点として、このような「信じ難い」ほどの「眼」をもつに至った「私」自身を、その「はじまり」から語り直すことで問い直そうとしたテキストなのである。

三．「私」をめぐる編集作業

第一章「海へ」は、孤独な沈滞の中にあつた「私」が、「海から来たもの」の言葉に誘われて身を起こすというプロローグに始まり、その後、時間軸に沿った旅の進行とともに、海上にいる「私」と旅に出る以前の「私」との対比が描かれている。この二つの時空間の行き来は、同章中、章末の一節―「Life をして赴くまゝに赴かしめよ」の想起―を加えると全部で四度繰り返される。

第一節 神戸発まで

第二節 船中の初夜 ※回想①「私は、悲しい憤怒の言葉を残して来た」

第三節 上海まで

第四節 上海、香港まで

第五節 サイゴンまで ※回想② 冒頭「八角形の古い柱時計が見える」

第六節 サイゴンからシンガポールまで

第七節 コロンボまで ※回想③「神は私に小さな観察の力を与へた」

第八節 コロンボからアラビア海

第九節 ジブチ

第十節 スエズからポートサイドまで ※回想④「私の旅の空はまだそれから」

海へと赴いた（いま・ここ）にいる「私」とは、もちろんその旅が「おわり」を迎えた時点から語り直された「私」である。しかし本章ではその「おわり」を知る時点が書き込まれることはなく、海上にいる（いま・ここ）の「私」の視点で、それ以前の「私」が対比的に想起されることで、「私」が旅立つ理由、旅に出ざるを得なかった理由が浮き上がるかたちになっている。その回想パートで行われるのは、『微風』（新潮社、一九一三年四月）に収められた過去作の自己引用である。第一章は自己引用という手法を駆使し、それぞれに独立した物語の一部が切り離され、つなぎ合わされることで、一九一三年当時の旅の「はじまり」における「私」を描き出したテクストなのである。本節では、その「私」を描き出すための藤村の編集作業の跡を読み取っていきたい。

野蛮人は必要によつて動く。私が矢張それだ。もうどうにもかうにも仕方がなくなつて、それから動いて来た。私はあの七年住み慣れた小楼に、土の氣息にまじつて通つて来るかすかな風の嘆息のやうにして、悲しい憤怒の言葉を残して来た。『海へ』（一・二）

第一章第二節における回想①は、上記の言葉によつて始まる。この後、海上の「私」は「日光」（初出『中央公論』一九一二年四月）からの引用を、以下のように「と書き残した」「とも書き残した」という末尾の表現を添えて繰り返す。

すべてこれらの光景に対しても、私は涙一滴流れなかった。唯、見つめたまゝで立って居た。憐れむべき観察者。然り、我等は遂に真心の何物をも持たぬであらう。とも書き残した。『海へ』一・一二

この直前に語られているのは、妻が亡くなった時の火葬場で目にした光景、それから幼くして亡くした三人の子ども達の墓を掘り起こした時の光景である。「私」は、これらの痛ましい光景を前にしてもなお、涙を流す代りに「観察」を続けてしまう。その「観察」は、最愛の人々を「貝殻のやうな骨」、「黒い海綿のやうな脳」、「半ば土と化した骨」や「生々とした額の骨」(同前)に付着する髪の毛といった、散乱した器官という物質に変えてしまう。「日光」において、この後に続くのはフロアールの生涯に仮託した「芸術家」としての「私」の苦悩の告白であり、このテキストはもともと、一九〇九年五月の『文章世界』に掲載された田山花袋「フロアールとゴシクル」に触発されて書かれたものだと思われる。上記引用の「観察」をめぐる記述について、高橋昌子は、「真心」を失った「憐れむべき観察者」を観察するという二重化された「観察」があると指摘している^{十一}。

こうした「日光」を引用する『海へ』では、先述の「とも書き残した」という末尾の表現が、「日光」の記述を一段引用する毎に繰り返され、都合九度も反復される。この反復によって、かつての「私」の苦悩は、強迫的な激しさをともなうものとして描き直されている。そしてその結果として描かれるのは、元テキストの『心が渴いて来た―どれ、日光を浴びやうか』^{十二}と箱根への旅を思いつく「私」の姿ではなく、冷たい「氷の海」に溺れた「私」の姿である。元となっているのは「突貫」(初出『太陽』一九一三年一月)の最後の場面、本文中では「ある試み」とされる『破戒』(一九〇六年三月)執筆中の生活の援助を申し出るために、「志賀に居る友達」を訪ねた際に経験した雪道での以下の記述である。

行く人も稀な雪の道―つく／＼私はその眺めが自分の心の内部の景色だと思った。(中略)まるで私の周り

氷の世界のやうだつた……（中略）漸く自分で自分の身体を抱き締めるやうにして、心覚えの道を進んで行つた……私の足許には氾濫のあとの雪に掩はれたのがあつた。それが起伏する波のやうに見えた。私はその中へ滑り込まないように気をつけながら、前へ、前へと辿つて行つた……前へ……前へ……（「突貫」、引用者注、このあと「……」の連続が二行半続けられる^{十三}）

「突貫」は、『破戒』の出版を志して上京しようとするかつての「私」の姿を語り直したものであり、それ自体として『海へ』と同様に「私」の再構成をもくろんだテキストである。上記引用の「自分の心の内部の景色」でもある「氷の世界」とは、「旧主人」（初出『新小説』一九〇二年一月）、「藁草履」（初出『明星』同年同月）以降、身近な人々に文学の素材を求めたが故に、非難の声を浴びるようになった「私」自身が置かれた状況であり、その逆境を越えて作家としての道を歩もうとする「私」自身の姿が、「前へ……前へ……」という「突貫」の姿勢に込められている。

しかし、その表題ともなつた元テキストのもつ重要なモチーフである「突貫」の姿勢は、「海へ」においては消去され、以下のように書き換えられている。

丁度私が遁れて来た世界とは、彼様いふ眩暈と戦慄との出るやうな寂寞の世界だ。そこにあるものは降りつもる『生』の白雪だ。そこはまるで氷の世界だ。氷の海だ。そして私はその氷の海に溺れた。七年の小楼の生活よ、さらば。（『海へ』一・一二）

「突貫」と「日光」は共に、困難を描き出しながらも結末にはその時々々の「私」が取り得た前向きな姿勢が書き込まれていた。しかし「海へ」における語りは、そうした過去作にあつたかすかな希望を消去し、「とも書き残した」の反復によつて表されてきた苦しみの連鎖を断ち切るべく、海へと向かう「私」を描き直す。同様に、本

章第五節における回想②もまた、『微風』収録の藤村の姪にあたる「お節」の結婚を描いた「出発」（初出『新潮』一九二二年一月）を典拠にしつつ、もとはお節から見た「叔父さん」とその子供たちの様子が、妻亡きあとの「私」の困難の表出として語り直されている。

このようにして、「海へ」の「私」はかつての「私」を描くテキストを引用しつつ、その記述に差異をもたらすことによって、海へ赴く新たな「私」の物語を紡ぎ出す。その物語とは、それぞれに独立する元テキストの記述を文脈から切り離し、編集し直された「私」の物語なのである。そしてそれは以下に見ていくように、旅が進むにつれて「観察」、すなわち自身の「眼」に翻弄される「私」の物語として展開していく。

四．引き裂かれた「私」と〈船中〉という空間

神は私に小さな観察の力を与へた。長いこと観察は私の武器であつた。私はそれをもつて世と戦つて来た。

けれども、一切の身についたものを捨て、心から深い深い溜息を吐きに來た私は、その最後の武器までも投出さなければ成らないやうになつた。（『海へ』一・七）

上記の引用は、前節でまとめた第一章における回想③の冒頭である。これを出発点として、今度は「突貫」を典拠とするかつての「私」への省察が展開されていく。その内実とは、前節で言及したように、「観察」の対象とされたモデルたちから非難を被った「私」であり、そうした非難にも「ひるま」ずに、その「武器」を磨いていた果てに辿り着いた「極静の地獄」（同前）であつた。前節で確認したものと同様、ここで語られる「私」もまた、元テキストの文脈から切り離され、編集し直された「私」である。

しかしながら、この後に続く場面では、意に反してその「観察」を捨て去ることのできない「私」が、自己嫌

悪とともに描かれている。つまりここでは、先に確認した旅立つ「私」が志向するものと、実際に海へと向かった「私」との不一致が描かれているのである。そしてこの両者の対立は、本文中で解消することはない。第五章に描かれた望まざるものを見る「私」の「眼」は、すでに旅の「はじまり」において、さらに言えば作家としてのそもそもの出発点において「私」が抱えていた矛盾であつた、として説明されるのである。

では、そうした矛盾を抱えながら、往路の旅において「私」が見てしまったものとは何なのか。「私」が「観察」を放棄出来なかった理由として語られるのは、以下のような船中での経験である。

『あそこに立つて居るのは、ありや支那人かねえ。』／『なあに、あれは日本人だ。』／こんな調子の言葉が新嘉坡あたりから乗込んだ夫婦者の口から出る。その侮辱に対しては私も身を護らずには居られない。止むなく私は武器を用ひる必要に迫らるゝ。観察はその夫婦者から孔雀めかした羽を抜き去つて見せる。そこには礼儀も知らぬ、出稼の旅の鴉が残る。不思議にも私は真の相をよく観ることによつて、自らの憤りを忘れることが出来た。(『海へ』一・七)

『海へ』第一章、第二章には、搭乗したフランス船エルネスト・シモンの二等船客における様々な国籍や民族に属する男女の存在が描かれている。その中には、香港から乗船した女性を含む「五六人連れの広東人」や、コロンボからポートサイドまで同行した日本人である「絹商のM君」、パリ見物後アメリカに留学するという「フリツピンの青年」等、東洋人の存在も記されているが、やはり記述の中で圧倒的な位置を占めているのは、神戸から同行した三人のフランス人(「老技師」「隠居」「ドクトル」)やサイゴンから乗船した「旅役者の一行」、軍事探偵かと噂される「猶太人」といった西洋人である。上記の引用に描かれているのは、それらの西洋人たちからの差別的なまなざしや侮辱に対し、そこから「身を護る」ために「観察」という「武器」を用いる「私」の姿である。

旅の初日、「私」は「隠居」から日本人であるという理由だけで同室での宿泊を拒否されている。「狡猾で、そして無邪気な子供のやうな目付をした」(一・三) 彼を始めとして、その後の「私」はある程度はそうした西洋人たちと打ち解けていく。だが、議論好きな「猶太人」からのからかい半分の日本人批判に対し、満足な応答をすることができない自身の「口惜しさ」(一・八) を書き留めているように、「私」には言語面での圧倒的な不自由さがあつた。「人種の相違」(一・九) を理由に「私」をはじめとした東洋人を侮辱する人々に対して、「私」はせめてもの抵抗として、彼らをまなざし返すのである。ここでの「私」は、見ることもつ暴力性に自覚的である。その意味で、「観察」を「武器」という「私」の言葉は、単に「私」が世の中を渡ってきた才能というだけでなく、他者からの視線による暴力に抗うための暴力＝武器という二重の意味をもつ。

しかし、こうした「止むなく」用いる武器としての「観察」を皮切りにして、旅をきっかけに捨て去るつもりであつた「私」の「観察癖」(一・七) は再発してしまう。そしてそれは「病的に近い」(同前) と自ら語るように、過去を捨てたはずの「いま・ここ」にいる「私」を引き裂くものとして描かれている。

私は何もかもそこへ投げ出してしまひたかつた。唯長い嘆息が泄らしたかつた。波の動揺に身を任せたかつた。あの窓の下 of 悲劇役者が相手の女に擲られやうと抓られやうと、散髪を掴んで引廻されやうと、その仲直りとして男が女の足を舐らうと、セルバンテスの講釈に來る西班牙人の鼻がいかに憐れであらうと、女房と子を連れた殖民地の軍人が犬や鴉の鳴声をして家族を楽しませやうと、『猫の夫人』という渾名まで取つた婦人が大事な籠の中の猫に逃げられやうと、オペラの歌うたひが毎晩口をすゝがうと、あのこそく隠れるやうに歩き廻る不思議な猶太人が軍事探偵であらうと、無からうと、そんなことはもう私には奈様でも可かつた。(『海へ』一・七)

これほど矛盾に満ちた表現もないだろう。ここでの「私」は、「何もかも」を「投げ出してしまひたい」、「そん

なことはもう「奈様でも可かつた」と語りながら、「窓の下の悲劇役者」に始まる船中の人々の様子を、「うしやうと」の反復によって事細かに、執拗に描き出すのである。

しかし、以下の引用に顕著なように、こうした嫌悪をともなうが故にかえって執拗に描き出される「私」の「観察」は、「私」が旅立った「海」の別の側面、もうひとつの姿を浮き彫りにすることにもなるのである。

習ひとなつた私の観察癖はもう病的に近かつた。私はそんな人達を観察しやうと思ふ心のない時でも、何時の間にか私の視線がその女優と官吏との方に注いで居た。私は半ば意識なしに、そこにあるものを見ようとして居た。レエスを編む女の手を。太い首筋を。女らしい耳たばに垂れる金色の耳輪を。それからまた特に女の前で、優美を失はない程度に振舞つて見せることを知つて居るやうな官吏の大胆と快活さとを。『海へ』

一・七

ここに記されたフランス人女優と彼女に言い寄る一等船客の官吏にしろ、同じく旅役者の一行の一人である女優を追いかけ回す「隠居」にしろ、「私」の「観察」によって描き出される「海」とは、船中における権力関係を多分に孕んだ欲望の世界である。この他にも、「私」は秘密裏に海上を渡るおそらく売春に従事する日本人女性の存在を記述し、また「素性の怪しい」ハンガリー人女性の乗客についても、同様に売春婦ではないかということをも「老技師」とともに噂している（一・六）。これらは明言されることはないけれども、「老技師」による「まるでわれ／＼の船は浮いて居る吉原です」（同前）という言葉が、それを物語っている。一等船客の乗客を含む欲望する男性たちと、「旅役者」や娼婦といった欲望される女性たち。引き裂かれた「私」が嫌悪とともに語る「観察」は、人種とジェンダーと階級が複雑に絡み合う空間としての〈船中〉を、図らずも暴き出しているのである。

五・「私」語りのもつ批評性

本節では、第四章「故国を見るまで」に描かれた復路の旅の記述を検討したい。先行研究でも指摘されているように、復路の旅の語りは、往路と比較すると異なる点が多くある^{十四}。

まず旅の実質的な面として、復路で「私」が利用したのは外国船ではなく、日本船の「熱田丸」であったこと、そして航路は、スエズ経由であった往路と異なり、イギリス発の喜望峰経由であったことが挙げられる。次に、そうした外的な変化にも関連して、復路における「私」の語りは、往路に比べて全体的なトーンが明るく、パセティックな語りは姿を消している。また往路においては「私」の内面と船中にほぼ限定されていた視線は、復路では船の外、つまり立ち寄る港の風景にも向けられている。

こうした外部に向けられた関心は、先行研究で度々論じられているように、西洋と日本の違いを語り、今後あるべき日本の姿を模索するという「文明批評」的な記述を生んでいる。そこに登場する「阿爺の時代の人達」（四・十一）への関心の高まりや「愛国心」（四・十四）の必要性、またそのような「私」の言葉を「寢言」（四・十一）だとして相対化する「エトランゼエ」の存在をめぐって、先行研究では帰国後の藤村がとった立場の如何が問われてきた^{十五}。

特に「エトランゼエ」という架空の存在がもつ意味については、これまでの先行研究による議論の蓄積がある。すなわち「エトランゼエ」とは、「私」の「分身」^{十六}であり、ナショナリズムに傾きかける「私」を相対化する「冷徹な認識の象徴」^{十七}、「自己内対話」^{十八}の顕在化であり、本論もその点について異論はない。しかし、ここで注目したいのは、その「エトランゼエ」というもう一人の「私」の「眼」を意識しつつ語られる、以下のような記述である。

『大分賑かになりましたね。』／それが私の側へ来て立つた時のエトランゼエの挨拶だった。／三年の間一日

も忘れることの出来なかつた国の方を思出させるやうなものが、今は早や私の直ぐ眼前にある。黒いものづくめの巴里風俗を見慣れてきた眼には、一切模様の無いものは無いやうな女の児の長い袖や、帯や、子守として附いて居る女中の赤い襷までが眼につく。子供の眼を悦ばすやうな幼年画報の美しい表紙すら見慣れて来た質素なものとは違ふ。浴衣がけで籐椅子の上に横に成つて居る女の素足を見るのも殊にめづらしい。どうかすると、それにはみだらな感じをさへ伴ふ。『海へ』四・十四

ここに描かれているのは、シンガポールから「長崎とか仙台とか栃木とかの方へ帰つて行く同胞で主なる部分を占められるやうに成つた」(同前) 船内の様子であり、彼等「同胞」の姿を久々に見た「私」は、一面に広がる衣服の「模様」、「赤い襷」といった鮮やかな色彩による日本の風俗を記述している。また注目したいのは、そうした日本の風俗、特に「素足」の風俗に私が抱く「みだらな感じ」という印象である。これは、既に本章第二節で確認した帰朝後の「私」の視線と一致するものである。第四章における「私」は、帰朝後に抱いた「私」の「眼」への戸惑いを、(本書では空白に置かれた) 三年に渡る西洋体験の帰路の記述において、語り直そうとしているのである。

こうした同船する日本人の風俗、あるいはそれを纏う身体に対比する形で描かれるのが、以下のような「エトランゼエ」との会話の中で語られる、パリでの生活を経験した後の「私」の風俗、あるいは身体である。

『(中略) 往きの旅と見ると、君も変つた』／『さうかなあ。これで僕は変りましたかなあ。』／『君、鬚は奈何しましたい。何かそれには意味があるんですか。』(中略) 『君もなか／＼面白いことを言ふ。まあ自分でもいくらか異人臭くなつて帰つて来たかとは思ふが…そりや髪の手やり方とか、何とか、さういふことは仕方が無い。自分の内部に左様変りやうが無い。(中略) 僕は神戸へ出掛ける時にも、自分の国に居ると同じ心持で外国へ行つても暮らして見やうと思つた。今度もそれと同じ心持で、自分の国へもう一度帰つて行かうと』

して居る。』『君はそのつもりでも、もし君が自分で自分の眼を疑ふやうなことが起つて来たとしたら…（中略）幸か、不幸か、君も海の洗礼を受けてしまった。』（『海へ』四・五）

「鬚」に象徴される「私」の変化は、もう一人の「私」である「エトランゼエ」との対話を通して、それが決して表層的なものでないこと、「私」の「心の内部」にまで渡るものであることを示している。第四章を通して描かれるのは、第五章で受けた衝撃を説明するための「私」の変化そのものである。その「私」の変化こそが、眼の前の「日本の女」を「マレエ半島あたりの土人の女」（五・五）に見せ、また同船した日本人に対する以下のような記述を生み出すことになるのである。

『たしかにあの声は、君の国の子供の泣声だね。』／護謨園の連中が喫煙室の方から出て来て、中には私の傍へ話しかけに来たので、エトランゼエは別れて行つた。／（中略）それにしても私はあの眼さへ覚ませば泣き続けて居るやうな氣むづかしい我儘な女の児の泣声を―子守の背中では夜寝つかないといふあの女の児の泣声を―エトランゼエに聞かせたくないと思つたばかりでなく、東洋への初旅らしい年若な朝鮮行きの宣教師にも、南阿弗利加の商人（引用者注、ともに熱田丸に同乗するイギリス人）にも聞かせたくないと思つた。（『海へ』四・十四）

このような『海へ』における「私」の変化の内実は、永井荷風「悪寒」（初出『秀才文壇』一九〇九年一月）と並べてみることでよく分かる。一九〇八年にロンドンから帰国の途についた荷風は、「久しく、西洋化した日本人ばかりを見て居たせいか、純粹の内地的な二人の様子が、如何にも物珍しく見えると同時に、現代の日本に対する悪感情がますます／＼混乱して来る」^{十九}と、同乗する日本人への嫌悪感を隠さない。特に荷風が嫌悪を示すのは、以下のような場面である。

その最中に突然、子供が泣き出した。垂れ流した小便の気持悪さに、泣き出したのである。(中略) 子供が猶立ちすくんだ儘泣止まぬので、母親は、大勢居る男の前も更に恥らう様子なく、荒いお召の単衣の襟を割つて、青黒い皮膚のだらりとした乳房をば手で引出した。／自分は再び顔を外向けた。(永井荷風「悪寒」)

この直前には、シンガポールの人々の「爪の延びた黒い手先」や「磨かない歯」「垢だらけの胸、襟頸」を描写しながら、「東洋」と云ふ野生の力が、眼には見えないが、もう身体中に侵込んで、此の年月、香水や石鹸で磨いた皮膚や爪は無論、詩や音楽で洗練した頭脳まで、あらゆる自分の機官と思想をば、めちやく／＼に蛮化さして行くやうな気がする」と記しており、荷風の西洋と東洋に対するあからさまな「文明」と「野蛮」の構図が読み取れる。末尾において「あゝ、再び見るわが故郷。自分は桜さく、歓楽の島ではなくて、シンガポールよりも、それ以下の、何処かの殖民地へと流されて行くやうな気がする」と嘆く「悪寒」は、『海へ』と比較するとより明確に、日本とアジアの植民地とを重ね合わせる視線を描いていることが分かる。

「悪感」が美醜の観点による洗練さを欠いた日本人への嫌悪感を示しているのに対して、『海へ』は日本人の「みだら」さという、「欧羅巴人」からの欲望を喚起させる側面に目を向けているという差異がある。第四章において「私」は、「黒人を淫欲の象徴として見るやうな、ある一部の欧羅巴人を憎むやうにも成つて行つた」(四・八)と語り、「同船したすべての外国人の眼から、私は自分の国の女のあまりに華美な風俗を隠したかった」、「あまりに褪めやすい色彩」、「刺激的な意匠を隠したかった」(四・十六)と、西洋人が非西洋世界に向ける性的なまなざしを批判している。しかし、その「私」は同時に、自身が批判した「欧羅巴人」のまなざしを持ち、日本人の風俗に同じように「みだらさ」を感じてしまっているのである。また、「悪感」と同様、特にその差別的なまなざしが、いわゆる女子どもに向けられている点も看過できない。「私」の変化の内実とは、極めて帝国主義的で男性中心的な、西洋近代の価値観の内面化なのである。

だが、「悪感」と異なるのは、『海へ』の記述はやはりそのような「私」の変化そのものを対象化しているということであろう。「悪感」の語り手が西洋近代的な価値観に染まった「私」自身を信じて疑わないのに対し、『海へ』における「私」は、同乗した日本人たちを「隠したい」相手として、西洋人とともにもう一人の「私」である「エトランゼエ」を並列させ、「海の洗礼を受け」た者がもつまなざしを暴き出している。また、その「エトランゼエ」に対して「隠したい」――すなわち羞恥を感じる「私」そのものを描いている点には、あくまでも心情のレベルではあるが、洋行体験を通して内面化された価値観との相克が示され、そのような価値観を相対化する契機が含まれている。そこに、『海へ』における「私」語りがもつ、僅かな批評性を読み取ることが可能なのではないだろうか。

六・おわりに

これまで、その「おわり」を始発点として「私」の旅を語り直す『海へ』が、いかに「私」というものを再構成し、その時々における「私」と、「私」の「眼」を語っているのかについて考察してきた。

本論第二節で検討したように、旅の「おわり」における「私」は、日本の風景を植民地の風景に重ねてしまうという「眼」を持ち、そのこと自体への戸惑いと驚きを、精神の錯乱のイメージとともに描き出していた。そこから旅の「はじまり」を語り直す標題作である第一章については、本論第三節で確認したように、渡仏直前に書かれた『微風』収録の過去作を引用し、それぞれの文脈を切り離された元テキストの記述が、いかにそれまでの苦難を断ち切った「私」の物語として編集し直されているのかを詳細に分析した。またその編集された「私」の物語は、回想①、③に顕著なように、やはり「私」の「観察」、すなわち「眼」が生む困難とそれに翻弄される「私」自身を描き出す物語であった。

さらに本論第四節では、そのように望まざるものを見せる「観察」への、嫌悪をともなう自己言及が、かえって「私」の「眼」に映ったものを詳細に描き出していること、そしてそれが人種、ジェンダー、階級が複雑に絡み合う空間としての〈船中〉を、図らずも暴き出していることを明らかにした。同様に、復路の記述を考察した第五節でも、もう一人の「私」である「エトランゼ」を意識することによって、同乗した日本人を「私」がどのように見ているのかを自己言及的に示す語りが、西洋体験を通した「私」の「変化」が西洋近代的な価値観の内面化にすぎないことを暴き出している点に注目し、そこに『海へ』というテキストがもつ僅かな批評性を読み取った。

以上の考察を通して、『海へ』における「私」語りがもつ可能性は、以下の二点に集約できる。まず一つ目は、上記に示したように、終始「私」とその「眼」という内面の問題に深く降りていこうとする本作が、かえって「私」が身を置く空間の政治性や、その空間を支配している西洋近代主義的な価値観を浮かび上がらせている点である。特に、藤村のその後の近代化論では、ア、ジ、ア、の、よ、う、に、植、民、地、化、さ、れ、な、か、つ、た、日、本、と、い、う、認、識、が、前、提、と、な、つ、て、し、ま、つ、て、い、る、が、『海へ』の時点ではそのような認識や、ア、ジ、ア、の、よ、う、に、と、い、う、ま、な、ざ、し、そ、の、も、の、を、相、対、化、す、る、可、能、性、を、秘、め、て、い、た、と、思、わ、れ、る。藤村のその後の近代化論は、『海へ』の何を引き継ぎ、また何を切り捨てていったのが、今後問われるべきであろう。

二つ目は、『海へ』の「私」語りが、藤村の自己編集という方法と、その方法がもつ問題を、もつとも顕著な私たちであらわしているという点である。これは上記の問題とも深く関わり合う。本章第三節で確認したように、島崎藤村という作家は、極めて自己編集能力に長けた作家なのである。こうした編集能力を駆使したこれまでの「私」の再構成によって、読者は作家が歩んだ思想的営為、あるいは表現の試みを、一本の線―藤村が好んで使う表現を用いるならば「一筋の自分の細道」(『海へ』二一六)として認識してしまいがちである。しかし、既に確認したように、そうした「私」の編集作業には、必然的に差異―かつての「私」に対する選択と排除がともなうものである。『海へ』というテキストは、作家が描こうとする自画像、「一筋の自分の細道」そのものを問い直す必

要性を示しているのである。

一 以下に初出を記す。

「海へ」『中央公論』一九一七年四月

「地中海の旅」『中央文学』一九一七年六月、一〇月、一九一八年一月

「燕のごとく帰る」『中央公論』一九一七年九月

「故国を見るまで」『中央公論』一九一八年四月

「故国に帰りて」『東京朝日新聞』一九一六年九月五日・十一月一九日

二 この点は、阿毛久芳『海へ』（『国文学 解釈と鑑賞』六七（二〇）、二〇〇二年一〇月）で指摘されている。

三 和田謹吾「島崎藤村『海へ』―旅と再生」（『国文学 解釈と教材の研究』一八（九）、一九七三年七月）より引用。

四 新井寛「海へ」「仏蘭西だより」「エトランゼエ」の一考察―フランス時代の藤村と「夜明け前」の前提」（『明治大正文学研究』一三、一九五四年七月）より引用。同様の論点を提示しているものとして、他に吉田精一「島崎藤村（三）」（『自然主義の研究』下、東京堂、一九五八年二月）、友重幸四郎「藤村「海へ」以後」（『日本文学研究』一四・一五、一九七五・一九七六年一月）、細川正義『島崎藤村文芸研究』（双文社出版、二〇一三年八月）などがある。

五 初出は『読売新聞』一九一七年四月一〇日。引用は宗像和重編『文藝時評大系 大正篇』第五卷 大正六年（ゆまに書房、二〇〇六年一〇月）。

六 亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社、一九五三年十二月）。

七 吉田精一（前掲）や、小林一郎『海へ』論（『島崎藤村研究』教育出版センター、一九八六年九月）、高橋昌子「不安と解放」（『島崎藤村―遠いまなざし』和泉書院、一九九四年五月）。

八 以下、『海へ』の引用は、『藤村全集』第八卷（筑摩書房、一九六七年六月）による。以下、「五・一」のように記す。

九 平林一『島崎藤村―文明論的考察』（双文社出版、二〇〇〇年五月）参照。

十 『藤村全集』第七卷（筑摩書房、一九六七年五月）より引用。

十一 高橋昌子『藤村の近代と国学』（双文社出版、二〇〇七年九月）第五章「沈黙」を語るとは―メタ小説群としての『微風』参照。また、こうした「観察」への懷疑は、明治末年頃に自然主義作家全体が陥った混迷や挫折感でもある。正宗白鳥『自然主義文学盛衰史』（創元社、一九五一年一〇月）、相馬庸郎『日本自然主義論』（八木書店、一九七〇年一月）等を参照。

十二 『藤村全集』第五卷（筑摩書房、一九六七年三月）より引用。

十三 同前。

十四 前掲、高橋昌子「不安と解放」参照。

十五 前掲、高橋昌子「不安と解放」、また黒田俊太郎「二つの近代化論―島崎藤村『海へ』・保田與重郎『明治の精神』（『語文と教育』三〇、二〇一六年八月）は、このようにナショナリズムへの傾倒か否かを判断しにくい両義性をもった『海へ』の語りが、保田與重郎の「イロニー」の思想と親和性を持つものであるという重要な指摘を行っている。

十六 岩見照代「旅人をして旅の心を尽くさしめよ―藤村における〈エトランゼエ〉体験」（『日本文学』四〇、一九九一年十一月）。同様の指摘をしているものに、任苔均「島崎藤村の作品における〈海〉の意味―『海へ』を中心に」（『島崎藤村研究』四〇、二〇一二年九月）がある。

十七 前掲、高橋昌子「不安と解放」参照。

十八 前掲、黒田俊太郎「二つの近代化論」。

十九 『荷風全集』第五卷（岩波書店、一九九二年五月）より引用。以下も同じ。

第六章 「巡礼の旅」のポリテイクス―一九三六年の南米訪問と『巡礼』

一．はじめに

一九三六年七月、島崎藤村は同年九月にアルゼンチン・ブエノスアイレスで開催される第一四回国際ペン・クラブ大会に出席するため、妻静子、有島生馬、そして約八五〇名にも及ぶ南米への移住者たちとともに神戸を出発した。そこから、シンガポール、コロンボ、ケープ・タウンを経て、開催地ブエノスアイレスとブラジル・サンパウロに約一ヶ月間滞在し、ペン大会出席の合間を縫って領事館関係者や現地の日本人移民と交流、その後、北米、パリ、上海を訪問し、翌年一月に帰国した。

この半年間にも及ぶ長旅を前にした時の様子を、後に藤村は以下のように語っている。

しばらく国を離れるにつけ、心に掛るかずくのこともありながら、自分の胸は二十年振りで見える海のこととで一ぱいだつた。これから南米の目的地へ達するまでには五十日を要すると聞く長い航路、その行く先の港々がわたしたちを待つてゐた。しかし、そんなに深く入つて見るつもりで、わたしはこの旅に上つたものでもない。むしろ風に誘はるゝ雲のやうに広々とした海の方へ出て行つて、そこにある潮風に吹かれたいと願つた。もとよりこの南米行にはいろ／＼な方面からの依頼を受け、その使命をも果たさねばならず、無事帰国の上はそれらの報告をも齊さねばならなかつたが、それとてわたしは強ひてするやうな意識を持たずに、多くの旅人と同じやうに、成るべく浅く浮かびあがることを楽しみに国を離れたものである。わたしもこの年になつての旅であるから、家内引き連れ世界の巡礼の旅にでも出掛けるやうな感が深かつた。『巡礼』一

「船出」、傍線は引用者二)

「巡礼の旅」という自らが与えた名にふさわしく、藤村は行く先々で二葉亭四迷や岡倉天心といった近代文学史上の先達から、時代や社会の力によって遠い異国の地へ押し出された名もなき人々が残した痕跡に思いを馳せ―そこにはフィリピンで訪れた「からゆきさん」たちの墓も含まれる(二「東洋の港々の二」)、移動の時代がもたらすものの大きさに直面することとなる。近代における移動や交通の問題は、『夜明け前』(一九二九・一九三五年)から最晩年の『東方の門』(一九四三年)にまで通じる、藤村のライフワークの一つであった。

こうした作家自身による旅の描き方から、これまでの先行研究でもまた、藤村の南米行きとその紀行文である『巡礼』(岩波書店、一九四〇年二月)は、「文明批評家」藤村による思想的営為の一環として、長らく読まれてきた。しかし、先に引用した文章の下線部に示されているように、この「巡礼の旅」は決して作家の個人的な営為に留まるものではなく、少なくとも南米行きに限っては、諸々の「依頼」の執行者としての公的な性格を持つものであった。だがこれまでの研究においては、こうした作家が置かれた立場の問題を抜きに、作家個人の思想的営為に終始する問題として、この南米行きを捉えてしまっていたのである^二。

これに対して、目野由希による一連の研究や、稲賀繁美の藤村における雪舟観についての研究では、藤村の南米行きを外務省による文化政策の一環として捉え直すことの必要性が指摘されている^三。しかし、本論で扱う南米における藤村のペン大会以外での活動―特に現地の日本人移民との交流の問題になると、上記のように藤村の南米訪問の公的性格や政治性に注目する論者においても、それを一家家としての文学的興味・関心の問題に回収してしまう傾向が強く、移民たちを観察し交流する藤村を取り囲む政治的文脈が看過されがちである。

たとえば稲賀論では、藤村が背負った公的役割に注目しつつも、最終的には「日本移民の寄る辺なき境涯に身近に接し、文学や芸術を抛り所に励ましと労わりの志を伝えること」^四が、藤村の中で「公式任務にも勝るだけの重みを宿した、文学者としての真摯なる責務へと成長した」と結論づけられている^四。だが、これから見ていくように、南米における藤村の周囲には、ペン大会の活動外においても、外務省を中心とする日本の政府や、現地の

領事館とマスメディア、ホスト国政府、移民たちという、各方面からの思惑や期待が錯綜し、様々な利害関係や立場が交差し合う場が形成されていた。そしてそこでは、彼が何を見、何を思い、何を語るのかに大きな影響を与える力が錯綜しており、また彼の語った言葉が、その立場の違いによっていかようにも解釈される可能性がある。だったのである。

また、藤村と移民たちとの出会いが文学の問題として読まれがちであるということは、『巡礼』というテキストそのものが、そうした読みを誘発しているからだともいえる。このように考えた場合、藤村が南米の移民たちをいかに語り、また彼らを観察するみずからをいかに語ったのかという、テキストの読みそのものがなによりも重要となるであろう。だが、上記の南米訪問の政治性に着目する先行研究においては、テキストの外部にある歴史的事実の説明が優先されるため、そうした政治性を踏まえた上での『巡礼』の読解には、力が注がれてこなかった。前掲の目野「南米の島崎藤村」は、管見の限り、移民に対する藤村の政治的役割とその限界を論じた唯一の研究であるが、この点においては課題が残る。そこで本論では、南米移民に向き合う藤村を取り囲んでいた政治的文脈と、そこで彼に期待された役割を明らかにしながら、国際関係や移民問題といった大きな枠組みの中で、公的な役割を背負った作家が、そうした政治の場をいかに文学の言葉として消化／昇華したのかについて考察したい。

二・南米訪問の公的役割と場の編成

南米における藤村を中心とする空間は、いかなる言説や政治的立場によって編成されていたのか。まずは藤村の南米行きの背景を追うことから考えてみたい。『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペン・クラブ、一九七六年三月）では、藤村が初代会長に就任した日本ペン倶楽部の創立過程における、柳沢健を中心とした外務省文化事業

部の働きが指摘され、藤村による発足の言葉では「小さな民間の仕事」^五として語られていたペン倶楽部と外務省、またその出先機関である国際文化振興会との繋がりが明らかにされている。芝崎厚士『近代日本と国際文化交流——国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、一九九九年八月）によれば、一九三三年における国際連盟脱退後、外務省の官僚たちは文化交流を主軸とした新たな「国際協調主義」を模索し、国際文化振興会とはその組織のの一つとして一九三四年に創設された組織であった。しかし、ここでの「国際協調主義」は、日本の文化に対する欧米諸国からの「誤解」を解き、真の理解を得ることで日本の国際的地位を改善することを第一とするものであり、国家主義に対立する概念ではなかったという。また、このような外務省官僚的な「国際協調主義」においては、「国民外交」という概念が重要なキーワードの一つであったが、ここでの「国民外交」概念もまた、親善そのものは二次的な目的であり、官民一体となって国益のために連携して努力することを主眼とするものであったという。

この「国民外交」という言葉は、藤村一行の訪問に対する期待を語るブラジルの邦字新聞の記事にも登場している^六。つまり藤村の訪問は、移民側にとってもブラジル国内における日本人移民の立場を向上させるというメリットがあるものと考えられていたのである。

さらに藤村が帰国後の一九三七年に外務省で行った講演筆録である『南米移民見聞録』（移民問題研究会、一九三七年六月）の冒頭には、藤村に対する外務省からの委嘱——「在留邦人社会の実情視察、殊に同胞の情操の涵養、思想の啓発等に就いての研究」——の存在が記されている。つまり藤村の南米行きには、諸外国に対する外交や宣伝活動だけでなく、現地移民についての調査や教化活動という意味合いもあったということだ。この点はまた、「全く通りすがりの両氏に親しく面接の機会を有たない吾らは両氏が切めて大多数在留民のこの境涯を察しこの心情を掬みとつて欲しい」^七という『日伯新聞』の記事にも表れているように、藤村の訪問を通じて日本国内における移民に対する理解を深めたいという現地側の思惑とも一致していた。南米行きに際して藤村が受けた「いろいろな方面からの依頼」とは、およそこれらのものであったといえよう。

それでは藤村一行が訪問した一九三六年とは、南米移民社会においてどのような意味を持つ時期だったのだろうか。一九三〇年代におけるブラジル日系移民社会では、一九三三・一九三四年をピークとする国策による移民数の増加や、日本人植民地（コロニア）の増加、そしてそれに付随する日本語小学校の建設や、邦字新聞を中心としたマスメディアの発展によって、急激に「同胞」としての共同体意識が醸成されていた。しかし、そのように国内における日本人の存在感が増していく中で、ブラジル政府における排日思想も高まりを見せ、同化への圧力が次第に強まっていくことになる。こうした流れの中、ブラジル日系移民社会における一九三六年とは、日伯の対立するナショナリズムに対し、その調停が模索された時期であった。ブラジル国内の思潮とどう折り合いをつけ、日本式の文化や言語の継承を行っていくかということが、この時期の領事館関係者や言論界、教育界における重要な争点であったのである^八。

一方アルゼンチンでは、ブラジルとは異なり政府の介入を挟まない自由移民制度に基づいていたこと、また移民は単身での青年層が多かったことなどから、かなり早い時期からホスト社会との同化が進んでいた。そのため日本語の継承については、一九二〇年代初め頃まではそれほど意識されて来なかったのだが、次第に日本語の喪失に対する危機意識が芽生えるようになり、一九二七年における日本語講習会の発足以降、次々と日本語小学校が設立されるようになる^九。アルゼンチンの移民社会における一九三六年とは、そうした日本語教育とそれに伴う共同体意識の形成・発展期として捉えることが出来るよう。

以上のような政治的立場が入り乱れるなかで、藤村の訪問というイベントは、メディアの力にも大いに支えられていた。藤村一行と移民たちとの直接的な交流はごく限られた範囲であったが、その行程や発言は邦字新聞の記事によって連日報道され、移民たちの知るところとなっていたのである^十。先述のようにホスト社会との同化が進んでいるアルゼンチンでは、藤村の来訪は新聞のスペイン語のセクションにも取り上げられ、大きく報道されていた^{十一}。また藤村の方でも、邦字新聞の伝える記事によって移民たちの反応を伺っていた形跡が見られる『巡礼』六「大和撫子」。

また移民たちの実情についても、領事館関係者はもちろん、新聞社の人々を通して藤村に伝えられることが多かったようである。アルゼンチンの新聞社については不明な点が多いが、サンパウロにおいて藤村と関わりをもったのは主に『伯刺西爾時報』の記者たちであり、深沢正雪によれば『伯刺西爾時報』は一九一九年八月三一日にブラジル移民会社の機関紙として創刊され、移民の不平を抑えるための封建道徳を説くなど体制に親和的な性格をもつものであった¹⁴。特にこの時期の『伯刺西爾時報』は、先述の対立する日伯ナショナリズムの調停を図る伯主日従主義的な論調が目立つ。この点は、藤村が見た南米がどのような政治的立場に基づくものなのかという次節以降で考察する課題にとっても看過できない問題である。

一方では外務省を中心として、国際社会における理解を高めたいとする日本政府、他方ではブラジル国内における文化摩擦を回避し、それでいて日本人移民の立場の向上を目指す現地の領事館やマスメディア関係者を主としながら、南米における藤村を取り囲む場は編成されていた。そしてこれらに加えて忘れてはならないのが、藤村が実際に出会い、その声を聞こうと努めた移民たちのことである。彼らもまた、藤村との数少ない接触の機会の中で、彼ら自身の声を届けたいという切実な想いを抱えていた。以下に見ていくように、そうした声の数々は藤村の視点や発言にも少なからぬ影響を与えることになるのである。

三．「移民」か「棄民」か

こうした中で、藤村が見た南米移民の姿とはどのようなものだったのだろうか。本節および次節では、『巡礼』と『南米移民見聞録』（以下『見聞録』と略）の記述をたよりとしながら、特に移民社会における「棄民論」と移民子弟の日本語教育の問題を中心として考察していきたい。というのも、この二つのテーマは、当時の南米移民社会や移民論における重大な争点であり、藤村もまた、これらの問題について深い関心をもち、多くの記述を残

しているからである。

真の日本民族の発展とは、たゞ／＼横に展がりさへすればいいといふやうな、そんなものだろうか―むしろわたしはその点に思ひを潜めながら、皆の話に耳を傾けた。あの玉川ガアデンの方である人から聞いて来た「移民か、棄民か」の言葉も心に掛り、新嘉坡日本人小学校での校長の話も聞捨てにはならなかった。その意味から言つても、わたしは自分自身の眼にたよること以外に、どう判断の下しやうもないと考へ、これから遠く南米のかなたに多くの同胞を訪ねることを楽しみ思つた。『巡礼』二「東洋の港々の二」

南米へと向かう旅の中で、藤村はしばしば南米移民の実情に対する人々の言葉を耳にしている。上記はシンガポールに立ち寄つた際、日本料理店と日本人小学校で耳にした噂を記したものだが、南米移民の実情についてはシンガポールにおいても不明な点が多く、「悲観論」と「楽観論」の双方が入り混じっている状態だった。その混乱した言説は『見聞録』にも詳細に記されているが^{十三}、結局のところ誰も南米での様子を実際に見ていない以上、どちらとも判断しかねる状況であつたのである。

こうした南米移民をめぐる悲観的・楽観的憶測は、船中においても繰り返し藤村の注意を惹くものとなつていく。例えば、船中の床屋の亭主は、南米へ向かう移民たちには到着後の行き先が示されていないこと、移民勧誘書に書かれてあることを鵜呑みにして「濡手で粟を掴むやうな工合に愉しい生活を夢みて」来る者の多いことなど、移民政策における問題を藤村に諭すのだが、一方では船中での生活に不平を言うばかりで船員に当たり散らす移民への不満をも頭わにし、「さも慨歎するやうな口調で」、「どうせ国では要らない人達なんでせうからね」と本音をこぼす。その一方で長年移民の出發を見送っている船長などからすれば、「移民の素質」は「近頃では余程改善され」ており、現地のほうでも「普通に働けるものであつたら、誰でも相応に働き甲斐のある仕事にはありつける」らしく、以前に比べて悲観すべき状況でもないという。しかし、そうした立場の人々においても、国

の移民政策について何の不满もないわけというのではなく、移民の生活改善のためには、より大きな資本が必要と
のことであった（『巡礼』五「南米移民の群」）。

これらの声を聞く中で、藤村は次第に、この南米行きにおけるみずからの使命を感じるようになる。それが、
上記引用のような「自分自身の眼」をたよりに、南米移民の実情を捉えることであった。しかし、現地に到着し
た藤村が見聞きしたものは、わずか一か月ほどの滞在期間では判断の下しようもない、多様な移民たちの姿であ
った。

先述のように、現地における藤村の側には、常に領事館関係者や新聞記者といった人々が同行し、彼らの案内
に沿って藤村の見聞は形作られていた。領事によつて紹介される移民の大半は、藤村の眼には「頼母^{たのも}しげ」（六「二
三の訪問」）に映るものであったといえる。たとえばアルゼンチンにおける伊藤清蔵（『巡礼』ではI博士とされ
る）、この人物は南米移民の草分け的存在で、「農業と牧畜と森林経営とに関する博い智識を有し、多年寝食を忘
れた研究と経験との結果」、「亜国邦人農牧界の一人者」と言はるゝほどの閲歴」（七「I博士」）の持ち主であつ
た。また同地で『「移民の汗の手記」（別に題して『南米雑録』）』という自著を藤村に手渡したY君―山岸晋吾
もまた、成功者の一人とっていい（八「一移民の汗の手記」）。さらにブラジルにおいても、カンピナス農場
で藤村が出会ったのは「最早好い年配ではあつたが、どうしてなかなかの元気で、その物に構はない風采と多年
の経験を積んだ勇健な体躯とは関東地方あたりの耕地に働く老農を思ひ出させるやうな」、「練達勤勉な」農家の
主人であり、この主人は「南米生活の楽しさを語り、自分等は国に帰らうと思つたこともない」と語るほどであ
つた（九「ブラジル上陸」）。

こうした、移民の中でも成功者の側に入る人々との接触の多さには、領事館関係者をはじめとした、移民政策
を進める側にとって好ましい移民観を藤村に植え付けようとする思惑が見え隠れしている。しかし一方で、藤村
を前にしてふと漏らされる移民たちの本音―サントスの日本人村で出会った老婦人の「日本の方で言つたら、ま

るで乞食のやうな態でございますよ」(六「二三の訪問」)という言葉や、サンパウロに在住するドイツ文学研究者で、藤村とは旧知の仲であった中島清『巡礼』ではN君の語る言葉には、樂觀的で安易な判断を許さない切迫した移民たちの姿があった。サンパウロからリオへ向かう汽車の中で、藤村は中島から送られてきた手紙を開き、「サンパウロ市に於ける日本人社会は、殆ど日本における生活の延長と言つても不可なく、真の日本移民の生活状態はどうしても奥地に行かなくては見ることを得ない」(十「サンパウロよりリオへ」)という言葉を受け取る。みずからの見てきたものが移民社会の表層にすぎないことは、実は彼自身が痛感していることでもあった。そして、せめてもの気休めとして、藤村は車窓から見えるブラジル内地の「荒い自然」(同前)を目に焼き付けようとするのである。

このように、「移民か、棄民か」というシンガポールで受け取った問いの答えを探すことは、少ない滞在期間で、それも領事館関係者やそれと親和性の高いマスメディアによつていわばお膳立てされた旅においては、至難の業であった。北米出発の直前、藤村はこれまでの見聞をもとに「自分の狭い見聞の範囲からそれに答へねばならないやうな時が来た」(十一「北米行の船に上る」)と自らの応答責任を果たそうとするのだが、その後続く言葉は、以下の様なものであった。

世には末の末まで面倒を見るおもんばかりもなく、国内人口激増の調節といふところから割り出して、たゞく多くの同胞を海の外へ送り出せばいゝと考へるやうな傾きがないとは言へないが、真の民族の発展とは、横にひろがりさへすればいゝといふやうな、そんなものではあるまいとは、何等かの形でわたしの言ひあらはしたいと思ふところであつた。『巡礼』十一「北米行の船に上る」

ここでの藤村は、単なる人口増加対策として現地の真実を伝えず、また送り出した後には適切な支援をしないという移民政策の無責任さに、明らかに批判的な眼差しをもっている。しかし、「傾きがないとは言へない」とい

った表現、また「真の民族の発展とは、横にひろがりさへすればいゝといふやうな、そんなものではあるまい」といったシンガポール滞在時の述懐の単なる繰り返しといった部分からは、表立って批判しきれない歯切れの悪さが目立ち、自らの置かれた立場に対する重圧・抑圧の影が見える。またこうした明言を避ける歯切れの悪さは、自らの見てきたものに対する自信のなさに由来するものでもあった。ブエノスアイレスにおいて、藤村は現地の文学青年たちから『亜都文学』等の「種々な印刷物」を託されるのだが、そこに込められた「南米のまことの姿を母国の人達にも伝えて欲しい」という想いは、「自分ごとく旅行者の身」には「容易な注文とも思へ」（十「南米事情の一」）¹³、その責任を持て余す様子が記されているのである¹⁴。

このように、移民の実情に対峙しようとする藤村の周囲には、各方面からのそれぞれの立場に基づく意見が交錯しており、『巡礼』に描かれているのは、それに翻弄されながらも限られた立場の中で応答を試みようとする藤村の姿だといえる。しかし、次節で考察する移民子弟の教育問題については、藤村は自らに与えられた立場をほみ出し、現地の政府関係者にとっては不都合な発言を残すことになるのである。

四・子弟の日本語継承をめぐる

本節では、移民社会における二世三世の日本語継承の問題をめぐる様々な立場の拮抗と、それに対する藤村の反応について考察する。先述のように、この問題に関する藤村の反応には、外務省や領事館関係者、およびそれと立場を同じくするマスメディアにとって、不都合だといえるものが現れることになる。そしてこの背景には、藤村の国学的発想に基づく日本語観が深く作用しているのである。

まずは当時における移民子弟の言語状況について見ていこう。ブラジルにおいては、第二節で言及したように、移民の増加にともない農村部の各地で日本人村が形成され、日本語を主とする子弟教育が展開していた。その一

方で藤村が訪れた都市部においては、ポルトガル語と日本語の二言語・二文化状況が農村部とは比較にならないほどに進行していたという。またアルゼンチンでは、こちらも先述の通り、都市部の移民たちはスペイン語中心の生活を送っており、そのために子弟への日本語継承はかなり困難な状態になっていた^{十五}。

このような状況のもと、特にブラジルにおいては子弟の日本語教育のあり方をめぐって、大きく分けて三つの立場が拮抗していた。第一には、排他的・閉鎖的性格をもった国粋主義で、日本国内と同様の日本語による愛国教育を支持する立場。第二には、いずれ日本に帰国することを想定した子弟教育観で、ポルトガル語による教育も行いつつも、あくまでも日本語教育を重視する日主伯従主義の立場。そして第三には、ブラジル永住を想定し、日本語教育を補足的なものとして捉える伯主日従主義の立場である^{十六}。これらのうち藤村が多く関わった領事館関係者とマスメディアは、先述のようにホスト社会との摩擦の解消を図ろうとするため、伯主日従主義の立場からメディア上での議論や啓蒙活動を展開していた。

こうした関係者の中の期待を読み取るように、サンパウロ滞在中の藤村もまた、日伯間の文化の衝突を避け、移民側・ホスト社会側双方が柔軟な姿勢をとることを求めるような発言を行っている。『巡礼』十「南米事情の二」に記されているブラジル人記者と移民子弟を同席させた日本語教育をめぐる懇談において、ブラジルで生まれた子弟たちへの日本語教育の意義を記者に尋ねられた藤村は、以下のように答える。

いかなる国にも歴史の運命は潜んでゐて変化し発展することは言ふまでもないが、しかしその盛衰は外来の刺激に深い関係のあることを忘れてはなるまい、文化の基礎とも言ふべき言語に於いて殊にその感が深い、今日のブラジルから見れば日本語も外国語ではあるが、それを学ぶに便宜の多いわが第二世によく習得せしめるなら、日伯文化交流のなかだちとなり、やがてはブラジルの言葉そのものを豊富にする結果ともなるで

あらう 『巡礼』十「南米事情の二」

この回答の背景には、「ブラジルあたりへ移民を送るといふことは、朝鮮や台湾へ同胞を送り出すのとは余程事情を異にし」、「二つの独立した国にはそれぐの歴史があり、又、それぐの教育もあるわけだから」という考えがあり、藤村のアジアの植民地に対する姿勢を図らずも露わにすることとなっているのだが、この点については後述する。ともかくも、ここで藤村はホスト社会の立場を考慮に入れつつ、一方で子弟たちが言語を学ぶ自由を尊重するという「柔軟な」態度を示しており、それは同席したブラジル人記者の満足を得ることにもなったのである。このような藤村の発言は、領事館やマスメディア関係者にとっても歓迎すべきものであり、藤村帰国後の一九三六年一〇月二一日の『伯刺西爾時報』家庭欄には、「伯国生まれの小供はブラジル国民に 日本語教育は民族性発揮の為」という見出しのもと、懇談会における藤村と有島の発言が引用され、伯主日従主義の立場を啓蒙するものとして利用されている。

しかし旅の中では、子弟における日本語や日本人としての「素質」の「喪失」を嘆き、日本語教育を重視する立場の声もまた、藤村の耳に入ることになる。そしてこうした声を受けながら、藤村自身もまた、自らの立場に期待されている範囲からはみ出してしまうような視点をもつようになるのである。『巡礼』六「大和撫子」では、ブエノスアイレスの日本人小学校を訪ねた時の様子が語られるのだが、そこでは子どもたちの様子を観察しながら、「彼等の遊び友達は何んにもさういふ言葉を知らない。その使ひ方も、その陰影も。まして、その中に籠もる言葉の生命をも」というように、子供たちにおける日本語の「喪失」を感傷的な文体であらわしている。

さらに、ブエノスアイレスの子どもたちを集めてのお喋り会では、「桃太郎」の話をした後、会の最後に子弟の一人が藤村たちに歌のプレゼントをするのだが、この時の藤村もまた、以下の引用のように、ホスト社会への配慮や同化の必要性にはある程度理解を示しつつも、子供たちにおける日本語の「喪失」という観念に囚われ、その感傷を露わにするのである。

その日、聴衆席のうしろの方には巧みに西語をあやつるやうな男女の学生が集つて来てゐたが、その

中には早熟な額つきの眼をひくものもあつた。やがて一人の選ばれた少女が聴衆の中から立つて、特にわたしたちのために日本の唱歌を歌つた。見知らぬ故国の言葉もめずらしげに歌ひ出づるその少女こそ、二世そのものであつた。旅に来て、わたしもその時ほど涙の迫つたこともない。『巡礼』六「大和撫子」

上記のように、アルゼンチンでの子どものたちの様子を記すこの章には、「大和撫子」という題がつけられている。このように、子弟の言語状況を日本語の「喪失」として捉えているにも拘わらず、敢えて彼らを異国に咲く「大和撫子」とする逆説的な表現には、藤村における特徴的な日本語観を読み取ることができる。つまり、ここでの「大和撫子」の論理とは、そもそも藤村が日本語を子弟たちにおける「本質」——前提としてしかるべきものとして捉えているがゆえに、それが「喪失」しているという考え方が可能になり、そしてその「喪失」こそが、子弟に対する藤村の特別な感傷を引き起こすというものである。

酒井直樹は、一八世紀における国学をはじめとした古代日本語研究が、「透明で均質で雑種性をもたない純粹日本語」という理念を古代に仮設し、それが現在においてすでに「喪失」されたものとして捉えることではじめて可能になったと論じた^{十七}。藤村が「喪失」を仮設することで移民子弟たちを「大和撫子」——「日本人」でも「日本の子供」でもなく「より純粹で日本的なもの」としての「大和撫子」と表象する背景には、一九三〇年代に再発見されることになった上記のような国学的発想が読み取れる。

そしてブラジルにおいては、藤村のこうした日本語観が、結果として日伯間の政治的緊張を高めることになってしまう。詳しくは前掲の目野論を参照されたいが、ブラジル外務大臣を訪問した藤村は、そこで移民子弟における日本語教育の必要を訴えるのだが、それがブラジル政府内の警戒を呼び、日本政府への警告という形になって現れてしまうのである^{十八}。また、こうした藤村の中にある強烈な日本語への意識は、以下のような「国語」という概念による他者との分断をも生んでしまうことになる。

今度の船中でその代表の一人にめぐりあつた時はわたしもいろいろ思ひ出すことは多かつたが、(中略)ともあれ、この人などは自分等のやうに国語といふものをもたない。したがつてまた国の苦勞といふものをもたない。猶太人としてさう理論のために人間を犠牲にする人ばかりでもなからうが、自分等とは苦勞が違ふから、國際連盟脱退後の日本に対して同情も薄く、自然自分等の立場を誤解してゐるやうな語氣の多いのも、その由来する源は遠いやうに思はれる。(『巡礼』十二「紐育港に近づく」)

これは、南米を辞してニューヨーク港へ向かう船中で、ペン代表の一人であるユダヤ人亡命作家^{十九}に出会った時の述懐である。ここでの藤村は、この作家の置かれている状況―ドイツからの亡命を余儀なくされている状況には全く無理解なまま、彼の日本に対する無理解を非難する。この記述は、ペン・クラブ的な「國際協調主義」どころか、積極的に他者との分断を生もうとするものであり、批判の対象となっても仕方のないものであらう。先述の、アジアの植民地に対する藤村の認識にも、同様のナショナルな枠組みが生む排除や抑圧に対する無自覚さを見ることができよう。しかしながら上記に引用した文章からは、国学受容に基づく日本語観やナショナルな枠組みに囚われながらも、そうした範疇を容易に越えていく現実に直面した藤村の、戸惑いや苛立ちが露わになっているとも考えられるのである。

五・逃避としての「巡礼の旅」

それでは、以上のような南米訪問の公的・政治的な意味合いと、現地における藤村の周囲の状況や、彼自身の反応をふまえた上で、こうした体験が『巡礼』の中でどのように位置づけられているのかについて考察していきたい。

一九三七年一月の帰国後、一時中断を挿みながらも同年五月から一九四〇年一月まで『改造』誌上に連載され、同年二月に岩波書店から刊行された『巡礼』は、大きく分けて往路編・南米編・復路編の三部構成となっている。そのうち神戸からシンガポール、コロンボ、ケープ・タウンを経てリオに到着するまでを描いた往路編と、ブラジルを辞してニューヨークからボストン、デトロイト、ワシントンを回り、フランスからマルセイユ経緯で帰国するまでを描いた復路編では、各地へ渡った日本人の残した痕跡と、二〇年前のフランス行きの旅を参照系とした世界における日本の立場の変化についてが、主として語られている。特に興味深い点は、四「阿弗利加の南端」で語られるアパルトヘイト下のケープ・タウンの様子で、ここでの藤村は「白人」による「有色人種」への差別に反発しながらも、「名誉白人」たる日本人の位置をことさら詳細に記し、それを世界における日本人の立場の「向上」として語っている。ここに顕著にあらわれているように、藤村の語りは基本的には、世界における日本人の「発展」や「貢献」といった、進歩史観的な見方に基づくものであり、移動がもたらす正の側面を重視するものとなっている。

『巡礼』全体の語りの調子を規定しているのは、本論の第一節で引用した「そんなに深く入って見るつもりで、わたしはこの旅に上つたものでもない」「成るべく浅く浮かびあがることを楽しみに」（『巡礼』一「船出」）という表現である。この表現は、一九二七年七月三〇日から九月一八日まで「名家旅行記」シリーズとして連載された『山陰土産』二十の以下の記述と一致している。

何を見、何を拾はうとして、私は鶏二と一緒にこの山陰行の旅に上つて来たのであるか。はじめて見る山陰道、関東を見た眼で見比べたらばと思ふ関西の地方、その未知の国々がこれからゆく先に私達を待つてゐた。しかし、そんなに深く入って見るつもりで、私はこの旅に上つて来たものではない。むしろ多くの旅人と同じやうに、浅く浮かびあがることを楽しみにして東京の家を出て来たものである。（『山陰土産』一「大阪より城崎へ」、傍線は引用者（二））

この『山陰土産』の「そんなに深く…」の言い回しによる旅の規定のあり方について、栗原悠「島崎藤村『山陰土産』論―「素人」の旅の記録とその戦略性」(『島崎藤村研究』四四、二〇一六年九月)は、「一方でその土地に対する一般常識的な知見を前提にしつつ、もう一方ではそれとは対照的な意外性を持った個人の感想を述べる」ことにより、「眼前の風景や事象に二重性を見出させ」という戦略性を読み取っている。『山陰土産』における「私」は、そのように「素人」の眼を装うことで、個人としての自由な印象、連想が可能になっているということだ。

この指摘は、『巡礼』においても、ある程度は当てはまる。例えば、三「海路」では、シンガポールを過ぎた後の海上の旅が描かれるのだが、そこでの「わたし」は眼の前の風景に歴史を重ね、その海がかつて「中華民国が宋朝と言った遠い昔に、僧法願などの入竺した航路」であり、「東洋貿易の先駆とも言ふべき和蘭あたりの人達がいはゆる南蛮船なるもの」が進んできた道であることを、読者にも「想ひ見て欲しい」と呼びかけている。また四「亡命の客」においても、「本国の露西亞から追はれて来て」、「これから遠く南米パラガイの方へ永住の地を求めて行く」夫婦連れとの遭遇から、「わたし」は「万治二年、黒川與兵衛といふ人の長崎奉行時代に、わが国へ帰化した明の朱舜水」を想起し、「われらは先祖の時代からさう外国亡命の客を毛嫌ひしたものではない。むしろそれらの人達を迎へ入れて自国に於ける発展の刺激とした歴史すら持つてゐる」といった、この後『東方の門』に引き継がれていくような思考を記述している。

しかしながら、以下に引用するその「旅人」であることの強調は、こと南米編においては別の意味をもつものとして機能している。

さういふわたしは、そんなに深く入つて見るつもりでこの旅に上つて来たものでもないから、この地に来て一部の人達から起る排日の声などを聞きつけることはあつても、それを突きとめることは出来なかつた。

(中略) むしろわたしは同胞移民に理解あるブラジル人の声を聞き、自分の旅の心を軽くしたいと願った。いかに日本人の同化しがたいことを非難するやうな一部の人達でも、わが同胞の誠実勤勉で農業に秀いで農村労働者として適当なことを認めないものはないやうである。又、わが同胞の純血で、性質も善良であり、よく法律を重んずることを言はないものもないやうである。(『巡礼』十「南米事情の三」、傍線は引用者)

これはブラジルにおける排日運動の存在について言及した部分であるが、傍線部の表現はこの場合において、現地の極めて政治的な問題を語る上での責任の回避として機能してしまっている。つまりここでの「わたし」には、本文の冒頭で提示された「旅人」としての「わたし」を再規定し、自らを単なる通りすがりの旅行者として描くことで、肥大化していく責任と、それを果たし得ないことに対する憂鬱や苛立ちから解放されようとする意識を見ることができるのである。

第一節で述べたように、これまでの先行研究においては、旅の背景にある藤村が担った公的な役割を指摘する論者の中でも、藤村の移民たちに対する眼差しを彼個人の文学・思想的営為の問題として位置づける場合が多かった。本論では、こうした読みが藤村の旅の語りそのものに由来するのではないかという視点から、藤村の周囲の状況とともに『巡礼』の語りそのものにも注目してきたわけだが、以上の考察を踏まえると、近代における日本人の辿った跡をめぐる「巡礼の旅」というテーマは、藤村が移民社会の視察者として負った大きな責任から逃れるための隠れ蓑にもなっているということができらるだろう。

こうした藤村における逃避は、『巡礼』六「大和撫子」に記されている「桃太郎」の話にも見出すことができる。アルゼンチン滞在中、第二世の子どもたちに向けて藤村が語った「桃太郎」には、「遠い鬼が島も今は変ったであらう、そこには最早赤鬼や青鬼も住まなからう」というように、桃太郎と対立する鬼の存在が消去されている。つまりここでは、鬼のいなくなった鬼ヶ島において土を開き、「昔は鬼の住む荒れた島」を、「人の住み得る楽しい土」に変える桃太郎に、移民の姿が重ねられているわけだが、現実の移民たちに立ちはだかる困難をすべて無

化したこの南米の「桃太郎」もまた、藤村における逃避の一つとして捉え直すことができるだろう。こうした旅の途中のおとぎ話も含めて、『巡礼』というテキストには、移民や文化の接触をめぐる複雑な政治的力学と、そこにおいて逡巡し逃避する作家の姿が描かれているのである。

しかしながら、こうした藤村におけるいわば〈文学〉への逃避には、単に国際政治という大きな枠組みを前にした無力な個人、というだけにとどまらない問題もある。第四節で見たように、ナショナルな枠組みを超越する現実に対して、敢えてその「失われた」ナショナルなものを、「大和撫子」や「大和言葉」^{二二}というように〈文学〉的な感傷として語る彼の姿には、「巡礼の旅」と同様の、逃避の論理を見出すことができる。このような、藤村における逃避の帰結として書かれた『巡礼』は、個別性を排したナショナルなものへの回帰と、それが生む他者への抑圧や排除という危険性が孕んでいるのである。

六．おわりに

これまでは、一九三六年九月における藤村の南米訪問を、日本側と移民側またはホスト国側からの様々な利害関係や思惑が交錯するなかでの公的任務として捉え、そこで生まれる力の作用が、藤村にどのような移民像や移民に対する発言を形成させたのかについて考察してきた。藤村の南米訪問とは、国際連盟脱退後の日本が模索した新たな「国際協調主義」に基づく「国民外交」であり、そこでは官民一体となって世界における日本文化の理解に努め、国際社会における日本の立場を向上することが第一とされており、またこうした理念は現地の移民社会においても共有されていた。さらにこの訪問は、移民社会の実情の視察という意味も帯びており、現地で藤村は移民たちの「同胞」として、彼らの日本政府・日本社会に対する訴えを受け止め、伝達する役割を背負っていたのである。

しかし、現地における藤村の周りを取り囲んでいたのは、「移民か、棄民か」、または日本語の継承を重視するか、しないかといった、様々な政治的立場や思惑が交差する空間であり、彼が何を見聞きし、そして語るのかに大きな制限を与え、時にその立場を翻弄させる力の作用であった。こうした中で、藤村は自らが見聞きできる範囲の狭さを痛感し、また時に自らに許される発言の範囲を越えて感傷や苛立ちを露わにすることもあった。第三・四節で見た藤村の言葉の不明瞭さや他者への苛立ちにあらわれているように、全体として、南米における藤村は、その見聞や発言の範囲に対する不自由さを抱えていたといえる。

そしてこうした不自由さは、公的な使命を背負った自分を「旅人」としての「わたし」として語り直すという逃避のかたちとしても顕在化していた。第五節において確認したのは、複雑で慎重さを要するような政治の場や、一国民一言語といった既存の価値観を容易に超えていく現実を目にした藤村が、それをいかに〈文学〉の言葉として語り直し、そこに逃避したのかということであった。同節では、そこで逃避の対象とされる「大和撫子」や「大和言葉」といった言い回しが孕む危険性についても言及した。

『巡礼』をめぐる以上のような特徴や問題性は、その後の藤村のテキストにも引き継がれていると考えられる。一九四三年一月から連載が開始され、藤村の死によって未完の小説となった『東方の門』の冒頭では、「天の岩戸」神話をモチーフにした、幕末におけるシーボルトとその門下生たちとの交流が描かれるのだが、その平和的な国際交流のあり方には、南米の「桃太郎」と同様の逃避の論理があるように思われる。また執筆以外の活動においても、同年一月における第一回大東亜文学者大会での万歳三唱など、藤村における国策との関わりをどのように評価していくのかについても多くの課題がある。「巡礼の旅」がその後の藤村にもたらしたものの影響は、一九四〇年代前半の文学を考える上でも、重要な意味を持っているのである。

以下、『巡礼』の引用は全て『藤村全集』第十四卷（筑摩書房、一九六七年一〇月）による。

二 剣持武彦「文明批評家・島崎藤村」（剣持、平岡敏夫編『島崎藤村―文明批評と詩と小説と』双文社出版、一九九六年一〇月）、細川正義「島崎藤村『東方の門』における東と西」（『島崎藤村文芸研究』双文社出版、二〇一三年八月）参照。ただし近年においては、金貞恵『巡礼』のナショナリズム的解釈の可能性」（『島崎藤村研究』三一、二〇〇三年九月）と、Bourdagh, Michael(2003) *The Dawn That Never Comes: Shimazaki Tōson and Japanese Nationalism*. New York: Columbia University Press など、藤村における国家主義や日本主義的な傾向を批判的に見る立場がやや優勢である。しかしこれらの論もまた、この南米行きをめぐる公的な側面を考慮に入れていない点で不十分であると考ええる。

三 目野『『東方の門』執筆前の藤村』（『島崎藤村研究』三五、二〇〇七年九月）、「南米の島崎藤村―国策的国際文化交流の再考」（『文学研究論集』二六、二〇〇八年一月）。稲賀「ブエノス・アイレスの雪舟―島崎藤村の国際ペン・クラブ参加」（『絵画の臨界―近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、二〇一四年一月）。四 前掲、稲賀『絵画の臨界―近代東アジア美術史の桎梏と命運』より引用。このほか、佐野正人「文学的国際主義とディアスポラの運命―昭和一〇年代、藤村、東アジア文学」（文学・思想懇話会編『近代の夢と知性―文学・思想の昭和一〇年前後』翰林書房、二〇〇〇年一〇月）は、「皇紀二六〇〇年」に合わせたペン大会の東京招致などといったペン使節の「国家的なメディア」としての側面に触れつつも、そのような公的性格とは距離をもった藤村の旅に対する「近代の日本人のたどった旅の跡」の確認という内的モチーフの存在を強調し、その一環として藤村における移民の発見を捉えている。

五 島崎藤村「日本ペン倶楽部の設立に就いて」（日本ペン倶楽部『会報』一九三六年三月）、引用は『藤村全集』第十三卷（筑摩書房、一九六七年九月）による。

六 「ペン使節を迎ふるの喜び」（『伯刺西爾時報』一九三六年九月二三日二面）。

七 「ペンクラブ代表通過」（『日伯新聞』一九三六年九月二二日二面）より引用。

八その後、一九三七年以降には、それまでは穏健な姿勢を維持する傾向にあった日本移民側にも、旧在聖日本人学校父兄会の日本人文教普及会への改組など、国粋主義的な教育を進める動きが見られるようになる。またこの辺りから邦字新聞における日本国内の新聞記事の転載が開始されたこともあり、移民社会におけるナショナリズムは一層強まっていた。それに対してブラジル政府側は、一九三八年には日本語教育を禁止し、各地の日本語学校を閉鎖に追い込み、また一九四一年七月には日本語新聞の発行を禁止。そして太平洋戦争勃発後には、アルゼンチンを除く南米諸国において日本との国交が断絶され、移民たちは祖国の状況を知ることができないまま、終戦を迎えることになる（ブラジル日本移民百年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史』第三巻、風響社、二〇一〇年十二月）。

九以上、大島嘉一「南米アルゼンチン」（石川友紀監修『日系移民資料集〈南米編〉』第一九巻、日本図書センター、一九九九年二月）、山下暁美「アルゼンチン日本語教育の歴史」（国際学友会日本語学校『紀要』一五、一九九一年九月）参照。

十例えば藤村がブエノスアイレスの文科大学講堂とサンパウロのイタリア倶楽部において二度公演した「近代日本における文学発達の経路」は、管見の限りでは『亜爾然丁時報』一九三六年九月一九日二面、『伯刺西爾時報』九月二八日五面、三〇日六面、『聖州新報』九月二六日三面においてその公演筆記が全文掲載されている。

十一『亜爾然丁時報』一九三六年八月二九日一面ほか参照。

十二前掲『ブラジル日本移民百年史』第三巻、第二章参照。

十三前掲『見聞録』「新嘉坡邦人の南米移民観」参照。

十四この語りそのものは、『山陰土産』の型を踏まえたものであるが、本章第五節で検討するように、『巡礼』では『山陰土産』の型を利用しつつ、それが異なる機能を果たしている。

十五以上、根川幸男「戦間期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点」（根川、森本豊富編『トランスナ

シヨナルな「日系人」の教育・言語・文化』明石書店、二〇一二年六月）、前掲山下論参照。

十六 前山隆『移民の日本回帰運動』（日本放送出版協会、一九八二年六月）参照。

十七 酒井直樹『死産される日本語・日本人―「日本」の歴史・地政的配置』（新曜社、一九九六年五月）参照。

十八 前掲、目野「南米の島崎藤村」参照。

十九 前掲、Bourdages, Michael(2003)によれば、この人物はおそらくH.Levickとのことである。

二十 初版は一九二七年一〇月。同シリーズの横山桐郎「富士裾野の蟲行脚」、小島烏水「不尽の高根」、新村出「南国巡礼」とともに『名家の旅』（大阪朝日新聞社）に収録された。

二十一 引用は、『藤村全集』第十卷（筑摩書房、一九六七年八月）。

二十二 南米に赴く際、藤村は、佐佐木信綱、太田水穂とともに選定した直筆の「大和言葉の碑文」を、ブラジルにおける子弟に向けた「置土産」として持参している。この碑文については第七章で論じる。

第七章 「大和言葉の碑文」と南米移民―戦前における忘却と戦後の再発見

一．はじめに

一九三六年九月、島崎藤村は初代日本ペン倶楽部会長として、アルゼンチンで開催された第十四回国際ペン・クラブ大会に出席するために南米を訪問し、そこに暮らす日系移民の子弟たちに向けてある「置土産」を残した。それが、左記の「大和言葉の碑文」である。

天さかる鄙の長路ゆこひくれば明石の門より大和島見ゆ 柿本人麻呂

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ 在原業平

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけてちるかも 源実朝

道のべの清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ 西行法師

右四首、いづれも敷島の大和言葉、高き心のしらべ、古大家等がこの世にのこしたる誠実と愛とのしるしである。

西暦千九百三十六年、ブラジル国に使用して。『巡礼』十一「置土産」(一)

人麻呂、業平、実朝、西行の四歌人による和歌を収めた藤村揮毫の碑は、一九三九年に落成した日系人初の総合病院である日本病院（通称、正式名はサンタ・クルース病院）に設置され、現在に至っている（図一）。日本でも、ある時は藤村の足跡を伝えるものとして、またある時は地球の裏側にある唯一の万葉歌碑として、その存在が知られている。

図一 藤村碑面



図二 笠戸丸碑面



（宇佐美昇三「サンタクルース病院、その石碑の謎を解く」『サンパウロ新聞』二〇一五年六月二〇日より転載）

しかし、実はこの碑は藤村の来伯を記念するものとして、もしくは藤村を媒介に日本の国歌を伝えるものとして独立して建てられているわけではなく、一九〇八年の笠戸丸第一回移民から三〇周年を記念する「笠戸丸組三〇週年記念碑」（以下「笠戸丸碑」とする、図二の他面（背面）として収められているにすぎない。これから詳細に論じていくように、それが「藤村碑」として知られるようになったのは、石碑の設置から五〇年近く経った一九八〇年代後半以降のことなのである。このように、藤村の「大和言葉の碑文」が歩んできた来歴は複雑で、

なぜこれが「笠戸丸碑」として建てられたのか、移民たちはこの碑文をどのように受容してきたのかなど、この碑文を巡っては不透明な点が多々ある。

これまで、この「大和言葉の碑文」について言及し、またその消息や来歴を探ろうとした先行研究には、以下のようなものがある。

まず早い段階では、北川忠彦が「島崎藤村の『大和言葉の碑文』について」（『女子大國文』九五、一九八四年六月、その後『島崎藤村研究』一二、一九八四年九月に再録）、「大和言葉の碑文」補遺」（『島崎藤村研究』一三、一九八五年九月）において、これまで（国内の藤村研究者においては）『巡礼』の記述によってのみ知られていた碑文の消息を明らかにし、それが「笠戸丸碑」として日本病院に設置されていることの指摘と、その全文の翻刻、また一九八五年八月の『日伯毎日新聞』、『サンパウロ新聞』に掲載されたこの碑について言及した記事^三の詳細を行っている。後に詳細に論じるが、「補遺」に取り上げられているこれらの記事は、実はまさにその再発見時の様子を伝える重要な資料となっているのだが、この段階ではその来歴についても不明な点が多く、記事の内容に対する考察も行われていない。

藤村研究の範囲では、ほかに目野由希「南米の島崎藤村―国策的国際文化交流の再考」（『文学研究論集』二六、二〇〇八年一月）が、一九三〇年代後半における国際協調主義と文学との関わりや、その中で藤村が果たした役割や問題点を論じる中で碑文の存在に触れ、青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、一九四一年十二月）の口絵に落成直後の日本病院の写真と、笠戸丸碑の写真が掲載されていることを指摘している。これらの写真から目野は、この碑があくまで笠戸丸碑のほうを「表面」として認識されており、藤村による碑文はその「裏面」にすぎなかったとし、そこにこの訪問において藤村が果たした役割の限界があったと論じている。

本論では藤村による碑文が表なのか裏なのかを議論するつもりはないが、建立時に限って言えば、移民たちにおける碑文の受容についての目野の指摘は妥当性をもつものと言える。しかし先述のようにこの碑は後の時代

は「藤村碑」として再発見されるのであり、南米移民における「大和言葉の碑文」の受容を考える場合には、藤村来訪の前後だけではなく、戦後、そして現在までという長い期間を視野に入れる必要がある。

そのほか、二〇一五年六月二〇日の『サンパウロ新聞』に掲載された宇佐美昇三「サンタクルース病院、その石碑の謎を解く」からは、笠戸丸碑／藤村碑の細部や、碑文の消息をめぐってこれまでに言及されてこなかった資料の存在（三節で扱う『香山六郎回想記』）を知ることができる。しかしながら、こちらもやはり来歴の全体像を示しているわけではなく、また受容史としても不十分な点が多い。そこで本論では、宇佐美の提示する資料とともに、今回新たに『南十字星』という碑の再発見をきっかけに発足した「ブラジル藤村会」の機関誌をとりあげ、再発見に至るまでの経緯のさらなる詳細はもちろん、その時々受容のあり方を明らかにすることを目指す。

一九三六年における藤村の旅は、同時に彼が届けた言葉の旅でもあった。届けられた言葉は、モニュメントの要素として一旦は落ち着いたわけであるが、それを受け取る人々や社会のあり様は変化し、その都度、モニュメントやその中の言葉に見出される意味も変化していく。本論では、そうした広い意味を含んだ言葉の旅を、藤村の「大和言葉の碑文」の来歴と受容史を探ることと考察したい。これによって、藤村研究史上における貢献はもちろん、近年盛んに取り組まれている移動と文学の問題^四、また遺跡やモニュメントといったメディアと記憶の問題^五など、文化史・文化学の間でも寄与するものがあるはずである。

二・藤村と「大和言葉の碑文」

「大和言葉の碑文」と移民たちとの関係を論じる前に、まずは送り手である藤村にとっての碑文の意味や、選択された四首の和歌が提示する構図や物語性について考察しておきたい。『巡礼』では、先に引用した碑文の直前に、次のように藤村がこの碑文にどのような意図や希望を込めたのかが語られている。

いさゝかの旅の土産として、わたしはこの南米の地に置いて行くために「大和言葉の碑文」なるものを国から用意して来た。(中略) 同胞第二世が少年少女のためにも、これは何より好い土産とブラジル在留の諸氏によるこぼれたのはうれしかった。(中略) やがてこの異郷にある人々が碑の前に足を停め、母国をしのぶたよりともして呉れるやうな日が来たら、どんなにたのしからう。こんなめづらしい草や木の香で一ぱいな植民地に大和言葉を刻んだ石を置いて、こゝにも新しい世界のあることを語るやうな日が来たら、これまたどんなにたのしからう。『巡礼』十一「置土産」

藤村にとって、「大和言葉の碑文」は時に移民たちの郷愁の念に寄り添い、また自らの「母国」を知らない二世三世にとつては、それを知る機会になることを願って贈ったものであった。その想いは実際に現地に赴き、日本とはまったく異なる南米の自然に直面してより一層強く意識されるようになったはずである。またこのほかにも、南米への出発直前に東京朝日新聞から受けた取材では、「人麿、業平、実朝、西行の歌を一首づつ選んで書かうと思つてゐます、あちらの人達に、母国のいゝ歌を愛誦してほしいのです」^六という言葉を残しており、日本とは異なる言語環境に身を置く移民たちに、「母国」の言葉の響きそのものを愛でてほしいという願いもあつたようだ。こうした藤村の「母国」の言葉、「大和言葉」に対する思想が持つ政治性については、すでに第六章で述べた通りである。

では、なぜそうした願いを込めて贈られた「大和言葉」として、数ある歌の中からこの四首が選ばれたのだろうか。和歌の選定には、『巡礼』にも記されてあるように佐佐木信綱と太田水穂への相談があつたようだが、藤村側の資料にも信綱・水穂側の資料にも、四首を選定した理由が書かれてあるものは見つからない。信綱は編著『西行全集』の「総説」において、実朝以外の三歌人を、「新しい歌風が興起する時代の先達となり、後に続く歌人たちのすぐれた指導者ともなつてゐる点」で、「古代の和歌史は、この三人の歌人によつて作られてゐる」

と評価しており、またこの三者は水穂や藤村にとっても親しみのある人々であったはずだが、実朝の存在も含めて、なぜこの四首なのかという点については、それぞれの歌の内容に迫っていくほかないであろう。そこでここでは、この四首の和歌によって浮かび上がる構図やモチーフ、物語性について考察することで、先の問いの答えに代えたいと思う。

人麻呂の〈鄙びた長い海路をはるばると、都を恋しく思ひながら帰つて来れば、明石の大門から、なつかしい大和の国が見える〉と詠った歌は、『万葉集』卷三（雑二五二）に収められているものである。これは、言うまでもなく帰郷の喜びを表したものであり、日本への帰国が叶った際の移民たちの視点に寄り添うものとなっている。「鄙の長路ゆこひくれば」という上の句から伺える船上で過ごした時間の長さは、故郷の陸地が遠くに見えるてきたときの感激をよりいっそう大きくする。人麻呂が体験したものよりもはるかに長い海路を超えてくる移民たちの場合は、まさに心の踊り立つような喜びであったことだろう。

また『金槐和歌集』収録の実朝の歌は、〈大海の磯（岩々）を轟かすほどに打ち寄せる波は、割れて、砕けて、裂けて、散るものよ〉と、海の荒々しさや壮大さ、そしてそれを目の前にしたときの躍動感を詠ったものである。人麻呂の歌が帰郷時の移民たちの視点であるのに対して、こちらはまさにこれから新天地へと向かうという出発時の移民の視点に沿うものだと言えよう。

一方で次の業平と西行による歌は、それぞれが旅の途中で出会った日本の風景を詠ったものである。〈時を知らない山は富士の山だ。今をいつと思つてか、小鹿の背のようにまだらに白い雪を降らせているのだろう〉と詠う業平の歌は、『伊勢物語』の東下りの段（九段）に登場する。ここでは、失意の中で都を離れ、東国へと向かう中、ふと富士の頂に目を止める旅人の姿が描かれている。

また西行による〈道のほとりの清水が流れる柳の影に、少しの間休むつもりだったのに（思いのほか長いときを過ごしてしまった）〉という歌は、『新古今和歌集』卷三（夏歌二六二）に収録されており、ここで西行が詠んだ柳を主題として観世信光による謡曲「遊行柳」（二五一四年）が創作されたことでも著名な歌である。

この二首には、「めづらしい草や木の香で一ぱいな」な南米の風景の中で、碑を頼りに日本の風景を想像し、「こゝにも新しい世界のあること」を語ってほしいという藤村の願いが託されていると言える。しかし、業平の歌が移民の望郷歌にも度々登場する富士山を詠んでいるのに対して、西行歌の柳というモチーフはややインパクトに欠けるように思われる。もちろん、ここに詠われている柳の木は先述のように著名な風景の一つであるのだが、同じ草木なら桜のほうが、移民たちにも身近なモチーフであろう。

だがここで注目したいのが、西行が詠ったこの柳（那須・芦野）は、後に芭蕉が訪れ、その足跡に想いを馳せた一句を詠んだ場所だということである。『奥の細道』『殺生石・遊行柳』に収められている「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」という句は、かつて西行が訪れた「清水流るるの柳」に、いま自分が立っていることに対する感慨とともに詠まれたものである^九。この点について太田水穂は、一九三五年に出版された『新古今集名歌評釈』の中で、芭蕉の句を引きながら、先の西行の歌は「後世の文学に大分影響を残してゐる」と評している^十。こうしたところから、西行歌の選定の背景には、芭蕉という、日本の風景を眼差す際のモデルの存在が意識されているのではないかと考えられる。

芭蕉は、藤村にとっても最も重要な人物の一人であった。南米訪問時に行った講演「近代日本に於ける文学の発展」においても、日本の内側から起こった「近代性」の一要素として、宣長を中心とする国学や二葉亭・美妙による言文一致運動とともに芭蕉の俳諧を挙げている^{十一}。また、藤村が古典文学について言及した著作の中でも、芭蕉について記したものがひときわ多く残されている。そのうちの一つである一九二四年に発表された「芭蕉のこと」では、芭蕉の「旅」のあり方を以下のように記している。

芭蕉は精神上的の旅人でもあった。西行へも旅し、定家へも旅し、万葉の諸歌人へも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した。漂泊に徹したこの詩人は、一步は一步より動揺の上に静坐する精神的の生活を創造して行つたやうに見える。（「芭蕉のこと」^{十二}）

芭蕉の「旅」は、詩歌を通した「精神上の旅」でもあり、その漂泊は、単に各地を渡り歩く水平的あるいは共時的な旅ではなく、かつてそこを訪れた古人たちに想いを馳せ、彼らが見たものを追体験しようとする垂直的な、通時的な旅でもあった。この芭蕉を媒介とした風景との向き合い方や旅のあり方は、『巡礼』においても重要なモチーフとなっており、またこれまでに見た四首全体の選定にも深く影響していると考えられる。実朝、人麻呂の歌の選定は、船出と帰郷という、移民たちが体験し、また未来に経験するかもしれない旅に見立てられたものであったが、この見立てという行為こそ、移民たちとかつての日本の旅人たちとを繋ぐ行為であろう。これらの和歌が提示するのは、彼らの旅がかつての誰かの旅とも響きあっているという、行為に歴史の多層性をもたせる視点であるといえる。

三．「笠戸丸碑」としての建立と忘却

ここからは、以上のような構図、物語性をもった藤村の「大和言葉の碑文」が、受け取り手である移民たちにとってどのように受容されてきたのかについて考察していきたい。

まず、当時の現地の邦字新聞による報道をみていくと、藤村と有島の来訪は、初の故国を代表する作家の来伯として、到着前からその動向や移民たちに向けたメッセージが伝えられ、彼らに対する期待が社説に論じられるなど、歓迎のムードをもって報道されていた^{十三}。藤村らのブラジル滞在は、アルゼンチンへ向かう前の一時上陸を省くと一九三六年の九月二三日から三〇日まで、そのうちサンパウロに滞在していたのは二七日までというごく短い限られた期間であった。しかし、その出立後には読者からの帰りを惜しむ声が伝えられ、滞在から一月あまり経った一〇月半ばでも、藤村の言葉を「忘れてはならぬ」という投書が掲載されているなど^{十四}、その来伯は

一般の移民たちにとっても大きな出来事であったことがわかる。

そうした中、藤村が直々に持参した「大和言葉の碑文」についてもまた、「邦人二世へ残す土産、香る」大和言葉^{十五}や、「邦人第二世に残す大和言葉の神髄 藤村翁心尽しのお土産」^{十六}といった見出しとともに紹介されている。藤村の出力後、碑文は滞在中に一行を手厚くもてなした市毛孝三総領事に託されたというが^{十七}、その後の消息を伝える記事は管見の限り見つからない。当初の予定では「碑の表面にはその大和言葉を、裏面には羅馬文字にて同じものを刻したい」（『巡礼』十「置土産」）との計画で、日本病院の敷地内に独立して建てられるはずであった「大和言葉の碑文」は、その後どのような経緯で「笠戸丸碑」の片面に収められることになったのだろうか。

笠戸丸第一回移民の一人であり、ジャーナリストとして活躍した香山六郎の回想録によると、もともと笠戸丸碑が日本病院の敷地内に設置されることになったのは、笠戸丸移民の二五周年の記念日（一九三三年六月一日）に、ちょうど日本病院建設の定礎式が行われたことに始まる。そこから二五周年の記念式典が建設前の敷地内で挙行され、その縁故から三〇周年の記念碑を病院開院の前日に建て、一九四〇年九月二四日の開院式の後に、記念碑の除幕式が行われることになったのである。記念碑には当年までに確認できた第一回移民の残存者の姓名が銘刻されたという^{十八}。

さらに香山は、その「笠戸丸碑」の裏面に刻まれた藤村の碑文について、以下のような言葉を残している。

碑の他面には先年渡伯した島崎藤村の自筆なる日本の五歌聖人の大和歌を一首ずつを刻した。私は島崎藤村は冷たく感じてしまったが、祖国の五歌聖人の和歌はこれを愛する。日本移民としてブラジルの自然を愛すると共に、祖国の自然に限り無い郷愁を抱く。ここにこの歌々を刻した移民碑をたてる趣旨であった。^{十九}

ここで「五歌聖人の大和歌を一首ずつを刻した」とされているのは、おそらく香山の記憶違いであろう。だが

ここで何よりも注意を惹くのが、「私は島崎藤村は冷たく感じてしまった」という藤村との対面時に抱いた香山の印象である。新聞報道では伝えられることのなかった、移民たちが見た藤村像の一端を知らせる部分であろう。しかしその一方で、「ブラジルの自然を愛すると共に、祖国の自然に限り無い郷愁を抱く」という香山の碑文の受容は、実は前節で見たような藤村が望んだ受容のあり方であることは興味深い。

次節で詳細に扱う「ブラジル藤村会」が発行する『南十字星』が伝えるところによると、藤村の碑文が笠戸丸碑の一面に収められることになったのは、笠戸丸移民の内から起こった案であるという。この点について同誌では、「笠戸丸の移住者がこの四首を片面にいただいたことは、それによって彼らの故国への思い、日本人の心が代弁されているという考えからではなかったのだろうか」と推測している^{二十}。

また碑の設置場所となった日本病院も、ブラジルにおける日系移民の歴史において重要な意味をもつ場所であった。一九三三年六月一日に定礎、三九年に落成した日本病院の設立には、移民の衛生状況や医療環境を憂慮して一九二四年に組織され、衛生に関する啓蒙活動や無料診察などを行っていた同仁会が大きな役割を果たした。同仁会はその創立当初から総合病院の建設を目標とし、数年に渡る領事館側との討議を続け、皇室と日本政府からの補助金と、寄付によって集めた資金をもとに建設までこぎつけた。その後も日本から派遣された医師や看護師の資格をめぐるトラブルもあったが、落成の翌年一九四〇年の九月には、日系人だけでなくブラジルに暮らす人々すべてが利用できる総合医療施設として、開院式が執り行われた^{二十一}。

度重なる苦労や困難を越えて設立された日本病院は、「第二次大戦前にブラジルの日系コロニアが「総力」をあげて築き上げた「医療の殿堂」^{二十二}と称されており、ブラジルにおける日本人移民の「発展」の象徴の一つと言える。前掲の『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻で、笠戸丸碑の写真とともに落成直後の日本病院の写真が掲載されていること（図三、四）は、そのことを示す貴重な資料となっているのである。

図三 建立当時の笠戸丸碑



図四 落成直後の日本病院



（前掲、宇佐美昇三「サンタクルース病院、その石碑の謎を解く」より転載）

しかし、その後に移民たちが歩んだ歴史は、さらなる苦難の連続であった。移民たちの期待を背負ってスタートした日本病院は、第二次世界大戦勃発後の一九四二年三月、ブラジル政府によって敵性国資産として接收され、経営権を奪われてしまう。また、それ以前にも一九三八年末には一四歳未満の外国語教育が禁止され、各地の日本語学校が閉鎖、一九四一年には外国語新聞に対する検閲が強化され、一二月八日の太平洋戦争勃発によって日本語書の発行が禁止、日本語での言論機関はその機能を停止してしまう。このことによる言論の空白は、終戦直後にも混乱を呼び、日本の敗戦の真偽をめぐる「勝ち組・負け組」論争とそこから発展したテロ事件といった

悲劇を生むことにもなった^{二三〇}。

日本病院の接収に伴い、笠戸丸／藤村碑も、もとの設置場所であった敷地入口付近から撤去され、戦時中は姿を消してしまう。香山六郎は、終戦からしばらくすると石碑はもとの位置に戻されていたというが^{二三四}、前掲『南十字星』には、「碑は病院の裏の方で草に覆われ、一部の文芸愛好家以外には忘れさられた存在となっていた」^{二三五}とある。日本病院の開院とともに戦前の移民たちの「発展」の象徴として建てられた笠戸丸碑は、戦中戦後の混乱の中で、その後長きに渡って忘却されることになるのである。

四．「藤村碑」としての再発見

「笠戸丸碑」として設置された石碑は、日本病院の接収から四〇年あまり経った頃、今度は「藤村碑」として再発見されることになる。その再発見の経緯は、藤村の末娘である井出柳子が、友人であった木内謙一のブラジル訪問の際、父藤村揮毫の碑の在り処をたしかめてほしいと依頼したことに始まる。それを受けた木内は渡伯後、在伯長野県人数名とともに病院敷地内を搜索し、周囲も荒れ果て、長年放置されていたために文字の判別もできないほどであった碑を発見した^{二三六}。ここから、この碑を保存し継承するための活動がスタートし、一九八五年八月二一日には碑の管理委員会が発足し、病院内の庭でその集いが行われた。その様子は現地の邦字新聞でも伝えられ、「陽の目、藤村揮毫の碑」や「藤村碑を守る会発足 サンタ・クルース病院 永遠の輝き約束」といった見出しが紙面を飾った^{二三七}。記事によると当日は、碑の管理を受け持つ土肥セルジオ医師を中心とするサンタ・クルース病院の理事会関係者のほか、日伯文化協会、サンパウロ人文科学研究所、同人誌『椰子樹』などの関係者、そして碑を実際に搜索し、発見した長野県人会のメンバーなどが出席したという。

そして、このとき集まったメンバーを中心に「ブラジル藤村会」が発足し、一九八六年の八月一〇日には、

現在の位置に移転された石碑を前にして、第一回「藤村会」が開催された。当日は、同会会長の矢島新一郎により、再発見のきっかけとなった柳子からの祝辞も代読された。その後、毎年八月二二日の藤村の命日には、碑の前に会員らが集って「藤村を偲ぶ会」が開催され、病院関係者とともに「藤村碑」を守り、後代に継承するための様々な取り組みが続けられてきたという。

こうした活動の一環として一九九八年八月から発行されているのが、同会による機関誌『南十字星』である。現在確認できているのは第二、三号（海外移住資料館所蔵）、四号（国会図書館所蔵）のみで、創刊号は未見、また五号以降の続刊の有無は不明である。資料として不十分ではあるが、現在確認できる範囲から、同会における「藤村碑」の受容のあり方を探ってみたい。

まず、誌上における碑文の来歴についての語りを見ていくと、ここでは常に碑文と日本病院の歩んだ歴史とが、不可分の関係として語られていることに気が付く。第三号（二〇〇〇年八月）に掲載されている矢島貞「日本病院（現サンタクルス病院）と藤村碑」では、戦前の日本病院建設の歴史を知る日系人が年々減少していることが指摘されながら、著者の「この病院の建設された意義とお金は、移民の流した血と涙の供養の塔として残された物であることを忘れる事は出来ない」と語られている。そうした中で病院の建設が始まった頃に来伯した藤村と、「藤村碑」の来歴が語られるのであるが、ここで「藤村碑」は、忘れ去られつつある戦前の日本病院とその建設に尽力した移民たちの姿を記憶する、歴史の証人として見做されていると言える。

またここで注目したいのは、こうした碑文と日本病院とが一体となった歴史の語りは、さらなる記憶の連鎖を呼び、会員それぞれの体験の記憶とも響き合うものとして捉えられている点である。著者はここで、日本病院の来歴とともに、戦争勃発後における当院での出産と、戦後に病気の子供を連れて病院に駆け込んだときの思い出を語っている。つまり「藤村碑」は、こうした個人の記憶、個々人の歴史を想起させるものとしても受容されているのである。

こうした受容のあり方は、第二号（一九九九年八月）掲載の尾崎ミルトン「象徴としての記念碑」（宮島熱示訳）

にも見出すことができる。尾崎は、病院の理事長として勤務する傍らで、藤村会会長として碑の保存に尽力した人物であるが、ここでは同会の橘富士雄が語っていた「石碑は象徴である」という言葉について、以下のように語っている。

あれから（引用者注、橘の逝去から）三年の月日が過ぎました。橘氏が言っておられた象徴とは、文化の永続が核心にあるのではないかと想像するのです。（中略）藤村会の運営を三代目の子孫に任せるその姿勢から、橘氏がどんなにその子孫に集合体の精髓を伝えることをいかに心したかがみられます。／石碑を見る時、民族の感情を詠った短歌のほかに、橘氏の偉大な思想がそこに表われているのを感じられます。

著者が感じ取った「象徴」としての藤村碑とは、「文化の永続」、つまり碑の存在を通じて日本の文学や文化を知ろうという姿勢を導くものであり、また同時に、そこに尽力した人々そのものの歴史を示すものとして理解できる。藤村碑は、日本病院の来歴を中心とする戦前から戦後に至るまでの日系移民社会の歴史に加え、個人の記憶や人と人との交流、結び付きの歴史という、常に新たな歴史が上書きされ続けるものとして受容されているのである。

五・碑の名称をめぐる議論

しかし一方で、こうした「藤村碑」としての再発見と、その保存と継承のための活発な取り組みは、この碑が果たして「藤村碑」なのか「笠戸丸碑」なのかという碑の名称に対する疑問の声を生むことにもなった。一九九

五年九月一日の『サンパウロ新聞』には、その前月に行われたブラジル藤村会による島崎藤村五二回忌追悼会が「藤村碑」の前で行われたと伝える報道に対し、「ところで、この「藤村碑」というのは「笠戸丸組三十周年記念碑」と聞いておりますが、どちらが正しいのでしょうか」という読者からの質問が掲載されている。これに対し新聞社側は、サンパウロ人文科学研究所や香山六郎の親族らへの取材から、碑の名称は歴史的には「笠戸丸碑」が正しいと結論づけ、「藤村が揮毫した古歌に彫られてはいるが、碑は『藤村の碑』ではない。これだけは史実としてはっきりさせておくべきだ」という人文研事務局長宮尾進の声を伝えている^{二十八}。

こうした意見に対し、『南十字星』第四号（二〇〇一年八月）では以下のような反論がなされている。まず矢島新一郎「藤村碑」と「笠戸丸」では、藤村の来伯と碑の来歴、当会による活動の歩みを語ったのちに、「われわれ『ブラジル藤村会』は、この『碑』を私物化しておるものではなく、また『笠戸丸碑』を軽視しておるものではない。世界に唯一の貴重な『碑』として護持しておる」のであって、それは「移住者の、同胞としての良心である」としている。

また茂木安太郎「地球は丸い」では、笠戸丸碑の他面に藤村の碑文を刻むという碑の設計を「そうすることによって、笠戸丸の碑であると同時に、大和心を伝えた藤村揮毫の碑としての重み加わる。これは当時の在伯同胞の英智であったと思える」とし、「両面一対の移民の碑」としての価値を強調している。さらに茂木は、戦後に日本病院で働いた二世の医師たちにとっても、碑は「藤村ゆかりの碑」として見守られてきたことを挙げ、それぞれの立場の人々が、それぞれの方法で碑を守ればいいと結論づけている。

さらに同号における矢島貞「藤村碑」と「笠戸丸碑」では、先の『サンパウロ新聞』の記事を挙げ、「私達は驚いた」と、これまでに碑の継承と会の存続のために重ねてきた努力と、記事が伝える内容との間のギャップに対する戸惑いを見せている。さらに矢島はこのことから碑の来歴を語る資料を集め、藤村の『巡礼』と、前掲の香山六郎による回想をとりあげながら、以下のように記している。

私 は 其 処（引 用 者 注・『巡 礼』）に 書 か れ て い る 文 意 の 中 に、藤 村 の 温 情 の 籠 も っ た 真 実 を 読 ん だ の で あ る。
一 方 香 山 氏 の「笠 戸 丸 石 碑」は 笠 戸 丸 同 航 者 の 同 志 的 愛 情 と、希 望 を 抱 い て 渡 っ て 来 た ブラジ ル 農 村 生 活 の
悲 惨 な 現 実 か ら、権 威 に 対 す る 反 逆 心 を 感 じ た の で あ る。（そ し て 私 は 香 山 氏 は 藤 村 の「置 土 産」を 実 際 に 見
て い な か っ た の で は な い か、と 思 え る の で あ る。）

こ こ で 矢 島 が 読 み 取 っ た 香 山 に お け る「権 威 に 対 す る 反 逆 心」と い う の は、先 の 新 聞 記 事 が 意 味 す る こ と を 考
え る 上 で も 示 唆 に 富 ん で い る。笠 戸 丸 移 民 を は じ め と す る 名 も な き 移 民 た ち に と っ て、文 豪・島 崎 藤 村 の 存 在 は、
や は り ひ と つ の「権 威」な の で あ る。碑 に 対 し て、そ の「権 威」――つ ま り 作 家 藤 村 の 足 跡 を 見 出 す だ け で は、モ
ニ ュ メ ン ト の 意 味 は 大 き く 変 わ っ て し ま う。碑 の 名 称 に 対 す る 疑 問 の 声 は、碑 が「藤 村 碑」と し て 称 揚 さ れ て い
く 中 で、そ の 藤 村 と い う「権 威」が、「笠 戸 丸 碑」と し て の 意 味 を 覆 い 隠 し、そ れ が 示 す 移 民 の 歴 史 が な か っ た こ
と に さ れ て し ま う こ と を 危 惧 す る 声 だ と い え よ う。

も ち ろ ん、ブラジ ル 藤 村 会 に よ る 活 動 は、こ れ ま で 見 て き た よ う に「藤 村 碑」と ブラジ ル に お け る 日 系 移 民 の
歴 史 と を 一 体 の も の と し て 捉 え て お り、「笠 戸 丸 碑」と し て の 歴 史 を 軽 視 し て い る わ け で は 決 し て な い。し か し、
一 九 九 五 年 に 出 た 記 事 を 六 年 後 の二〇〇一 年 に わ ざ わ ざ と り あ げ 反 論 し て い る と い う 事 実 は、こ う し た 碑 の 名 称
を め ぐ る 声 が、当 会 に と っ て も 省 察 を 迫 る も の で あ っ た こ と を 示 し て い る。

六・おわりに

こ こ ま で、一 九 三 六 年 に 島 崎 藤 村 が 南 米 移 民 に 贈 っ た「大 和 言 葉 の 碑 文」に つ い て、そ の 来 歴 と 受 容 の あ り 方
を 明 ら か に し て き た。碑 文 は、ま ず は 日 本 病 院 設 立 時 に「笠 戸 丸 碑」の 他 面 と し て 収 め ら れ、そ の 半 世 紀 あ ま り

の後、今度は「藤村碑」として再発見されることになった。そしてその過程には、太平洋戦争勃発による日本病院の接収、日本語による教育や出版に対する弾圧、言論の空白による戦後の混乱など、日系移民にとつての苦難の連続があった。再発見以降の碑は、「笠戸丸碑」か「藤村碑」かという議論を生みながらも、そうした戦前から戦中、戦後に至るまでの移民たちの歴史、個人の記憶の拠り所として受容されてきたのである。移民と古の歌人たちの歴史とを重ね合わせる視点をもつ「大和言葉の碑文」は、さらに歴史が上書きされ続けることで、より多層的な歴史・記憶の場として機能しているといえる。

では最後に、碑文が歩んだこの数奇な歴史は、一節で言及したような言葉の旅として、どのように意味づけることができるだろうか。ここで示唆的であるのが、前節で引用した矢島貞「『藤村碑』と『笠戸丸碑』」の記述である。先の引用からは、香山と矢島との間にある、日系移民における世代間の差異を感じ取ることができる。香山が藤村に感じ取った「冷たさ」、矢島の言葉で言えば「権威」とは、藤村が訪問した前後の日系移民社会における、緊迫した環境のあらわれだったのではないだろうか。その緊迫した状況は、三節で見たような移民たちとブラジル政府・社会との関係にも、藤村の背後にあった日本政府との関係においても当てはまることであった。その状況において、はるか遠い「母国」からやってきた文豪・藤村の言葉は、なんら現実的な力をもつものではなかったといえる。

その一方で、藤村の碑文に移民に対する「温情の籠もった真実」を見出す矢島には、届けられた言葉に対する無邪気さ、素直さを読み取ることができる。こうした姿勢の背景には、それが可能になるだけの移民社会における変化があったはずであろう。一九八〇年代後半における碑の再発見は、移民社会が過去の困難や対立を乗り越え、それを客観視するだけの距離感を獲得したことによって、はじめて可能になったといえる。またそれは同時に、移民たちと「ふるさと」や「母国」、あるいは「日本」との距離感でもあるだろう。藤村が届けた言葉の旅は、そうした日系移民たちの旅の歴史とともにあるのである。

- 一 以下、『巡礼』からの引用は『藤村全集』第十四卷（筑摩書房、一九六七年一〇月）による。
- 二 <http://saopauloshimbun.com/>より閲覧。
- 三 「陽の目、藤村揮毫の碑 菊の花が飾られ管理関係者が集まった」（『日伯毎日新聞』一九八五年八月二二日）、藤村碑を守る会発足 サンタ・クルース病院 永遠の輝き約束」（『サンパウロ新聞』一九八五年八月二四日）。前掲北川論に全文が掲載されており、原文は未見。
- 四 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ―移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、二〇一四年二月）、細川周平『ブラジル移民文学 2―日本語の長い旅』（みすず書房、二〇一三年二月）参照。
- 五 阿部安成ほか編『記憶のかたち―コメモレーションの文化史』（柏書房、一九九九年五月）、福岡良明『「戦跡」の戦後史―せめぎあう遺構とモニュメント』（岩波書店、二〇一五年八月）参照。
- 六 島崎藤村談話「南米遍路の設計（花を蒔き歌碑を立てゝ巡る、「谷底の家」と永久決別）」（『東京朝日新聞』一九三六年七月五日）。引用は『藤村全集』第十三卷（筑摩書房、一九六七年九月）。
- 七 佐々木信綱ほか編『西行全集』（文明社、一九四一年二月）より引用。
- 八 藤村における四歌人の受容については、前掲北川「島崎藤村の「大和言葉の碑文」について」で論じられている。
- 九 引用は、潁原退蔵・尾形昶訳注『新訂 おくのほそ道』（角川書店、一九六七年九月）。
- 十 太田水穂『新古今集名歌評釈』夏歌（非凡閣、一九三五年）。引用は『太田水穂全集』第七卷（近藤書店、一九五七年四月）。
- 十一 この講演は、元はアルゼンチンでの日亜文化協会関係者に向けられたもので、その後ブラジル・サンパウロにおいても同じ講演がなされた。また内容は邦字新聞にその筆記が全文掲載され、移民たちにも伝えられた。
- 十二 初出は『郊外』一九二四年一月。『春を待ちつゝ』（アルス、一九二五年三月）に収録。引用は『藤村全集』第

九卷（筑摩書房、一九六七年七月）。

十三 「ペン代表から同胞へ」（『伯刺西爾時報』一九三六年八月三十一日三面）、社説「ペン使節を迎ふるの悦び」（同
一九三六年九月二三日二面）参照。

十四 「読者と記者 藤村先生に会ひたかつた」（『伯刺西爾時報』一九三六年一〇月九日二面）、南鳩生「忘れては
ならぬ藤村氏の言葉」（同一九三六年一〇月一九日二面）を参照。

十五 『聖州新報』一九三六年九月二六日三面。

十六 『伯刺西爾時報』一九三六年九月二日七面。

十七 矢島真一郎「藤村碑」と「笠戸丸碑」（『南十字星』第四号、二〇〇一年八月）参照。

十八 香山六郎『香山六郎回想録―ブラジル第一回移民の記録』（サンパウロ人文科学研究所、一九七六年九月）「笠
戸丸石碑」を参照。

十九 前掲、香山『香山六郎回想録』より引用。

二十 「サンタ・クルース病院と島崎藤村とのつながり」（『南十字星』第二号、一九九九年八月）。

二十一 以上、サンパウロ日伯援護協会『援協四十年史』（トッパン・プレス、一九九九年三月）第一章「戦前移民の
保護活動」、山崎芳蔵「同仁会衛生史」（香山六郎編著『移民四十年史』グラフィカ・ブラジレイラ社、一九
四九年一月）、青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委
員会、一九五三年一〇月）第五章「衛生史」を参照。

二十二 前掲『援協四十年史』第一章「戦前移民の保護活動」より引用。

二十三 以上はブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日
本移民百年史』第三卷（風響社、二〇一〇年十二月）、前掲『移民四十年史』を参照。テロ事件についてはサ
ンパウロ新聞に連載された醍醐麻沙夫「ブラジル勝ち組テロ事件の真相」（二〇〇七年）を参照。同書はブラ

ジル移民文庫 (<http://www.brasiliimbunko.com.br>) で閲覧。

二十四 前掲、香山『香山六郎回想録』参照。

二十五 前掲「サンタ・クルース病院と島崎藤村とのつながり」『南十字星』第二号より引用。

二十六 同前。

二十七 注三を参照。

二十八 「展望台 あなたと編集 サンタ・クルース病院の庭にある石碑の由来」『サンパウロ新聞』一九九五年九月一日六面より引用、参照。

終章

一・これまでの議論のまとめ

本研究は、藤村の繰り返し語る自画像、および作品論的藤村像によるテキストの図／地配置をずらすという目論見のもとで、藤村の歴史と旅をめぐるテキストに、その時々テキストや藤村の周囲を対置させ、藤村文学の読み直しを行ってきた。

第一部第一章では、『夜明け前』に引用されている島崎正樹の和歌に注目し、『夜明け前』の脱「政治」化の語りを読み取ってきた。和歌にあらわれている正樹の「攘夷」思想の隠蔽、また「攘夷」思想に基づく「献扇事件」が、和歌の選択と排除によって半蔵による近代批判として読み替えられていることを明らかにした。また、特に「献扇事件」については、天皇への直訴という政治行動を、方法としての「狂気」を導入することで、その「政治」性を抜き取っているという点を指摘した。これは、従来北村透谷との関係や島崎家の「血統」の問題として読まれてきた「狂気」のモチーフを読み替える試みであったと位置づけられる。

第二章では、島崎正樹の「ありのまゝ」という自伝的テキストを、『夜明け前』がどのように半蔵の歴史として語り直しているのかを、特に両者の王滝参籠の語りを比較することで考察し、『夜明け前』における王滝参籠は、「ありのまゝ」における父の病氣祈願というプロットから、半蔵の「道」の発見のプロットとして読み替えられていることを指摘した。それによって、「ありのまゝ」に描かれた出来事を、ある価値観をもった固定的視点である〈個〉の立場から再編成する『夜明け前』の語りの方法を明らかにした。また、その〈個〉としての青山半蔵は、伝統的・共同体的な「景」から半蔵を切り離す反照装置としての「神」の機能によって創出されたものであり、『夜明け前』の半蔵の悲劇は、そのような近代小説が生んだ表現によるものとして位置づけた。

第三章では、まずは『夜明け前』を「草莽」という概念から引き離す手続きを行った後、新たに幕末維新期における中間層という定義のもと、一九三〇年前後におけるマルクス主義歴史学、市村威人『伊那尊皇思想史』と『夜明け前』との比較を行った。上記の同時代テキストは、その歴史叙述の背景に両極的な政治的立場をもっており、『夜明け前』のテキストにはその双方に向けた対話性が読み取れた。そこから、成田龍一が提示した「国民」のプロットとしての規定だけには収まらない、一九三〇年前後の歴史認識をめぐる三派鼎立状況そのものを包含するような『夜明け前』の歴史の多層性、混交性を指摘した。

第二部第四章では、「旅」というテキストをもとに、藤村の旅の語りについて考察した。「旅」は〈紀行文〉ではなく〈小説〉として書かれたものであったが、同一の伊豆旅行をもとにした田山花袋、蒲原有明によるテキストと比較することによって、その〈小説〉らしさよりも、なぜ〈紀行文〉になり得ないのかということを、テキストにおける〈枠〉の存在をもとに考察した。旅行先の土地だけでなく旅行者が帰っていく場をもテキストに顕在化させる〈枠〉は、紀行文における「私」とは異なる「私」性というものをテキストの中に持ち込んでしまう。そこに、同時代の紀行文とは異なる藤村の旅の語りの特徴を見出した。

第五章では『海へ』について考察した。東京とパリとの往復航海という旅の境界を全景化するテキストは、第四章で確認した「旅」における〈枠〉と重なるものがある。また、その〈枠〉が導入する「私」性が、『海へ』では同時代読者の批判を呼ぶほどに強固にあらわれていた。この過剰な「私」語りは、一方では序章で批判した藤村の自画像、自己引用の問題を明らかにするものであり、その自己引用によって作られる「私」が、過去のテキストの文脈をどのように解体し、再編成させたものであるかを明らかにした。またその一方で、帰路における「私」の「眼」を執拗に問う語りは、従来論じられてきた藤村の「文明批評」の枠では捉えきれない、パリ体験をもとに内面化した西洋近代的価値観やアジアへのまなざしを対象化する側面を見せており、そこに『海へ』における批評性を読み取った。

第六章では、一九三六年における藤村の南米行きと、その紀行集である『巡礼』について考察した。藤村の訪

問した一九三六年前後における南米日系移民社会は、国家による移民政策、日伯間のナショナリズムの対立とそれにともなう日本語教育問題など、様々な政治的課題を抱えており、それは藤村の発言に公的な責任を負わせるものであった。一方で、その体験を語る『巡礼』においては、「旅人」あるいは「巡礼者」としての「私」ということが繰り返し強調され、そのような公的責任から逃れ、文学の言葉としてその旅を語り直そうとする藤村の姿勢を読み取った。第一章と同様、ここでもまた藤村が好んで使う「巡礼」というモチーフが示す別の機能を指摘した。

第七章では、南米の移民子弟に向けて藤村が贈った「大和言葉の碑文」のその後について調査し、その享受の歴史について考察した。戦前、日本病院敷地内に「笠戸丸碑」の背面として収められた碑文は、戦中の日本病院の接収にともない長らく忘却されていたが、一九八〇年代後半に、今度は「藤村碑」として再発見されることになる。藤村の碑文は、その来歴そのものが戦前戦後の日系移民が辿った歴史と不可分の関係にあり、その歴史の継承、文化の継承の象徴として享受されていることを指摘した。しかし一方で、「藤村碑」としての盛んな活動は「笠戸丸碑」の側面を覆い隠すのではないかとの議論も呼ぶことになり、文豪・藤村としての権威性が民衆たちの歴史と摩擦を起こす側面があることを示した。本章の試みは、作家の旅あるいはそこで届けられた言葉を、迎える側、受け取る側から捉え直すものであった。

二・考察と今後の課題

第一部の考察を通して明らかになったのは、歴史を語るということがいかに同時代の制約を受けるかということであろう。特に第一章、第二章での考察は、『夜明け前』と同時代の一九三〇年前後が、「民衆」の時代であり、左右両極からの政治的実行の時代であったことを想起させる。その中で、先行テキストのある部分を読み替える

がら、また同時代テキストとの対話を繰り返しながら、藤村の歴史は語られていた。その過程では、島崎藤村という通時的な統一性もまた、変更やズレ―例えば「狂気」の機能の変更を抱えざるを得ない。とすれば、一九四〇年前後に書かれ、未完に終わった『東方の門』もまた、単なる『夜明け前』の続編としては捉えられない問題を抱えていることになるだろう。『東方の門』は『夜明け前』から何を引き継ぎ、また何を排除しているか、そしてそれは一九四〇年前後という同時代の文脈といかに関わりを持つものであるかを考察することが今後の課題である。

また第二章では、『夜明け前』の小説表現としての近代性というものが明らかにした。それは明治三〇年代から四〇年代以来の自然主義的な近代小説の方法として捉えられる。そこから、半蔵と共同体との乖離、あるいは「政治」に対するあり方を、日本の自然主義の問題として考察することも可能なのではないかと考えられる。第三章におけるマルクス主義歴史学や市村の郷土史に顕著のように、一九三〇年前後において歴史を語ることは、現実的な政治行動と関わりを持つことであり、行為遂行性の高いものであったといえる。そのような中で自然主義による歴史の語りの位置、またその言葉が持ち得た批評性、あるいは無力さを考える必要があると思われる。この点についても、今後の課題として位置づけておきたい。

第二部については、以下のことに言及しておきたい。まず、第四章、第五章を通して明らかになったのは、一九一〇年前後における藤村の旅の語りにある〈枠〉と、それによって導入される強固な「私」性という特徴である。その特徴は、同時に紀行文と小説との臨界点を浮かび上げらせ、藤村の旅の語りが、同時代の紀行文とは異なる表現の実践であったことを示している。このことを、作家の内面に還元しない形でいかに発展させていくことができるか。一つの見通しとして、改めて同時代の文学表現の中での藤村の詩から散文への移行の問題、散文における人称や文体、表現の問題を考察していく方向がある。この点については、先行研究においても十分に論じられておらず、例えば永井聖剛『自然主義のレトリック』（双文社出版、二〇〇八年二月）のような作業を、藤村においても行っていく必要がある。このことが、先述した日本自然主義の問題を考察していくことにも繋がる

のではないだろうか。

またこの一九一〇年前後の旅の語りと、第六章で考察した『巡礼』の語りは、その「私」性において大きな変化が見られた。「旅人」としての気負いのなさを強調するような「私」像は、『海へ』において見られたような過剰な「私」像とは大きく異なっている。この間には、『エトランゼ』（春陽堂、一九二二年九月）や「山陰土産」（『名家の旅』朝日新聞社、一九二七年一〇月）などの紀行文もあれば、小説として発表された「熱海土産」（『女性』一九二五年一月）もある。この時期についてもやはり、藤村における表現の問題として今後も考察を続けていきたい。

以上、課題は山積みであるが、本研究を通して藤村のテキストと向き合う中で、改めて藤村の表現の実践者としての面白さを発見できたと考えている。藤村の場合、とかくその生や思想に注目が行きがちであるが、やはり「旅」や『海へ』などはそこに還元できない表現上の奇妙さをもったテキストであるし、繰り返し行われる自己引用の問題も、作家像としての統一性ではなく差異に注目することで、藤村の「自己表象」の過程として追うことも可能なのではないか。藤村のテキストは、そのような言語実践の場としても、議論に耐え得る強度をもっている。

一 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか―ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、二〇一三年七月）参照。

二 J・L・オースティン『言語と行為』（坂本百大訳、大修館書店、一九七八年七月）を参照。

補論 一九四〇年前後における岡倉天心の再発見と『東方の門』―藤村と日本浪漫派

一．はじめに

一九四〇年前後、晩年における島崎藤村は岡倉天心に傾倒し、未完に終わった小説『東方の門』においては、その中心的な人物として天心を描こうとしていた。しかし同時期において岡倉天心は、アジア解放の予言者として称揚され、「大東亜戦争」の肯定化に利用されていく存在でもあり、そしてそこでは、日本浪漫派による天心像が大きな役割を果たしていた。本論では、このような一九四〇年前後における島崎藤村と日本浪漫派による二つの岡倉天心像に注目し、藤村における天心像が、同時代の天心像といかなる関わりをもつのかについて考察する。

藤村における天心像は、一見すると日本浪漫派のような戦争賛美に加担するような言説とは性質の異なるもののように見えるが、実際には、藤村と日本浪漫派、特にその中でも保田與重郎とは、ともに天心を西洋思想の影響を強く受けながらも、「国粹」や「保守」の立場を維持した理想の人物として受容している点において共通する部分がある。分析を通して以上の点を明らかにし、またその差異にも注目することで、藤村における天心像に対していかなる評価あるいは批判が可能かについて考察したい。

本題に入る前に、ここでは近年の藤村研究を概観し、本論における問題の所在を確かめておきたい。これまでの藤村研究には、他の近代作家と比較しても、強い作家論・作品論的アプローチの伝統が存在し、特にパリ行き以降の藤村文学に対しては、それを藤村による「文明批評」として肯定的に評価する立場が多くを占める^二。しかし一方で、最晩年の藤村における岡倉天心への傾倒や未完に終わった小説『東方の門』に対しては、吉本隆明による批判^三や、「もし仮に藤村が『東方の門』を書き進めるうち、内心の素朴な愛国心に突き動かされて、東方より光をもたらすものとしての日本の役割をいささかでも称揚することがあったとすれば、本人の誠意とはまった

く無縁なところで、たとえば天心の「アジアは一つである」と同じように、著作の内容や表現が歪められて利用される恐れは多分にあつたであろう」として未完であつた『東方の門』の〈幸運〉を指摘する小池健男^三など、藤村の思想と「大東亜戦争」との親和性を指摘する立場もある。

こうした視点から藤村における天心受容の問題を捉える時、示唆的なのは目野由希による一九三六年におけるK・ナーグとの出会いを通しての藤村の天心受容という指摘、また稲賀繁美によるインドにおける天心受容に関する一連の研究である^四。K・ナーグを通しての天心受容という指摘は重要だが、一九三六年以前にも藤村は天心に言及しており、藤村による天心の再発見は、単に偶然によつて与えられたものではなく、内的必然性をもつたものとして捉えられる必要がある。以上の点からも、藤村における天心像と、当時絶大な影響力をもつた日本浪漫派による天心像とを比較する本論の試みは有効性をもつものと考ええる。

二・藤村における岡倉天心像

では、はじめに藤村における天心再発見までの道のりを追っていきたい。藤村における天心の再発見には、その出発点として『海へ』（実業之日本社、一九一八年七月）における「国粹の建設」に対する自覚が挙げられる。一九一三年から一九一六年にかけてパリに滞在した藤村は、日本とパリとの往復航海について記したこのテキストにおいて、以下のように記している。

つくづく私は仏蘭西あたりにある欧羅巴のクラシカルな文明を、クラシカルでそして同時に近代的なあの大きな包容の力を羨んで来た。何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるか、と言ふ海外在留の同胞に邂逅ふ度に、吾儕は左様いふ破壊の思想から自分の国を護らねば成らないと思つ

て来た。(中略) 左様だ、吾儕日本人はまだく保守的だ。吾儕に必要なことは国粹の保存ではなくて、国粹の建設でなければ成らないのではないか。吾儕はもつとく欧羅巴から学ばねば成らない。そして自分等の内部にあるものを育てねば成らない。(『海へ』第五章「故国に帰って」^五)

パリや船中で出会った同胞の「破壊の思想」――ヨーロッパの文明とその伝統への羨望と自らの文化に対する劣等感に接した藤村は、そうした思想を克服するためには、単に近代以降の西洋文明の摂取という日本の近代化の歴史を否定し、それ以前の文化への回帰を唱える「国粹の保存」ではなく、ヨーロッパに学ぶことによって「自分等の内部にあるもの」を育てる「国粹の建設」が必要であることを痛感する。そしてこの「国粹の建設」のために再発見されたのが、明治維新时期に国学に傾倒し、「復古」の夢を信じた藤村の父・島崎正樹という存在であった。

『海へ』第二章「地中海の旅」には、「父を追想して書いた船旅の手紙」という副題が付けられており、「あなた」と呼びかけられる父の存在は、「そのあなたがもし今日まで御存命で、私の為ることを見て居て下さるとしたら、奈何でせう。御思召のほどもはかりかねますが、わたしはあなたが異端とせられ邪宗とせらるゝ教の国の方へ旅立たうといたしました」^六と、西洋へ旅立つ自分自身とは対比的な存在として描かれている。しかしこのようなフランスへ向かう船旅での父との対話は、近代という時代を生き抜くための「国粹の建設」――父の時代における「内部にあるもの」の発見へと繋がっていく。これがすなわち藤村における国学の再発見となるわけだが、すでに指摘されているように、ここから見出された父や国学とは、近代を生き抜くための内なる〈近代〉の象徴であり、そこには史実を超えた藤村による解釈の領域が多分に存在する。そして、こうして発見された『海へ』における「国粹の建設」、「内部にあるもの」を育てるという課題は、明治維新を日本の内側から起こった近代化として描こうとする小説『夜明け前』として結晶化している。

そしてこの後、『夜明け前』執筆期間の藤村の文章からは、岡倉覚三の名が度々登場するようになる。『夜明け

前』執筆中に書き溜められた短文をまとめた感想集『桃の雫』（岩波書店、一九三六年六月）では、以下のように藤村における天心受容のあり方が分かる。

再吟味といへば、当然それをされていゝ人で、未だに等閑にされてゐる明治年代のすぐれた人もある。岡倉覚三の生涯などはその第一に数ふべきであらう。（中略）東洋と西洋との文化をほんたうによく噛み砕いた彼の著作こそは、明治年代がわたしたちに遺して呉れた最もいゝ遺産の一つと言つていゝ。（『桃の雫』「岡倉覚三」七）

さらに同じく『桃の雫』における「ある人へ」と題された短文では、力はいかに得られるかを問う手紙を送つてきた人物に対して、「君は明治以来のこの国の青年の弱味が歴史精神に欠けてゐたことだとお考へにはなりませんか。故岡倉覚三のごときはそれを持つてゐた稀な人でせう」と、ここでは「歴史精神」を体现する人物として天心が登場している。先の引用では、東洋と西洋とを「ほんたうによく噛み砕いた」と、西洋近代との接触の時代を生きた理想の人物として天心が登場しているが、この時期の藤村における天心像は、まだ曖昧な部分を多く残したものとなっている。この後、より明確な天心像が浮かび上がってくるのは、次に見る藤村の『巡礼』の旅――一九三六年における南米行きとその帰路でのアメリカ、パリ行き以降のことと考えられる。

一九三六年、日本ペン倶楽部会長として、アルゼンチン・ブエノスアイレスで開かれる国際ペン・クラブ大会に出席するために南米へ向かった藤村は、現地に住む日本人移民との交流を重ね、彼らが直面している現地の排日運動や日本語教育の問題など、移動の時代が引き起こす様々な困難を目撃する。

わたしもこの旅に来ていろ／＼な人に逢ひ、いろ／＼な注文の出るのを聞いた（中略）幾多海上の風波を凌ぎ、万事不自由勝ちな旅を忍んでまでも、わざ／＼遠く働きに来てゐる同胞に対しては、伯国人としても

真に同情ある態度こそ望ましく、又、これを在留移民の側から言つて見れば既にこの地に各自の生を托する以上、さう理論にのみ拘泥することなく、仮令母国の風習なりともあまりに特殊で地方的なものはこれを脱ぎ去り、どこまでも日本人らしい心をもつて南米文化の發達に協力することこそ望ましい。互ひの信頼と尊敬なしに、人間同志の生活が営まれようか。『巡礼』「南米事情の三」(八)

移動の時代における異なる文化や政治的立場を持つ者同士の対立と摩擦、これが藤村の見た現在における日本が抱える課題であつた。南米滞在までの『巡礼』の記述は、この困難な課題に対する、藤村の憂鬱や苛立ちに満ちたものとなっている。しかし、南米を辞してアメリカへ向かつた藤村は、ボストンにおいてそうした困難に対する一つの希望を見出すのである。それが、理想の体現者としての天心と、天心に対する世界からの深い「信頼と尊敬」であつた。

日頃わたしは居士（引用者注、天心）の生涯を想像してゐて、今度の往きの旅にセイロンへ寄港した際にも印度とは縁故の深い故人のことを彼地に偲んで来たし、故人の遺著により「東洋」を発見したものは現代印度人の間に少ないことを知つて来たし、南米までやつて来てあの名高い『茶の本』が西班牙語にも訳されると聞いた時はそれをわがことのやうによるこんだくらゐである。そのわたしはボストン美術館の内に旅の身を置いて、故人に対する米国人の尊敬と愛とが自分の想像以上であることをも知つた。（中略）この二人（引用者注、天心とイザベラ・ガードナー）の異性の間に結ばれた友情こそは、世にもめづらしく、互ひに思ひやることも深く、また静かに長く続いたものであつたらうと想像せられる。「東は東、西は西、二つは永遠に相逢ふことはなからう」とキップリングは歌つたが、その二つが岡倉天心に於いて相会したのであると言えることも、偶然ではない。『巡礼』「北米雜記の二」(九)

ここに書かれたインドにおける天心受容は、前掲目野論文が指摘するように、南米へ向かう途中に同船したインド代表のK・ナグによって伝えられたものと思われる。さらにここで重要なのは、藤村自身がボストン美術館に訪れることで感じ取ったアメリカにおける天心に対する深い理解である。この旅において藤村は、「国粋の建設」を実現しながらも、インド、南米、アメリカ等、世界において尊敬され、愛と友情を結ぶ理想の人物としての天心―つまり西洋文明への接触と「国粋」の両立者としての天心を発見し、そこに現在の日本が抱える困難に対する、ある希望を見出したのである。

三・日本浪漫派における岡倉天心像

では次に、一九四〇年前後における岡倉天心の称揚と日本浪漫派との関係について迫ってみたい。木下長宏は「昭和前期の岡倉天心」^十の中で、天心をめぐる言説内容の変遷を、①日本美術院による『天心全集』全三巻の刊行に代表される、回想・追想の対象としての天心（一九一三―一九三三年）、②東京美術学校への銅像設置（一九三三年）や、岡倉一雄編『岡倉天心全集』全三巻刊に代表される伝記記述・論究の対象としての天心（一九二四―一九三三年）、③創元社による全集刊行（二巻で中絶）に代表される大東亜共栄圏の理想を宣した思想家・予言者としての天心（一九三四―一九四三年）に分類し、特に③の時期について以下のように述べている。

岡倉天心は、昭和十年代にあつて、大東亜共栄圏を樹立するための「聖戦」の理念を説く指導的思想家として声高に評価され賞揚され、その著書『東洋の理想』の冒頭に記された一句「Asia is One」（アジアは一つ）が、この聖戦の主旨を謳う言葉として、また「決戦下」国をあげて滅私奉公の生活を強いられる国民の胸の裡に秘められるべき理想を代弁するスローガンとして、高く掲げられたのであつた。^{十一}

木下の指摘通り、没後二〇年までの天心像は、美術界の偉人としての回想や伝記記述の対象でしかなく、そこには一九四〇年前後に見られるような戦争を正当化するための「予言者」としての天心像は見られない。例えば、天心の死を伝える『東京日日新聞』一九一三年九月三日七面の「総ての文明を美術化した人 末松文学博士の談」では、「岡倉氏は実に美術院派なるものゝために努力し大に日本美術界に新旗幟を樹てた」として美術界における功績が讃えられ、また「氏は総ての文明を美術化するの才があつた米国に居つても断じて洋服を着ないで和服を着通した」というような一九四〇年前後であれば「国粹」の人として称揚されそうなエピソードも、「美術家らしい奇人であつた」ということで片付けられている。

こうした①・②の時期の天心像と比較すると、以下に引用した一九四二年の横山大観による天心像には大きな変化が見られる。

在印中、親しく英国の暴戾を目睹するに及び、遂に激発せられたる天心先生は今より約四十一年前、亜細亜民族の覚醒と文化的優越について、執筆せられたのであつたが、(中略)題して「東洋の理想」といふ。その冒頭に「亜細亜は一つなり」と喝破し、特に日本の燦爛たる古代文化的理想につき万丈の気を吐き、英米の蒙を啓いたのであつた。^{十二}

さらに、以下の浅野晃による短文は、より露骨に「大東亜戦争」を肯定化する存在としての天心像を浮き彫りにしている。ここでは天心による「アジアは一つ」という言葉が、大本営と化した新聞によって民衆の戦意高揚を刺激するスローガンとして登場している。

これ(引用者注、「アジアは一つ」)は、天心が、屈辱の印度を見て、思はず発した心の叫びでアジア十億

の民の解放の日を願う祈りが、深くこめられてある。(中略) 今日、宣戦大詔激発の日にあたり天心のこの語をしづかに誦するとき、われらは皇威八紘に光蔽する現実を前にして、まことに感慨無量なるものを覚える。

十三

こうした戦時中の天心称揚に対し、戦後の竹内好は、「戦争中、天心をかついだのは主として『日本ロマン派』系統の文学者だった」^{十四}として、この時期における天心像の形成における、保田與重郎、浅野晃、佐藤信衛等による影響の大きさを指摘している。しかし同時に竹内は、日本浪曼派による天心像の微妙な変容も指摘しており、それは木下前掲論文においても、「(引用者注、保田の)『Asia is One』では、天心を「最大の思想家、最大の詩人、最も識見の高い志士、さうして最大の予言者」と呼んでいる。「世界人」と「予言者」との間には、くぐもった転向がひそんでいる」^{十五}と指摘されている。

このような指摘をもとに、日本浪曼派における初期の天心像を見ると、特に保田與重郎を中心として、藤村に見られたような西洋文明の摂取と「保守」の立場を両立した存在として天心を捉える見方が存在する。例えば保田與重郎による「明治の精神」では、日本の独立のための文明開化といういわゆる和魂洋才論的思想と世界への関心を表すものとして、「明治の精神」という言葉が用いられ、さらにその世界への関心がもともとはペリー来航の遙か昔である「万葉天平の時代」から存在したとすることで、日本の内部から起こった近代化を説明しようとする。ここには、藤村が『夜明け前』において試みたような、内なる〈近代〉に類似する試みが読み取れるだろう。そして天心は、その「明治の精神」の体現者として、内村鑑三と並ぶ明治期における「世界人」の一人として登場する。

天心はそもく初めに「世界史」「世界」を発見してゐた。このやうな雄大な明治の精神の実相は、尊敬すべき「歴史」の発見者たる日本の近世の国学者さへももたなかつた。何となれば明治の精神が世界を発見す

るについての事情のうちには、最も厳肅な事実として「法隆寺の発見」があつたのである。（保田與重郎「明治の精神」^{十六}）

ここで記されている「法隆寺の発見」とは、一八八四年における、天心とフェノロサによる法隆寺訪問、夢殿の開扉を指し、そこで天心は奈良時代においてすでにアジアを世界としていた文化・精神の交流があつたことを知ることになる。こうした「法隆寺の発見」という功績を持つ「世界人」という保田の天心像について、李京億は、「保田の説く天心の「世界」の最も大きな意義は、その「世界」発見が「歴史」の発見の延長であるということである」^{十七}としている。つまり、保田による天心像もまた、藤村の場合と同様、日本の「歴史」に対する強い「自覚」をもった存在としてあらわれているのである。

四．まとめとして

では最後に、藤村と保田與重郎に代表される日本浪漫派との、二つの岡倉天心像を比較してみたい。まず、文明開化の時代にあつて、西洋の言語や思想を獲得しつつも、日本の「内部」にあつた近代化への動きを見出す点において、藤村と保田は共通している。それはつまり、西洋文明の摂取と「国粋の建設」・「保守」との両立であり、両者において天心はその理想的な体現者としてあらわれているということである。しかし、一方でこうした日本の「内部」の歴史を重要とする見方には、「明治に前後して亡んだアジアの国々の中で日本だけが滅びなかつたのである」とする保田の言葉のように、アジアで唯一西洋による植民地化を免れた日本だけが、アジアを率いる資格をもつという、「東亜の盟主」としての日本論に繋がる危険性がある。

また、藤村と浪漫派との間の相違点には、以下のことが挙げられる。藤村における天心像は、彼が「国粋の建

設」を体现する存在であると同時に、その存在が世界からの尊敬や愛、友情を集めるものであるという点、そして天心が西洋と東洋をつなぐ接点であることが重要になる。しかし、こうした視点は保田における天心像には見られない。つまり藤村と日本浪曼派における天心像の大きな違いは、藤村における天心像が、東洋だけではなく、西洋に対してもひらかれたものであった点である。

この点において、やはり今後検討していくべきなのは未完に終わった小説『東方の門』ということになる。『東方の門』における天心像とはいかなるものになるはずだったのか、未完におわってしまった以上、その全貌を知ることが叶わないが、ここでは冒頭に登場するシーボルトの描かれ方に注目することによって、最晩年の藤村が描こうとしたものについて考えてみたい。『東方の門』『序の章』では、以下のように移動の時代の先駆けとして、理想的な「異邦人」としてのシーボルトが登場する。

そこにはまた、日の出の遠くないことを感づいて、それを告げにこの世へ生れて来たやうなものもある。さういふ先達の中には、遠く海を渡つて来て、異邦人としては真にこの国民を知り愛しまた導きもしたといふべき稀な人すら見出さるゝ。(中略) 知れば知るほどシイボルトはこの国のものゝ間に隠れてゐる美しい性質を見つけ、その日本固有の伝統は欧羅巴人はおろか他の東洋人の間にすらよく知られてゐないことを思ひ、古代から長い長い年月の間に養はれて来たものが幾多の才能を生み出してゐることに気づいた。『東方の門』序の章(一八)

ここでは、日本の「内部」にあった近代を受け止める力(「伝統」「腰骨」とともに、それを理解し尊敬するシーボルトの姿が描かれている。またシーボルトと鳴滝塾生との互いに尊敬しあう様子は、藤村の夢見た「信頼と尊敬」に満ちた西洋と東洋との接触だと言える。未完である以上、推測にすぎないことではあるが、『東方の門』において描かれるはずであった天心とフェノロサもまた、シーボルトと鳴滝塾生のように、互いの尊敬と友情に

満ちたものとして描かれることになっていたと考えられる。

既に本論第六章で確認してきたように、こうした藤村における理想化された移動や文化の接触は、南米で目撃した日本人移民とホスト社会との政治的、文化的軋轢からの逃避の裏返しでもあった。また同じく第六章や第七章で見たように、こうした極めて政治的で、各立場の利害関係が交錯する場において、藤村の文学の言葉が持ち得た力を過大視することは難しい。しかしながら、一九四〇年前後の藤村がそれ以前の文化交流の歴史をいかに語ろうとしたのか、それは同時代の文脈に置き直すとどのような位置づけになり得たのか、既出の『東方の門』の語りや、その史料との比較によってある程度は考察が可能だと考えられる。今後の課題としたい。

一 亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社、一九五三年十二月）、十川信介編『藤村文明論集』（岩波書店、一九八八年七月）「解説」、剣持武彦「島崎藤村『東方の門』論」（『肩の文化・腰の文化―比較文学・比較文化論』双文社出版、一九八八年九月）、平林一『島崎藤村―文明論的考察』（双文社出版、二〇〇〇年五月）、細川正義『島崎藤村文芸研究』（双文社出版、二〇一八年八月）など。

二 吉本隆明「『東方の門』私感」（瀬沼茂樹編『文芸読本 島崎藤村』河出書房新社、一九六二年一〇月）。

三 小池健男『『東方の門』の〈幸運〉』（『島崎藤村研究』二六、一九九八年九月）。

四 目野由希「『東方の門』執筆前の藤村」（『島崎藤村研究』三五、二〇〇七年七月）、稲賀繁美『絵画の臨界―近代東アジア美術史の桎梏と命運』（名古屋大学出版会、二〇一四年一月）。

五 『藤村全集』第八卷（筑摩書房、一九六七年六月）より引用。

六 同前。

七 『藤村全集』第十三卷（筑摩書房、一九六七年九月）より引用。

-
- 八 『藤村全集』第十四卷（筑摩書房、一九六七年一〇月）より引用。
- 九 同前。
- 十 日本美術院百年史編纂室編『日本美術院百年史』第七卷（日本美術院、一九九八年五月）に収録。
- 十一 木下前掲論文。
- 十二 横山大観「天心岡倉先生」（『現代』一九四二年一月）。
- 十三 浅野晃「戦時必勝・国民座右銘 アジヤは一つ」（『朝日新聞』一九四三年二月八日四面）。
- 十四 竹内好「岡倉天心」（『朝日ジャーナル』一九六二年五月二七日）。
- 十五 木下前掲論文。
- 十六 『保田與重郎全集』第五卷（講談社、一九八六年三月）より引用。
- 十七 李京僖「保田與重郎の岡倉天心論―三つの架橋の相―」（『比較文学』四九、二〇〇六年三月）。
- 十八 前掲、『藤村全集』第十四卷より引用。

【初出一覧】

序章	書き下ろし
第一章	「和歌が生む葛藤―島崎藤村『夜明け前』における国学と政治」（横浜市立大学大学院都市社会文化研究科『国際文化研究紀要』第一九号、二〇一三年三月）を加筆・修正
第二章	「『夜明け前』の歴史叙述と〈近代〉―島崎正樹「ありのまゝ」との比較から」（『JunCture 超域的日本研究』第六号、二〇一五年三月）を加筆・修正
第三章	「明治維新史における中間層をめぐる歴史叙述と『夜明け前』―一九三〇年前後、「草莽」ならざる「草叢」の時代」（立命館大学・国文学研究資料館「明治大正文化研究」プロジェクト編『近代文献調査研究論集』二〇一六年三月）を加筆・修正
第四章	書き下ろし
第五章	書き下ろし
第六章	「『巡礼の旅』のポリティクス―島崎藤村の南米訪問とその語り」（『跨境 日本語文学研究』第三号、二〇一六年六月）を加筆・修正
第七章	書き下ろし
終章	書き下ろし
補論	「一九四〇年前後における二つの岡倉天心像―戦時下の〈越境〉・〈越境者〉イメージ」（『シンポジウム「日本文学における越境の諸相」報告集』二〇一五年二月）を加筆・修正

【参考文献一覧】

書籍（単著）

- 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻・下巻（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、一九四〇年一月・一九五三年一〇月）
- 安藤宏『近代小説の表現機構』（岩波書店、二〇一二年三月）
- 伊東多三郎『草莽の国学』（名著出版、一九八二年三月）
- 稲賀繁美『絵画の臨界―近代東アジア美術史の桎梏と命運』（名古屋大学出版会、二〇一四年一月）
- 色川大吉『新編 明治精神史』（筑摩書房、一九九五年一〇月）
- 臼井吉見『近代文学論争』下（筑摩書房、一九七五年一月）
- 梅本浩志『島崎藤村とパリ・コミュニケーション』（社会評論社、二〇〇四年八月）
- 亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社、一九五三年十二月）
- 亀井秀雄『明治文学史』（岩波書店、二〇〇〇年三月）
- 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波書店、二〇〇八年一〇月）
- 河田和子『戦時下の文学と「日本的なもの」―横光利一と保田與重郎』（花書院、二〇〇九年三月）
- 北小路健『木曾路文献の旅』正・続（芸草堂、一九七〇年七月・一九七一年五月）
- 剣持武彦『肩の文化・腰の文化―比較文学・比較文化論』（双文社出版、一九八八年九月）
- 小林一郎『島崎藤村研究』（教育出版センター、一九八六年九月）
- 酒井直樹『死産される日本語・日本人―「日本」の歴史・地政的配置』（新曜社、一九九六年五月）
- 坂部恵『かたり』（弘文社、一九九〇年十一月）
- 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流―国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、一九九九年八月）

- 鈴木昭一『夜明け前』論（桜楓社、一九八七年一〇月）
- 鈴木昭一『夜明け前』論―史料と翻刻（おうふう、一九九四年二月）
- 鈴木昭一『夜明け前』研究―史料と翻刻（おうふう、一九九八年一〇月）
- 鈴木昭一『夜明け前』『東方の門』研究―史料と翻刻（おうふう、二〇〇八年一月）
- 相馬庸郎『日本自然主義論』（八木書店、一九七〇年一月）
- 高木俊輔『明治維新草莽運動史』（勁草書房、一九七四年一〇月）
- 高橋昌子『島崎藤村―遠いまなざし』（和泉書院、一九九四年五月）
- 高橋昌子『藤村の近代と国学』（双文社出版、二〇〇七年九月）
- 十川信介『島崎藤村』（筑摩書房、一九八〇年十一月）
- 永井聖剛『自然主義のレトリック』（双文社出版、二〇〇八年二月）
- 永井慎平『折口信夫の「性」と「政」―「折口像」の問題』（博士論文、名古屋大学、二〇一四年三月）
- 永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年三月）
- 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか―ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、二〇一三年七月）
- 中山弘明『戦間期の『夜明け前』―現象としての世界戦争』（双文社出版、二〇一二年十一月）
- 中山弘明『溶解する文学研究―島崎藤村と〈学問史〉』（翰林書房、二〇一六年二月）
- 成田龍一『歴史学のスタイル―史学史とその周辺』（校倉書房、二〇〇一年四月）
- 成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか―一九三〇年代「国民の物語」批判』（日本放送出版協会、二〇〇一年四月）
- 西田谷洋『認知物語論とは何か？』（ひつじ書房、二〇〇六年七月）
- 芳賀登『「夜明け前」の実像と虚像』（教育出版センター、一九八四年三月）
- 橋川文三『日本浪漫派批判序説』（未来社、一九六〇年二月）

橋川文三『昭和維新試論』（朝日新聞社、一九八四年六月）

蓮實重彦『夏目漱石論』（青土社、一九七八年一〇月）

日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ―移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、二〇一四年二月）

福岡良明『「戦跡」の戦後史―せめぎあう遺構とモニュメント』（岩波書店、二〇一五年八月）

ヘイドン・ホワイト『物語と歴史』（海老根宏・原田大介訳、《リキエスタ》の会、二〇〇一年一二月）

北條浩『島崎藤村『夜明け前』リアリティの虚構と真実―木曾山林事件に見る転落の文学の背景』（御茶の水書房、一九九九年八月）

細川周平『ブラジル移民文学 2―日本語の長い旅』（みすず書房、二〇一三年二月）

細川正義『島崎藤村文芸研究』（双文社出版、二〇一三年八月）

前田愛『文学テキスト入門』（筑摩書房、一九九三年九月）

前山隆『移民の日本回帰運動』（日本放送出版協会、一九八二年六月）

正宗白鳥『自然主義文学盛衰史』（創元社、一九五一年一〇月）

宮地正人『歴史の中の『夜明け前』―平田国学の幕末維新』（吉川弘文館、二〇一五年三月）

吉田精一『自然主義の研究』下（東京堂、一九五八年二月）

E・M・フォスター『小説の諸相』（中野康司訳、みすず書房、一九九四年一月）

J・L・オースティン『言語と行為』（坂本百大訳、大修館書店、一九七八年七月）

Bourdagh, Michael (2003) *The Dawn That Never Comes: Shimazaki Tōson and Japanese Nationalism*. New

York: Columbia University Press

書籍（編著）

阿部安成ほか編『記憶のかたち―コメモレーションの文化史』（柏書房、一九九九年五月）

- 石川友紀監修『日系移民資料集〈南米編〉』第一九卷（日本図書センター、一九九九年二月）
- 金子明雄ほか編『ディスコールの帝国―明治三〇年代の文化研究』（新曜社、二〇〇〇年四月）
- 剣持武彦、平岡敏夫編『島崎藤村―文明批評と詩と小説と』（双文社出版、一九九六年一〇月）
- 香山六郎編著『移民四十年史』（グラフィカ・ブラジレイラ社、一九四九年二月）
- 小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー―明治三十年代の文化研究』（小沢書店、一九九七年五月）
- サンパウロ日伯援護協会『援協四十年史』（トッパン・プレス、一九九九年三月）
- 菅原壽清・時枝務・中山郁編『木曾のおんたけさん―その歴史と信仰』（岩田書店、二〇〇九年七月）
- 瀬沼茂樹編『文芸読本 島崎藤村』（河出書房新社、一九六二年一〇月）
- 十川信介編『藤村文明論集』（岩波書店、一九八八年七月）
- 西川長夫ほか編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』（柏書房、一九九九年二月）
- 日本美術院百年史編纂室編『日本美術院百年史』第七卷（日本美術院、一九九八年五月）
- 日本ペン・クラブ『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペン・クラブ、一九七六年三月）
- 日本文学研究資料刊行会編『島崎藤村 2』（日本文学研究資料叢書、有精堂出版、一九八三年六月）
- 根川幸男、森本豊富編『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化』（明石書店、二〇一二年六月）
- 藤井松一ほか編『日本近代国家と民衆運動 立命館大学人文科学研究所叢書 4』（有斐閣、一九八〇年九月）
- ブラジル日本移民百周年記念協会日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史』第三卷（風響社、二〇一〇年十二月）
- 文学・思想懇話会編『近代の夢と知性―文学・思想の昭和一〇年前後』（翰林書房、二〇〇〇年一〇月）
- 明治文化研究会編『明治文化全集』第五卷 雑史篇（日本評論社、一九六八年一月）
- 吉野作造（代表）編『明治文化全集』第二二卷 雑史篇（日本評論社、一九二九年一〇月）

研究論文

- 阿毛久芳『海へ』（『国文学 解釈と鑑賞』六七（二〇）、二〇〇二年一〇月）
- 新井寛「海へ」「仏蘭西だより」「エトランゼエ」の一考察―フランス時代の藤村と「夜明け前」の前提（『明治大正文学研究』一三、一九五四年七月）
- 岩見照代「旅人をして旅の心を尽くさしめよ―藤村における「エトランゼエ」体験」（『日本文学』四〇、一九九一年一月）
- 大木志門「十五年戦争下の〈文学館運動〉―「文芸懇話会」と「遊就館」、そして島崎藤村」（『日本近代文学』九二、二〇一五年五月）
- 北川忠彦「島崎藤村の「大和言葉の碑文」について」（『女子大国文』九五、一九八四年六月）
- 北川忠彦「大和言葉の碑文」補遺（『島崎藤村研究』一三、一九八五年九月）
- 金貞恵『巡礼』のナシヨナリズム的解釈の可能性（『島崎藤村研究』三一、二〇〇三年九月）
- 栗原悠「島崎藤村『山陰土産』論―「素人」の旅の記録とその戦略性」（『島崎藤村研究』四四、二〇一六年九月）
- 黒田俊太郎「歴史と文学―服部之総「青山半蔵」を読む」（『島崎藤村研究』四〇、二〇一二年九月）
- 黒田俊太郎「二つの近代化論―島崎藤村『海へ』・保田與重郎『明治の精神』（『語文と教育』三〇、二〇一六年八月）
- 小池健男『東方の門』の〈幸運〉」（『島崎藤村研究』二六、一九九八年九月）
- 紅野謙介『新生』における戦争―島崎藤村の「創作」と国民国家」（『日本文学』四四（一一）、一九九五年一月）
- 佐々木基成「〈紀行文〉の作り方―日露戦後の紀行文論争」（『日本近代文学』六四、二〇〇一年五月）
- 佐藤泰正『ある女の生涯』―『春』から『夜明け前』のはざままで（『国文学 解釈と観賞』五五（四）、一九九〇年四月）

高橋章則『夜明け前』における「草叢」をめぐる（『島崎藤村研究』一七、一九八九年九月）

友重幸四郎「藤村「海へ」以後」（『日本文学研究』一四・一五、一九七五・一九七六年一月）

任苔均「島崎藤村の作品における〈海〉の意味——『海へ』を中心に」（『島崎藤村研究』四〇、二〇一二年九月）

細川正義「島崎藤村における国際性と文明批評」（『日本文藝研究』六八、二〇一七年三月）

松島栄一「草叢の間に歴史の視点を定めたりアルさ」（『国文学解釈と鑑賞』二六（六）、一九六一年五月）

目野由希『東方の門』執筆前の藤村（『島崎藤村研究』三五、二〇〇七年九月）

目野由希「南米の島崎藤村——国策的国際文化交流の再考」（『文学研究論集』二六、二〇〇八年一月）

持田叙子「『紀行文の時代』と近代小説の生成——習作期の田山花袋を中心に」（『国学院雑誌』八七（七）、一九八六年七月）

山下曉美「アルゼンチン日本語教育の歴史」（国際学友会日本語学校『紀要』一五、一九九一年九月）

李京僖「保田與重郎の岡倉天心論——三つの架橋の相」（『比較文学』四九、二〇〇六年三月）

和田謹吾「島崎藤村『海へ』——旅と再生」（『国文学 解釈と教材の研究』一八（九）、一九七三年七月）

作家全集・大系

芳賀登・松本三之介校注『国学運動の思想』（日本思想大系五一、岩波書店、一九七一年三月）

宗像和重編『文藝時評大系 大正篇』第五卷大正六年（ゆまに書房、二〇〇六年一〇月）

『市村咸人全集』第五卷（下伊那教育会、一九八〇年八月）

『市村咸人全集』第一二卷（下伊那教育会、一九八一年三月）

『太田水穂全集』第七卷（近藤書店、一九五七年四月）

『折口信夫全集』第二四卷（中央公論社、一九六七年一〇月）

『定本 花袋全集』第一六卷（臨川書店、一九九四年七月）

『荷風全集』第五卷（岩波書店、一九九二年五月）

『西行全集』（文明社、一九四一年二月）

『中村光夫・唐木順三・臼井吉見・竹内好集』（現代日本文學大系七八、筑摩書房、一九七一年一月）